

Y994

J6820



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





漱石全集
第五卷



彼岸過迄行人

Y994
J6820



大正元年十月撮影



I 種
W



1200800777053

Y994
J6820

大正元年十月撮影



I 種
W



1200800777053



大五元 辛十頁 巽邊



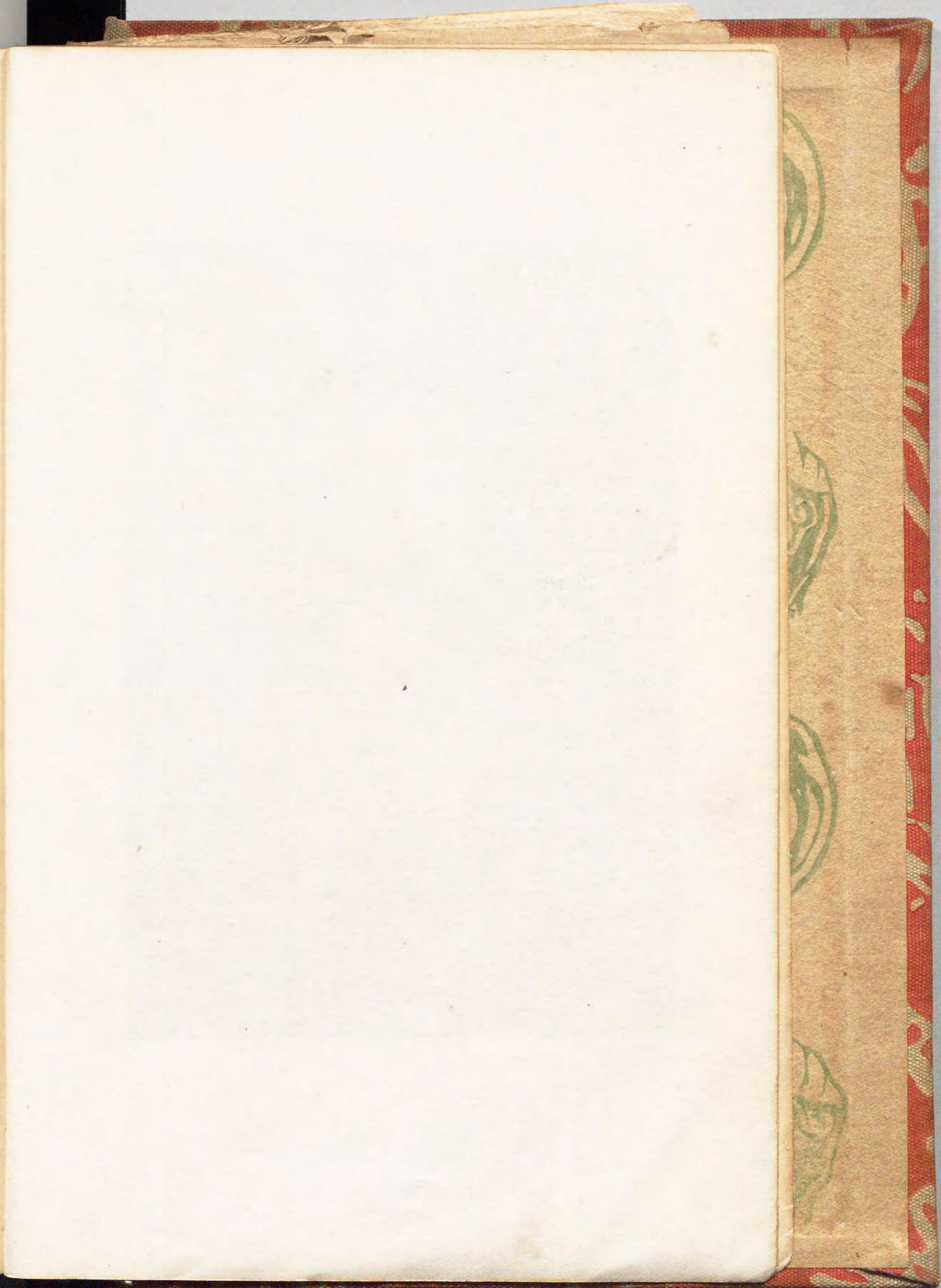
I 種
W



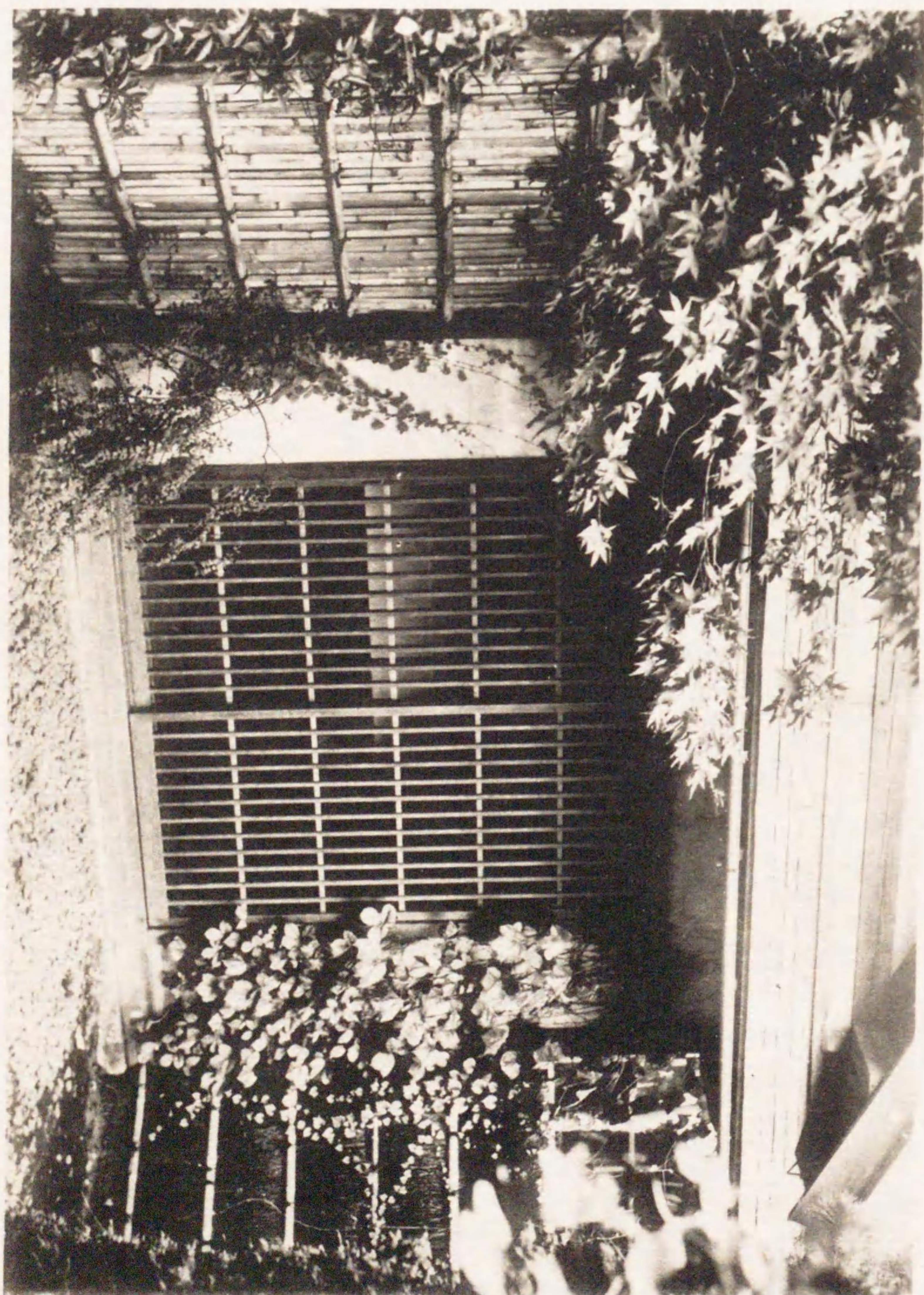
1200800777053



早稲田南町邸の玄関



早稻田南町邸の玄關



早稲田南圃の支關

目次

彼岸過迄

風呂の後	一
停留所	三八
報告	一四六
雨の降る日	一九二
須永の話	二一八
松本の話	三二九
結末	三六八

行

人

友

達

兄

歸つてから

塵 勞

二

三七三

三七三

四六四

五九三

七〇五

彼

岸

過

迄



四五、二、二
四五、四、二九

彼岸過迄に就いて

事實を讀者の前に告白すると、去年の八月頃既に自分の小説を紙上に連載すべき筈だったのである。ところが餘り暑い盛りに大患後の身體を打通ぶつとほしに使ふのは何んなものだらうといふ親切な心配をして呉れる人が出て來たので、それを好い機會しほに、尙二箇月の暇を食ふことに取極めて貰つたのが原もとで、とう／＼其二箇月が過ぎ去つた十月にも筆を執らず、十一十二もつい紙上へは香たる有様で暮らして仕舞つた。自分の當然遣るべき仕事しごとが、斯ういふ風に、崩れた波の崩れながら傳はつて行くやうな具合で、只だらしなく延びるのは決して心持の好いものではない。

歳の改まる元旦から愈書き始める緒口いとぐちを開くやうに事が極まつた時は、長い間抑へられたものが伸びる時の樂みよりは、背中に背負しよはされた義務を片附ける時機が來たといふ意味で先づ何よりも嬉しかつた。けれども長い間抛はなり出して置いた此義務を、何うしたら例よりも手際よく遣つて退けられるだらうかと考へると、又新しい苦痛を感じずには居られない。

久し振だから成るべく面白いものを書かなければ濟まないといふ氣がいくらかある。それに自

分の健康状態やら其他の事情に對して寛容の精神に充ちた取り扱ひ方をして呉れた社友の好意だの、又自分の書くものを毎日日課のやうにして讀んで呉れる讀者の好意だのに、酬いなくては濟まないといふ心持が大分付け加はつて來る。で、何うかして旨いものが出來るやうにと念じてゐる。けれどもたゞ念力丈では作物の出來榮えを左右する譯には何うしたつて行きつこない、いくら佳いものと思つても、思ふやうになるかならないか自分にさへ豫言の出來かねるのが述作の常であるから、今度こそは長い間休んだ埋合せをする積りであると公言する勇氣が出ない。そこに一種の苦痛が潜んでゐるのである。

此作を公にするに方つて、自分はたゞ以上の事丈を言つて置きたい氣がする。作の性質だの、作物に對する自己の見識だの主張だのは今述べる必要を認めてゐない。實をいふと自分は自然派の作家でもなければ象徴派の作家でもない。近頃しばしば耳にするネオ浪漫派の作家では猶更な^い。自分は是等の主義を高く標榜して路傍の人の注意を惹く程に、自分の作物が固定した色に染め附けられてゐるといふ自信を持ち得ぬものである。又そんな自信を不必要とするものである。たゞ自分は自分であるといふ信念を持つてゐる。さうして自分が自分である以上は、自然派でなからうが、象徴派でなからうが、乃至ネオの附く浪漫派でなからうが全く構はない積りである。

自分は又自分の作物を新しい新しいと吹聴する事も好まない。今の世に無暗むくらみに新しがつてゐるものは三越呉服店とヤンキーと夫から文壇に於ける一部の作家と評家だらうと自分はとうから考へてゐる。

自分は凡て文壇に濫用される空疎な流行語を藉りて自分の作物の商標としたくない。たゞ自分らしいものが書きたい丈である。手腕が足りなくて自分以下のものが出來たり、術氣があつて自分以上を装ふ様なものが出來たりして、讀者に濟まない結果を齎すのを恐れる丈である。

東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購讀者は實に何十萬といふ多數に上つてゐる。其内で自分の作物を讀んでくれる人は何人あるか知らないが、其何人かの大部分は恐らく文壇の裏通も露路も覗いた經驗はあるまい。全くたゞの人間として大自然の空氣を眞率に呼吸しつゝ、穩當に生息してゐる丈だらうと思ふ。自分は是等の教育ある且尋常なる士人の前にわが作物を公にし得る自分を幸福と信じてゐる。

「彼岸過迄」といふのは元日から始めて、彼岸過迄書く豫定だから單にさう名づけた迄に過ぎない實は空しい標題みだしである。かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く讀まれはしないだらうかとい

ふ意見を持してゐた。が、つい夫を試みる機会もなくて今日迄過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならば此「彼岸過迄」をかねての思はく通りに作り上げたいと考へてゐる。けれども小説は建築家の圖面と違つて、いくら下手でも活動と發展を含まない譯に行かないので、たとひ自分が作るとは云ひながら、自分の計畫通りに進行しかねる場合がよく起つて來るのは、普通の實世間に於て吾々の企てが意外の障害を受けて豫期の如くに纏まらないのと一般である。従つて是はずつと書き進んで見ないと一寸分らない全く未來に屬する問題かも知れない。けれどもよし旨く行かなくつても、離れるとも即くとも片の附かない短篇が續く丈の事だらうとは豫想出來る。自分は夫でも差支へなからうと思つてゐる。(明治四十五年一月此作を朝日新聞に公にしたる時の緒言)

風呂の後

一

敬太郎は夫程驗の見えない此間からの運動と奔走に少し厭氣が注して來た。元々頑丈に出來た身體だから單に馳け歩くといふ勞力だけなら大して苦にもなるまいとは自分でも承知してゐるが、思ふ事が引つ懸かつたなり居据わつて動かなかつたり、又は引つ懸からうとして手を出す途端にすぼりと外れたりする反間が度重なるに連れて、身體よりも頭の方が段々云ふ事を聞かなくなつて來た。で、今夜は少し癢も手傳つて、飲みたくもない麥酒をわざとポン／＼抜いて、出來るだけ快裕な氣分を自分と誘つて見た。けれども何時迄經つても、特更に借り着をして陽氣がらうとする自覺が退かないので、仕舞に下女を呼んで、其所いらを片附けさせた。下女は敬太郎の

顔を見て、「まあ田川さん」と云つたが、其後から又「本當にまあ」と附け足した。敬太郎は自分の顔を撫でながら、「赤いだらう。こんな好い色を何時迄も電燈に照らして置くのは勿體ないから、もう寐るんだ。序に床を取つて呉れ」と云つて、下女がまだ何か遣り返さうとするのをわざと外して廊下へ出た。さうして便所から歸つて夜具の中に潜り込む時、まあ當分休養する事にするんだと口の内で呟いた。

敬太郎は夜中に二返眼を覺ました。一度は咽喉が渴いたため、一度は夢を見たためであつた。三度目に眼が開いた時は、もう明るくなつてゐた。世の中が動き出してゐるなと氣が附くや否や敬太郎は、休養々と云つて又眼を眠つて仕舞つた。其次には氣の利かないボン／＼時計の大きな音が無遠慮に耳に響いた。夫からは後はいくら苦心しても寐附かれなかつた。己むを得ず横になつた儘巻煙草を一本吸つてゐると、半分程に燃えて來た敷島の先が崩れて、白い枕が灰だらけになつた。それでも彼は凝としてゐる積りであつたが、仕舞に東窓から射し込む強い日脚に打たれた氣味で、少し頭痛がし出したので、漸く我を折つて起き上がったなり、楊枝を銜へた儘、手拭をぶら下げて湯に行つた。

湯屋の時計はもう十時少し廻つてゐたが、流しの方はからりと片附いて、小桶一つ出てゐない。

たゞ浴槽の中に一人横向きになつて、硝子越しに射し込んでくる日光を眺めながら、香氣さうにぢやぶ／＼遣つてるものがある。それが敬太郎と同じ下宿にゐる森本といふ男だつたので、敬太郎はやあ御早うと聲を掛けた。すると、向うでも、やあ御早うと挨拶をしたが、

「何です今頃楊枝などを銜へ込んで、冗談ぢやない。さう云やあ昨夕貴方の部屋に電氣が點いて居ない様でしたね」と云つた。

「電氣は宵の口から煙々と點いてゐたさ。僕は貴方と違つて品行方正だから、夜遊びなんか滅多にした事はありませんよ」

「全くだ。貴方は堅いからね。羨ましい位堅いんだから」

敬太郎は少し羞痒たいやうな氣がした。相手を見ると依然として横隔膜から下を湯に浸けた儘、まだ飽きずにぢやぶ／＼遣つてゐる。さうして比較的眞面目な顔をしてゐる。敬太郎は此氣樂さうな男の口髭がだらしなく濡れて一本々々下向きに垂れた處を眺めながら、

「僕の事は何うでも好いが、貴方は何うしたんです。役所は」と聞いた。すると森本は倦怠さうに浴槽の側に兩腕を置いて其上に額を載せながら俯伏しになつた儘、

「役所は御休みです」と頭痛でもする人のやうに答へた。

「何で」

「何でもないが、僕の方で御休みです」

敬太郎は思はず自分の同類を一人発見したやうな気がした。夫でつい、「矢つ張り休養ですか」と云ふと、相手も「え、休養です」と答へたなり元の通り湯槽の側に突伏してゐた。

二

敬太郎が留桶の前へ腰を卸ろして、三助に垢擦りを掛けさせてゐる時分になつて、森本はやつと烟の出るやうな赤い身體を全く湯の中から露出した。さうして、あゝ好い心持だといふ顔附で、流しの上へべたりと胡坐をかいたと思ふと、

「貴方は好い體格だね」と云つて敬太郎の肉附きを賞め出した。

「是で近頃は大分悪くなつた方です」

「どうして、夫で悪かつた日にや僕なんざあ」

森本は自分で自分の腹をポン／＼叩いて見せた。其腹は凹んで背中の方へ引つ附けられてる様であつた。

「何しろ商賣が商賣だから身體は毀す一方ですよ。尤も不養生も大分遣りましたかね」と云つた後で、急に思ひ出したやうにアハ、と笑つた。敬太郎は夫に調子を合はせる氣味で、

「今日は僕も閑だから、久し振で又貴方の昔話でも伺ひませうか」と云つた。すると森本は、

「え、話させよう」とすぐ乗り氣な返事をしたが、活潑なのはたゞ返事丈で、舉動の方は緩慢といふよりも、凡ての筋肉が湯に燂でられた結果、當分作用を中止してゐる姿であつた。

敬太郎が石鹼を塗けた頭をゴシ／＼いはしたり、堅い足の裏や指の股を擦つたりする間、森本は依然として胡坐をかいた儘、何處一つ洗ふ氣色は見えなかつた。最後に瘡せた一塊の肉團をどぶりと湯の中に抛り込むやうに浸けて、敬太郎と略同時に身體を拭きながら上がつて來た。さうして、

「たまに朝湯へ來ると綺麗で好い心持ですな」と云つた。

「え、貴方のは洗ふんでなくつて、本當に湯に這入るんだから殊にさうだらう。實用の爲の入湯でなくつて、快感を貪る爲の入浴なんだから」

「さう六づかしい這入り方でもないんでせうが、何うも斯んな時に身體なんか洗ふな億劫だね。つい盆鎗浸かつて盆鎗出ちまひますよ。其所へ行くと、貴方は三層倍も勤勉だ。頭から足から何

處から何處迄實によく手落ちなく洗ひますね。御負けに楊枝迄使つて。あの綿密な事には僕も殆ど感心しちまつた」

二人は連れ立つて湯屋の門口を出た。森本が一寸通行つて巻紙を買ふからといふので、敬太郎も付き合ふ氣になつて、横丁を東へ切れると、道が急に悪くなつた。昨夕の雨が土を潤かし抜いた處へ、今朝からの馬や車や人通りで、踏み返したり蹴上げたりした泥の痕を、二人は厭ふやうな輕蔑するやうな様子で歩いた。日は高く上つてゐるが、地面から吸ひ上げられる水蒸氣はいまだに微かな波動を地平線の上に描いてゐるらしい感じがした。

「今朝の景色は寮坊の貴方に見せたい様だつた。何しろ日がかん／＼當たつてる癖に靄が一杯なんでせう。電車を此方から透かして見ると、乗客が丸で障子に映る影畫の様に、はつきり一人一人見分けられるんです。それでゐて御天道様が向う側にあるんだから其一人々々が何れも是もみんな灰色の化物に見えるんで、頗る奇觀でしたよ」

森本は斯んな話しをしながら、紙屋へ這入つて巻紙と狀袋で膨らました懷を一寸抑へながら出て來た。表に待つて居た敬太郎はすぐ今來た道の方へ足を向け直した。二人は其儘一所に下宿へ歸つた。上靴の踵を鳴らして階段を二つ上り切つた時、敬太郎は自分の部屋の障子を手早く開け

て、

「さあ何うぞ」と森本を誘つた。森本は、

「もう直き午飯でせう」と云つたが、躊躇すると思ひの外、恰も自分の部屋へでも這入るやうな無難な態度で、敬太郎の後に跟いて來た。さうして、

「貴方の室から見た景色は何時見ても好いね」と自分で窓の障子を開けながら、手摺附きの縁板の上へ濡手拭を置いた。

三

敬太郎は此瘠せながら大した病氣にも罹らないで、毎日新橋の停車場へ行く男について、平生から一種の好奇心を有つてゐた。彼はもう三十以上である。夫でいまだに一人で下宿住居をして停車場へ通勤してゐる。然し停車場で何の係りをして、何んな事務を取扱つてゐるのか、つひど當人に聞いた事もなければ、又向うから話した試しもないので、敬太郎には一切がXである。たまたま人を送つて停車場へ行く場合もあるが、そんな時にはつい混雜に取り紛れて、停車場と森本とを一所に考へる程の餘裕も出ず、さうかと云つて、森本の方から自己の存在を思ひ起させる

様に、敬太郎の眼につくべき所へ顔を出す機会も起らなかつた。たゞ長い間同じ下宿に立て籠もつてゐるといふ縁故だか同情だかが本で、いつの間にか挨拶をしたり世間話をする仲になつた迄である。

だから敬太郎の森本に對する好奇心といふのは、現在の彼にあると云ふよりも、寧ろ過去の彼にあると云つた方が適當かも知れない。敬太郎はいつか森本の口から、彼が歴乎とした一家の主人公であつた時分の話を聞いた。彼の女房の話も聞いた。二人の間に出来た子供の死んだ話も聞いた。「餓鬼が死んで呉れたんで、まあ助かつたやうなもんでさあ。山神の祟には實際恐れを作してゐたんですからね」と云つた彼の言葉を、敬太郎は未だに覚えてゐる。其時しかも山神が分らなくつて、何だと聞き返したら、山の神の漢語ぢやありませんかと教へられた可笑しさ迄まだ記憶に残つてゐる。夫等を思ひ出して、敬太郎から見ると、凡て森本の過去には一種ロマンスの臭が、箒星の尻尾の様にぼうつと掩被さつて怪しい光を放つてゐる。

女に就いて出来たとか切れたとかいふ逸話以外に、彼は又様々な冒險譚の主人公であつた。まだ海豹島へ行つて臘臍は打つて居ない様であるが、北海道の何處かで鮭を漁つて儲けた事は慥かであるらしい。夫から四國邊の或山から安質莫尼が出ると觸れて歩いて、決して出なかつた事

も、當人がさう自由する位だから事實に違ひない。然し最も奇抜なのは呑口會社の計畫で、是は酒樽の呑口を作る職人が東京に極少ないといふ所から思ひ附いたのださうだが、折角大阪から呼び寄せた職人と衝突した爲に成立しなかつたと云つて彼は未だに残念がつてゐる。

儲け口を離れた普通の浮世話になると、彼は又非常に豊富な材料の所有者であるといふ事を容易に證據立てる。筑摩川の上流の何とかいふ所から河を隔てて向うの山を見ると、巖の上に熊がごろ／＼晝寐をしてゐるなどは未だ尋常の方なので、それが一層色づいて來ると、信州戸隠山の奥の院といふのは普通の人の登れつこない難所なのに、夫を盲目が天邊迄登つたから驚いたなどといふ。其所へ御參りをするには、どんなに脚の達者なものでも途中で一晩明かさなければならぬので、森本も仕方なしに五合目あたりで焚火をして夜の寒さを凌いでゐると、下から鈴の響が聞こえて來たから、不思議に思つてゐるうちに、其鈴の音が段々近くなつて、仕舞に座頭が上つて來たんだと云ふ。しかも其座頭が森本に今晚はと挨拶をして又すた／＼上つて行つたと云ふんだから、餘り妙だと思つて猶能く聞いて見ると、實は案内者が一人附いてゐたのださうである。其案内者の腰に鈴を着けて、後から來る盲目が其鈴の音を頼りに上る事が出来るやうにしてあつたのだと説明されて、稍納得も出來たが、それにしても敬太郎には随分意外な話である。が、夫

10
がもう少し高じると、殆ど妖怪談に近い妙なものとなつて、だらしない彼の口髭の下から最も慇懃に發表される。彼が耶馬溪を通つた序に、羅漢寺へ上つて、日暮に一本道を急いで、杉並木の間を下りて來ると、突然一人の女と擦れ違つた。其女は臙脂を塗つて白粉をつけて、婚禮に行く時の髪を結つて、裾模様の振袖に厚い帯を締めて、草履穿きの儘たつた一人すたく／＼羅漢寺の方へ上つて行つた。寺に用のある筈はなし、又寺の門はもう締まつてゐるのに、女は盛装した儘暗い所をたつた一人で上つて行つたんださうである。——敬太郎はこんな話を聞く度にへえーと云つて、信じられ得ない意味の微笑を洩らすに拘らず、矢つ張り相當の興味と緊張を以て森本の辯口を迎へるのが例であつた。

四

此日も例によつて例の様な話が出るだらうといふ下心から、わざと廻り路迄して一所に風呂から歸つたのである。年こそ夫程取つてゐないが、森本のやうに、大抵な世間の關門を潜つて來たと思はれない男の経歴談は、此夏學校を出た許りの敬太郎に取つては、多大の興味があるのみではない、聞き様次第で随分利益も受けられた。

其上敬太郎は遺傳的に平凡を忌む浪漫趣味の青年であつた。かつて東京の朝日新聞に兒玉音松とかいふ人の冒險談が連載された時、彼は丸で丁年未滿の中學生のやうな熱心を以て毎日それを迎へ読んでゐた。其中でも音松君が洞穴の中から躍り出す大蛸と戦つた記事を大變面白がつて、同じ科の學生に、君、蛸の大頭を目懸けて短銃をポン／＼打つたんだが、つる／＼滑つて少しも手應へがないといふぢやないか。其内大將の後からぞろ／＼出て來た小蛸がぐるりと環を作つて彼を取り巻いたから何を思ふと、どつちが勝つか熱心に見物してゐるんださうだからねと大いに乗り氣で話した事がある。すると其友達が調戲ひ半分に、君の様な剽輕ものは到底文官試験などを受けて地道に世の中を渡つて行く氣になるまい、卒業したら、一層の事思ひ切つて南洋へでも出掛けて、好きな蛸狩でもしたら何うだと云つたので、夫以來「田川の蛸狩」といふ言葉が友達間に大分流行り出した。此間卒業して以來足を挿木の様にして世の中への出口を探して歩いてゐる敬太郎に會ふたびに、彼等はどうだね蛸狩は成功したかいと聞くのが常になつてゐた位である。

南洋の蛸狩はいかな敬太郎にもちと奇抜過ぎるので、眞面目に思ひ立つ勇氣も出なかつたが、新嘉坡の護謨林栽培などは學生のうち既に目論んで見た事がある。當時敬太郎は、果てしのない

廣野を埋め盡くす勢いで何百萬本といふ護謨の樹が茂つてゐる真中に、一階建のバンガローを拵へて、其中に栽培監督者としての自分が朝夕起臥する様を想像して己まなかつた。彼はバンガローの床をわざと裸にして、其上に大きな虎の皮を敷く積りであつた。壁には水牛の角を塗り込んで、夫に鐵砲を懸け、猶其下に錦の袋に入れた儘の日本刀を置く筈にした。さうして自分は眞白なターバンをぐる／＼頭へ巻き付けて、廣いエランダに据ゑ付けてある籐椅子の上に寐そべりながら、強い香のハバナをふかり／＼と鷹揚に吹かす氣であつた。夫のみか、彼の足の下には、スマタラ産の黒猫、——天鵞絨の様な毛並と黄金其儘の眼と、それから身の丈よりも餘程長い尻尾を持つた怪しい猫が、背中を山の如く高くして蹲踞つてゐる譯になつてゐた。彼はあらゆる想像の光景を斯く自分に満足の行くやうに豫め整へた後で、愈實際の算盤に取り掛かつたのである。所が案外なもので、まづ護謨を植ゑる爲の地面を借り受けるのに大分な手數と暇が要る。夫から借りた地面を切り開くのが容易の事でない。次に地ならし植附けに費やすべき金高が意外に多い。其上絶えず人夫を使つて草取りをした上で、六年間苗木の生長するのを馬鹿見たやうに凝と指を銜へて見てゐなければならぬ段になつて、敬太郎は既に十分退却に價すると思ひ出した所へ、彼に色々の事情を教へてくれた護謨通は、今暫くすると、あの邊で出来る護謨の供給が、世界の

需用以上に超過して、栽培者は非常の恐慌を起すに違ひないと威嚇したので、彼は其後護謨の護の字も口にしなくなつて仕舞つたのである。

五

けれども彼の異常に對する嗜欲は中々是位の事で冷却しさうには見えなかつた。彼は都の真中に居て、遠くの人や國を想像の夢に上して楽しんでゐる計りでなく、毎日電車の中で乗り合はせる普通の女だの、又は散歩の道すがら行き逢ふ實際の男だのを見てさへ、悉く尋常以上に奇なあるものを、マントの裏かコートの袖に忍ばして居はしないだらうかと考へる。さうして何うか此のマントやコートを引つ繰り返して其奇な所をたゞ一目で好いからちらりと見た上、後は知らん顔をして濟ましてゐたいやうな氣になる。

敬太郎の此傾向は、彼がまだ高等學校に居た時分、英語の教師が教科書としてスチーヴンソンの新亞刺比亞物語といふ書物を讀ました頃から段々頭を持ち上げ出したやうに思はれる。夫迄彼は大の英語嫌ひであつたのに、此書物を讀むやうになつてから、一回も下讀を怠らずに、中てられさへすれば、必ず起立して譯を附けたのでも、彼が如何にそれを面白がつてゐたかが分る。あ

る時彼は興奮の餘り小説と事實の區別を忘れて、十九世紀の倫敦に實際こんな事があつたんでせうかと眞面目な顔をして教師に質問を掛けた。其教師はつい此間英國から歸つた許りの男であつたが、黒いメルトンのモーニングの尻から麻の手帛を出して鼻の下を拭ひながら、十九世紀どころか今でもあるでせう。倫敦といふ所は實際不思議な都ですと答へた。敬太郎の眼は其時驚嘆の光を放つた。すると教師は椅子を離れてこんな事を云つた。

「尤も書き手が書き手だから観察も奇抜だし、事件の解釋も自ら普通の人間とは違ふんで、斯んなものが出来上がったのかも知れません。實際スチーヴンソンといふ人は辻待ちの馬車を見てさへ、其所に一種のロマンスを見出だすといふ人ですから」

辻馬車とロマンスに至つて敬太郎は少し分らなくなつたが、思ひ切つて其説明を聞いて見て、始めて成程と悟つた。夫から以後は、此平凡極まる東京の何所にでもごろ／＼して、最も平凡を極めてゐる辻待ちの人力車を見るたんびに、此車だつて昨夕人殺しをする爲の客を出刃ぐるみ乗せて一散に馳けたのかも知れないと考へたり、又は追手の思はくとは反對の方角へ走る汽車の時間間に合ふ様に、美しい女を幌の中に隠して、何處かの停車場へ飛ばしたのかも分らないと思つたりして、一人で怖がるやら、面白がるやら頻りに喜んでゐた。

そんな想像を重ねるにつけ、是程込み入つた世の中だから、たとひ自分の推測通りと迄行なかつても、何處か尋常と變つた新しい調子を、彼の神経にはつと響かせ得るやうな事件に、一度位は出會つて然るべき筈だといふ考へが自然と起つてきた。所が彼の生活は學校を出て以來たゞ電車に乗るのと、紹介状を貰つて知らない人を訪問する位のもので、其他に何といつて取り立てて云ふべき程の小説は一つもなかつた。彼は毎日見る下宿の下女の顔に飽き果てた。毎日食ふ下宿の菜にも飽き果てた。切めて此單調を破るために、満鐵の方が出来るとか、朝鮮の方が纏まるとかすれば、まだ衣食の途以外に、幾分かの刺激が得られるのだけれども、兩方共二三日前に當分望みがないと判然して見ると、益眼前の平凡が自分の無能力と密切な關係でもあるかのやうに思はれて、ひどく益鎗して仕舞つた。夫で糊口の爲の奔走は勿論の事、往來に落ちたばら錢を採つて歩くやうな長閑な氣分で、電車に乗つて、漫然と人事上の探検を試みる勇氣もなくなつて、昨夕は左程好きでもない麥酒を大いに飲んで寐たのである。

こんな時に、非凡の經驗に富んだ平凡人とても評しなれば評しやうのない森本の顔を見るのは、敬太郎に取つて既に一種の興奮であつた。巻紙を買ふ御供迄して彼を自分の室へ連れ込んだのは是が爲である。

森本は窓際へ坐つて少時下の方を眺めてゐた。

「貴方の室から見た景色は相變らず好うがすね、ことに今日は好い。あの洗ひ落としたやうな空の裾に、色づいた樹が、所々暖かく塊まつてゐる間から赤い煉瓦が見える様子は、慥かに畫になりさうですな」

「さうですな」

敬太郎は己むを得ず斯ういふ答をした。すると森本は自分が肱を乗せてゐる窓から一尺ばかり出張つた縁板を見て、

「此所は何うしても盆栽の一つや二つ載せて置かないと納まらない所ですよ」と云つた。

敬太郎は成程そんなものかと思つたけれども、もう「左様ですな」を繰り返す勇氣も出なかつたので、

「貴方は畫や盆栽迄解るんですか」と聞いた。

「解るんですかは少し恐れ入りましたな。全く柄にないんだから、さう聞かれても仕方はない

が、——然し田川さんの前だが、斯う見えて盆栽も弄くるし、金魚も飼ふし、一時は畫も好きで能く描いたもんですよ」

「何でも遣るんですな」

「何でも屋に碌なものなしで、とう／＼斯んなものになつちやつた」

森本はさう云ひ切つて、自分の過去を悔ゆるでもなし、又其の現在を悲觀するでもなし、殆ど鋭い表情の何處にも出てゐない不斷の顔をして敬太郎を見た。

「然し僕は貴方見たやうに變化の多い經驗を、少しでも好いから嘗めて見たいと何時でもさう思つてゐるんです」と敬太郎が眞面目に云ひ掛けると、森本は恰も酔つ拂ひのやうに、右の手を自分の顔の前へ出して、大袈裟に右左に振つて見せた。

「それが極悪い。若い内——と云つた所で、貴方と僕はさう年も違つてゐないやうだが、——兎に角若い内は何でも變つた事が爲て見たいもんでね。所が其變つた事を仕盡くした上で、考へて見ると、何だ馬鹿らしい、こんな事なら爲ない方が餘つ程増したと思ふ丈でさあ。貴方なんざ、是からの身體だ。大人しくさへして居りや何んな發展でも出来ようつてもんだから、肝心な所で山氣だの謀叛氣だのつて低氣壓を起しちや親不孝に當たらあね。——時に何うです、此間から伺

はう伺はうと思つて、つい忙しくつて、伺はずにゐたんだが、何か好い口は見附かりましたか」
正直な敬太郎は無然として有りの儘を答へた。さうして、到底當分是といふ期待もないから、
奔走をやめて少し休養する積りであると附け加へた。森本は一寸驚いたやうな顔をした。

「へえー、近頃は大學を卒業しても、ちよつと一才口が見附からないもんですかねえ。餘つ
程不景氣なんだね。尤も明治も四十何年といふんだから、其筈には違ひないが」

森本は此處迄来て少し首を傾げて、自分の哲理を自分で噛み締めるやうな素振をした。敬太郎
は相手の様子を見て、夫程滑稽とも思はなかつたが、心の内で、此男は心得があつてわざと斯ん
な言葉遣ひをするのだらうか、又は無學の結果斯うより外言ひ現はす手段を知らないのだらうか
と考へた。すると森本が傾けた首を急に豎に直した。

「何うです、御厭でなさや、鐵道の方へでも御出なすつちや。何なら話して見ませうか」

如何な浪漫的な敬太郎も此男に頼んだら好い地位が得られるとは想像し得なかつた。けれども
左も軽々と云つて退ける彼の愛嬌を、翻弄と解釋する程の僻みも有たなかつた。據處なく苦笑し
ながら、下女を呼んで、

「森本さんの御膳も此所へ持つて來るんだ」と云ひ附けて、酒を命じた。

七

森本は近頃身體の爲に酒を慎んでゐると斷りながら、注いで遣りさへすれば、すぐ猪口を空に
した。仕舞にはもう止ませうといふ口の下から、自分で徳利の尻を持ち上げた。彼は平生から
閑靜なうちに何處か氣樂な風を帯びてゐる男であつたが、猪口を重ねるにつれて、其閑靜が熱つ
てくる、氣樂は次第々に膨脹するやうに見えた。自分でも「斯うなりや併呑自若たるもんだ。
明日免職になつたつて驚くんぢやない」と威張り出した。敬太郎が飲めない口なので、時々思ひ
出すやうに、盃に唇を附けて、附き合つてゐるのを見て、彼は、

「田川さん、貴方本當に飲けないんですか、不思議ですね。酒を飲まない癖に冒險を愛するな
んて。あらゆる冒險は酒に始まるんです、さうして女に終るんです」と云つた。彼はつい今迄自
分の過去を碌でなしの様に蹴なしてゐたのに、酔つたら急に模様が變つて、後光が逆に射すと
も評すべき態度で、氣嚔を吐き始めた。さうして夫が大抵は失敗の氣嚔であつた。しかも敬太郎
を前に置いて、

「貴方なんざあ、失禮ながら、まだ學校を出た許りで本當の世の中は御存じないんだからね。

いくら學士で御座いの、博士で候のつて、肩書ばかり振り廻したつて、僕は憎えない積りだ。此方やちやんと實地を踏んで來てゐるんだもの」と、さつき迄教育に對して多大の尊敬を拂つてゐた事は丸で忘れた様な風で、無遠慮な極め附け方をした。さうかと思ふと噫の様な溜息を洩らして自分の無學をさも情なさうに恨んだ。

「まあ手つ取り早く云やあ、此世の中を猿同然渡つて來たんでさあ。斯う申しちや可笑しいが、貴方より十層倍の經驗は慥かに積んでる積りです。それでゐて、未だに此通り解脫が出来ないのは、全く無學即ち學がないからです。尤も教育があつちや、斯う無暗矢鱈と變化する譯にも行かないやうなもんかも知れせんよ」

敬太郎はさつきから氣の毒なる先覺者とも云つた様に相手を考へて、其云ふ事に相應の注意を拂つて聞いてゐたが、なまじひ酒を飲ましたためか、今日は何時もより氣餒だの愚癡だのが多くつて、例のやうに純粹の興味が湧かないのを残念に思つた。好い加減に酒を切り上げて見たが、矢つ張り物足らなかつた。夫で新しく入れた茶を勧めながら、

「貴方の經歷談は何時聞いても面白い。夫計りでなく、僕のやうな世間見ずは、御話を伺ふたんに利益を得ると思つて感謝してゐるんだが、貴方が今迄遣つて來た生活のうちで、最も愉快

だつたのは何ですか」と聞いて見た。森本は熱い茶を吹き、少し充血した眼を二三度ぱちつかせて黙つてゐた。やがて深い湯呑を干して仕舞ふと、斯う云つた。

「さうですね。遣つた後で考へると、みんな面白いし、又みんな詰らないし、自分ぢや一寸見分けが附かないんだが。——全體愉快つてえのは、その、女つ氣のある方を指すんですか」

「さう云ふ譯でもないんですが、有つたつて差支へありません」

「なんて、實は其方の方が聞きたいんでせう。——然し雜談抜きでね、田川さん。面白い面白くないは倍置いて、あれ程呑氣な生活は世界に又となからうといふ奴を遣つた覚えがあるんですよ。そいつを一つ話させうか、御茶受けの代りに」

敬太郎は一も二もなく所望した。森本は「ぢやあ一寸小便をして來る」と云つて立ち掛けたが、「其代り斷つて置くが女つ氣はありせんよ。女つ氣どころか、第一人間の氣がないんだもの」と念を押して廊下の外へ出て行つた。敬太郎は一種の好奇心を抱いて、彼の歸るのを待ち受けた。

八

所が五分待つても十分待つても冒険家は容易に顔を現はさなかつた。敬太郎はとう／＼凝と我

慢し切れなくなつて、自分で下へ降りて用場を探して見ると、森本の影も形も見えない。念の爲
 又階段を上がつて、彼の部屋の前まで来ると、障子を五六寸明け放した儘、真中に手枕をしてご
 ろりと向うむきに轉がつてゐるものが即ち彼であつた。「森本さん、森本さん」と二三度呼んで
 見たが、中々動きさうにないので、流石の敬太郎も勃として、いきなり室に這入り込むや否や、
 森本の首筋を攫んで強く揺振つた。森本は不意に蜂にでも螫されたやうに、あつと云つて半ば跳
 ね起きた。けれども振り返つて敬太郎の顔を見ると同時に、又すぐ夢現のたるい眼附に戻つて、
 「やあ貴方ですか。あんまり頂戴した所爲か、少し氣分が變になつたもんだから、此所へ来て
 一寸休んだらつい眠くなつて」と辯解する様子に、是といつて他を愚弄する體もないので、敬太
 郎もつい怒れなくなつた。然し彼の待ち設けた冒険談は是で一頓挫を來したも同然なので、一人
 自分の室に引き取らうとすると、森本は「どうも濟みません、御苦勞様でした」と云ひながら、
 又後から敬太郎に附いて來た。さうして先刻迄自分の坐つて居た座蒲團の上に、きちんと膝を折
 つて、

「ぢや愈世界に類のない吞氣生活の御話でも始めますかな」と云つた。

森本の吞氣生活といふのは、今から十五六年前彼が技手に雇はれて、北海道の内地を測量して

歩いた時の話であつた。固より人間の居ない所に天幕を張つて寐起きをして、用が片附き次第、
 又天幕を擔いで、先へ進むのだから、當人の斷つた通り、到底女つ氣のありよう筈はなかつた。
 「何しろ高さ二丈もある熊笹を切り開いて途を附けるんですからね」と彼は右手を額より高く
 上げて、如何に熊笹が高く茂つてゐたかを形容した。其切り開いた途の兩側に、朝起きて見ると、
 蝮蛇がとぐろを巻いて日光を鱗の上に受けてゐる。それを遠くから棒で抑へて置いて、傍へ寄つ
 て打ち殺して肉を焼いて食ふのだと彼は話した。敬太郎がどんな味がすると聞くと、森本は能く
 思ひ出せないが、何でも魚肉と獸肉の間位だらうと答へた。
 テントの中へは熊笹の葉と小枝を山の様に積んで、其上に疲れた身體を埋めぬ許りに投げ掛ける
 のが例であるが、時には外へ出て焚火をして、大きな熊を眼の前に見る事もあつた。蟲が多いの
 で蚊帳は始終釣つてゐた。ある時其蚊帳を擔いで谷川へ下りて、何とかいふ川魚を掬つて歸つた
 ら、其晩から蚊帳が急に腥くなつて困つた。——凡て是等は森本の所謂吞氣生活の一部分であつ
 た。

彼は又山であらゆる茸を採つて食つたさうである。ます茸といふのは廣蓋程の大きさで、切つ
 て味噌汁の中へ入れて煮ると丸で蒲鉾のやうだとか、月見茸といふのは一抱へもあるけれども、

是は残念だが食へないとか、鼠茸といふのは三つ葉の根のやうで可愛らしいとか、中々精しい説明をした。大きな笠の中へ、野葡萄を一杯採つて来て、それ計り貪つてゐたものだから、仕舞に舌が荒れて、飯が食へなくなつて困つたといふ話も序に附け加へた。

食ふ話ばかりかと思ふと、又一週間絶食をしたといふ悲惨な物語もあつた。それはみんなの糧が盡きたので、人足が村迄米を取りに行つた留守中に大變な豪雨があつた時の事である。元々村へ出るには、澤邊迄降りて、澤傳ひに里へ下るのだから、俄雨で谷が急に一杯になつたが最後、米など背負つて歸れる譯のものでない。森本は腹が減つて仕方がないから、凝と仰向けに寝て、たゞ空を眺めてゐた所が、仕舞にぼんやりし出して、夜も晝も滅茶苦茶に分らなくなつたさうである。

「さう長い間飲まず食はずぢや、兩便とも留まるでせう」と敬太郎が聞くと、「いえ何、矢つ張り有りますよ」と森本は頗る氣樂さうに答へた。

九

敬太郎は微笑せざるを得なかつた。然し夫よりも可笑しく感じたのは、森本の形容した大風の

勢ひであつた。彼等の一行が測量の途次茫々たる芒原の中で、突然面も向けられない程の風に出會つた時、彼等は四つ這ひになつて、つい近所の密林の中へ逃げ込んだ所が、一抱へも二抱へもある大木の枝も幹も凄じい音を立てて、一度に風から痛振られるので、其動搖が根に傳はつて、彼等の踏んでゐる地面が、地震の時の様にぐらぐらしたと云ふのである。

「それぢや假令林の中へ逃げ込んだ所で、立つてゐる譯に行かないでせう」と敬太郎が聞くと、「無論突伏してゐました」といふ答であつたが、いくら非道い風だつて、土の中に張つた大木の根が動いて、地震を起す程の勢ひがあらうとは思へなかつたので、敬太郎は覺えず吹き出して仕舞つた。すると森本も丸で他事の様に同じく大きな聲を出して笑ひ始めたが、夫が濟むと、急に眞面目になつて、敬太郎の口を抑へるやうな手附をした。

「可笑しいが本當です。何うせ常識以下に飛び離れた經驗をする位の僕だから、不中用にやあ違ひないが本當です。——尤も貴方見たいに學のあるものが聞きあ全く嘘のやうな話さね。だが田川さん、世の中には大風に限らず随分面白い事が澤山あるし、又貴方なんざ其面白い事に打つからう打つからうと苦勞して御出でなさる御様子だが、大學を卒業しちやもう駄目ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思ひますからね。よしんば自分でいくら身を落とす積りで掛かつ

ても、まさか親の敵討ぢやなしね、さう眞剣に自分の位地を棄てて漂浪するほどの物數奇も今の世にはありませんからね。第一傍がさう爲せないから大丈夫です」

敬太郎は森本の此言葉を、失意のやうにも又得意のやうにも聞いた。さうして腹の中で、成程常調以上の變つた生活は、普通の學士などには送れないかも知れないと考へた。所がそれを自分にさへ抑へたい氣がするので、わざと抵抗するやうな語氣で、

「だつて、僕は學校を出たには出たが、未だに位置などは無いんですぜ。貴方は位置々々つて頻りに云ふが。——實際位置の奔走にも厭さくして仕舞つた」と投げ出すやうに云つた。すると森本は比較的嚴肅な顔をして、

「貴方は位置がなくつて有る。僕のは位置が有つて無い。それ丈が違ふんです」と若いものに教へる態度で答へた。けれども敬太郎には此御籤めいた言葉が左程の意義を齎さなかつた。二人は少しの間煙草を吹かして黙つてゐた。

「僕もね」とやがて森本が口を開いた。「僕もね、斯うやつて三年越し、鐵道の方へ出てゐるが、もう厭になつたから近々罷めようと思ふんです。尤も僕の方で罷めなけりや向うで罷める丈なんだからね。三年越しと云やあ僕にしちや長い方でさあ」

敬太郎は罷めるが好からうとも罷めないが好からうとも云はなかつた。自分が罷めた經驗も罷められた閱歴もないので、他の進退などは何うでも構はない様な氣がした。たゞ話しが理に落ち面白くないといふ自覺丈あつた。森本は夫と察したか、急に調子を易へて、世間話を快活に十分程した後で、「いや何うも御馳走でした。——兎に角田川さん若いうちの事ですよ、何を遣るのも」と、恰も自分が五十位の老人のやうなことを云つて歸つて行つた。

夫から一週間許りの間、田川は落ち附いて森本と話す機會を有たなかつたが、二人共同じ下宿にゐるのだから、朝か晩に彼の姿を認めない事は殆ど稀であつた。顔を洗ふ所などで落ち合ふ時、敬太郎は彼の着てゐる黒襟の掛かつたドテラが常に目に附いた。彼は又襟開の廣い新調の背廣を着て、妙な洋杖を突いて、役所から歸ると能く出て行つた。其洋杖が土間の瀬戸物製の傘入れに入れてあると、はゝあ先生今日は宅に居るなと思ひながら敬太郎は常に下宿の門を出入りした。すると其洋杖がちやんと例の所に立ててあるのに、森本の姿が不意に見えなくなつた。

十

一日二日はつい氣が附かずに過ぎたが、五日目位になつても、まだ森本の影が見えないので、

敬太郎は漸く不審の念を起し出した。給仕に来る下女に聞いて見ると、彼は役所の用で何處かへ出張したのださうである。固より役人である以上、何時出張しないとも限らないが、敬太郎は平生から此男を相して、何でも停車場の構内で、貨物の發送係位を勤めてゐるに違ひないと判じてゐたものだから、出張と聞いて少し案外な心持がした。けれども立つ時既に五六日と斷つて行つたのだから、今日か翌日は歸る筈だと下女に云はれて見ると、成程さうかと思つた。所が豫定の時日が過ぎて、森本の變な洋杖が依然として傘入れの中にあるのみで、當人のドテラ姿は一向洗面所へ現はれなかつた。

仕舞に宿の神さんが来て、森本さんから何か御音信が御座いましたかと聞いた。敬太郎は自分の方で下へ聞きに行かうと思つてゐた所だと答へた。神さんは多少心元ない色を梟の様な丸い眼の中に漂はせて出て行つた。夫から一週間程経つても森本はまだ歸らなかつた。敬太郎も漸く不審を抱き始めた。帳場の前を通る時に、未だですかとわざと立ち留まつて聞く事さへあつた。けれども其頃は自分が又思ひ返して、位置の運動を始め出した出花なので、自然其方ばかり頭を專領される日が多いため、是より以上立ち入つて何物をも探る事を敢てしなかつた。實を云ふと、彼は森本の豫言通り、衣食の計のために、好奇家の權利を放棄したのである。

すると或晩主人が一寸御邪魔をしても好いかと斷りながら障子を開けて這入つて来た。彼は腰から古めかしい煙草入を取り出して、其筒を抜く時ぼんといふ音をさせた。夫から銀の煙管に刻草を詰めて、濃い煙を巧者に鼻の穴から送らせた。斯う緩り構へる彼の本意を、敬太郎は判然向うからさうと切り出される迄覺らずに、何うも變だと訝り考へてゐた。

「實は少し御願ひがあつて上がつたんですが」と云つた主人は稍小聲になつて、「森本さんの入らつしやる所を何うか教へて頂く譯に參りますまいか、決して貴方に御迷惑の懸かるやうな事は致しませんから」と藪から棒に附け加へた。

敬太郎は此意外の質問を受けて、しばらくは何といふ挨拶も口へ出なかつたが、漸く、「一體何う云ふ譯なんです」と主人の顔を覗き込んだ。さうして彼の意味を讀まうとしたが、主人は煙管が詰まつたと見えて、敬太郎の火箸で雁首を掘つてゐた。夫が濟んでから羅宇の疏通をぶつゝ試した上、そろゝと説明に取り掛かつた。

主人の云ふ所によると、森本は下宿代が此家に六ヶ月許り滞つてゐるのださうである。が、三年越しゐる客ではあるし、遊んでゐる人ぢやなし、此年の末には何うかするからといふ當人の言譯を信用して、別段催促もしなかつた所へ、今度の旅行になつた。家のものは固より出張と計り

信じてゐたが、其日限が過ぎていくら待つても歸らないのみか、何處からも何の音信も來ないの
で、仕舞にとら／＼不審を起した。夫で一方に本人の室を調べると共に、一方に新橋へ行つて出
張先を聞き合はせた。ところが室の方は荷物も其儘で、彼の居つた時分と何の變りもなかつたが
新橋の答は又案外であつた。出張したと計り思つてゐた森本は、先月限り罷められてゐたさうで
ある。

「夫で貴方は平生森本さんと御懇意の間柄で入らつしやるんだから、貴方に伺つたら多分何處
に御出でか分るだらうと思つて上がった様を譯で。決して貴方に森本さんの分を何うの斯うのと
申し上げる積りではないのですから、何うか居所丈知らして頂けますまいか」
敬太郎は此失踪者の友人として、彼の香しからぬ行爲に立ち入つた關係でもあるかの如く主人
から取扱はれるのを甚だ迷惑に思つた。成程事實をいへば、つい此間迄或意味の嘆賞を懷にして
森本に近づいてゐたには違ひないが、こんな實際問題に迄秘密の打ち合せがあるやうに見做され
ては、未來を有つ青年として大いなる不面目だと感じた。

十一

正直な彼は主人の疇違ひを腹の中で怒つた。けれども怒る前に先づ冷たい青大将でも握らせら
れた様な不氣味さを覺えた。此妙に落ち付き拂つて古風な煙草入から刻みを撮み出しては雁首へ
詰める男の誤解は、正解と同じ様な不安を敬太郎に與へたのである。彼は談判に伴なふ一種の藝
術の如く巧みに煙管を扱ふ人であつた。敬太郎は彼の様子をしばらく眺めてゐた。さうして只知
らないといふより外に、向うの疑惑を晴らす方法がないのを残念に思つた。果して主人は容易に
煙草入を腰へ納めなかつた。煙管を筒へ入れて見たり出して見たりした。其度に例の通りぼんぼ
んといふ音がした。敬太郎は仕舞に何うしても此音を退治して遣りたいやうな氣がし出した。
「僕はね、御承知の通り學校を出た許りでまだ一定の職業もなにもない貧書生だが、是でも少
しは教育を受けた事のある男だ。森本のやうな浮浪の徒と一所に見られちゃ、少し體面に係る。
況や後暗い關係でもあるやうに邪推して、いくら知らないと言つても執濃く疑つてゐるのは怪し
からんぢやないか。君がさういふ態度で、二年もゐる客に對する氣なら夫で好い。此方にも料簡
がある。僕は過去二年の間君のうちに厄介になつてゐるが、一ヶ月でも宿料を滞らしたことがあ
るか」

主人は無論敬太郎の人格に對して失禮に當たるやうな疑ひを毛頭抱いてゐない積りであるとい

ふ事を繰り返して述べた。さうして萬一森本から音信でもあつて、彼の居所が分つたら何うぞ忘れずに教へて貰ひたいと頼んだ末、もしさつき聞いた事が敬太郎の氣に障つたら、いくらでも詫るから勘辨して呉れと云つた。敬太郎は主人の煙草を早く腰に差させようと思つて、單に宜しいと答へた。主人は漸く談判の道具を角帯の後へ仕舞ひ込んだ。室を出る時の彼の様子に、別段敬太郎を疑る氣色も見えなかつたので、敬太郎は怒つて遣つて好いことをしたと考へた。

夫からしばらく経つと、森本の室に、何時の間にか新しい客が這入つた。敬太郎は彼の荷物を主人が何う片附けたかに就いて不審を抱いた。けれども主人がかの煙草入を差して談判に来て以來、森本の事はもう聞くまいと決心したので、腹の中は兎も角、上部は知らん顔をしてゐた。さうして依然として出来るやうな又出来ないやうな地位を、元程焦燥らない程度ながらも、先づ自分の遣るべき第一の義務として、根氣に狩り歩いてゐた。

或晩も其用で内幸町迄行つて留守を食つたので已むを得ず又電車で引き返すと、偶然向う側に黄八丈の袷天で赤ん坊を負つた婦人が乗り合はせてゐるのに氣が附いた。其女は眉毛の細くて濃い、首筋の美しく出来た、何方かと云へば粹な部類に屬する型だつたが、何うしても袷天負をするといふ柄ではなかつた。と云つて、背中の子は慥かに自分の子に違ひないと敬太郎は考へ

た。猶能く見ると前垂の下から格子縞か何かの御召が出てゐるので、敬太郎は益變に思つた。外面は雨なので、五六人の乗客は皆傘をつぼめて杖にしてゐた。女のは黒蛇の目であつたが、冷たいものを手に持つのが厭だと見えて、彼女はそれを自分の側に立て掛けて置いた。其壘んだ蛇の目の先に赤い漆で加留多と書いてあるのが敬太郎の眼に留まつた。

此の黒人だか素人だか分らない女と、私生兒だか普通の子だか怪しい赤ん坊と、濃い眉を心持ち八の字に寄せて俯し目勝ちな白い顔と、御召の着物と、黒蛇の目に鮮やかな加留多といふ文字とが互違ひに敬太郎の神經を刺激した時、彼は不圖森本と一所になつて子造生んだといふ女の事を思ひ出した。森本自身の口から出た「斯ういふと未練がある様で可笑しいが、顔質は悪い方ぢやありませんでした。眉毛の濃い、時々八の字を寄せて人に物を云ふ癖のある」といつた様な言葉をぼつ／＼頭の中で憶ひ起しながら、加留多と書いた傘の所有主を注意した。すると女はやがて電車を下りて雨の中に消えて行つた。後に残つた敬太郎は一人森本の顔や様子を心に描きつゝ、運命が今彼を何處に連れ去つたらうかと考へ／＼下宿へ歸つた。さうして自分の机の上に差出人の名前の書いてない一封の手紙を見出だした。

好奇心に驅られた敬太郎は破るやうに此無名氏の書信を披いて見た。すると西洋野紙の第一行目に、親愛なる田川君として下に森本生よりとあるのが何より先に眼に入つた。敬太郎はすぐ又封筒を取り上げた。彼は視線の角度を幾通りにも變へて、其所に消印の文字を讀まうと力めたが、肉が薄いので何うしても判断が附かなかつた。已むを得ず再び本文に立ち歸つて、まづ夫から片附ける事にした。本文には斯うあつた。

「突然消え込んで定めて驚いたでせう。貴方は驚かないにしても、雷獸とさうしてヅク（森本は平生下宿の主人夫婦を、雷獸とさうしてヅクと呼んでゐた。ヅクは耳ヅクの略語である）彼等兩人は驚いたに違ひない。打ち明けた御話しをすると、實は少し下宿代を滞らしてゐたので、話しをしたら雷獸とさうしてヅクが面倒をいふだらうと思つて、わざと斷らずに、自由行動を取りました。僕の室に置いてある荷物を始末したら——行李の中には衣類其他が悉皆這入つてゐますから、相當の金になるだらうと思ふんです。だから兩人に貴方から右を賣るなり着るなりしろと仰しやつて頂きたい。尤も彼雷獸は御承知の如き曲者故僕の許諾を待たずして、疾くの昔にさう

取計らつてゐるかも知れない。のみならず、此方からさう穩便に出ると、まだ残つてゐる僕の尻を、貴方に拭つて貰ひたいなどと、飛んでもない難題を持ち懸けるかも知れませんが、夫には決して取り合つちや不可ません。貴方のやうに高等教育を受けて世の中へ出たての人は兎角雷獸輩が食物にしたがるものですから、其邊はよく御注意なさらないと不可ません。僕だつて教育こそないが、借金を踏んぢや善くない位の事はまさか心得てゐます。來年になれば屹度返してやる積りです。僕に意外な経歴が數々あるからと云つて、貴方に此點迄疑はれては、折角の親友を一人失くしたも同様、甚だ遺憾の至りだから、何うか雷獸如きものの爲に僕を誤解しないやうに願ひます」

森本は次に自分が今大連で電気公園の娛樂掛りを勤めてゐる由を書いて、來年の春には活動寫眞買入れの用向きを帯びて、是非共出京する筈だから、其節は御地で久し振に御目に懸かるのを今から樂しみにして待つてゐると附け加へてゐた。さうして其後へ自分が旅行した滿洲地方の景況をさも面白さうに一口位宛吹聴してゐた。中で最も敬太郎を驚かしたのは、長春とかにある博打場の光景で、是は嘗て馬賊の大將をしたといふ去る日本人の經營に係るものだが、其所へ行つて見ると、何百人と集まる汚い支那人が、折詰めやうにぎつしり詰まつて、血眼になりなが

三六
ら、一種の臭氣を吐き合つてゐるのださうである。しかも長春の富豪が、慰み半分わざと垢だらけな着物を着て、こつそり此所へ出入するといふんだから、森本だつて何んな眞似をしたか分らないと敬太郎は考へた。

手紙の末段には盆栽の事が書いてあつた。「あの梅の鉢は動坂の植木屋で買ったので、幹は夫程古くないが、下宿の窓などに載せて置いて朝夕眺めるには丁度手頃のものです。あれを献上するから貴方の室へ持つて入らつしやい。尤も雷獸とさうしてヅクは兩人共極めて不風流故、床の間の上へ据ゑたなり放つて置いて、もう枯らして仕舞つたかも知れません。夫から上り口の土間の傘入れに、僕の洋杖が差さつてゐる筈です。あれも價格から云へば決して高く踏めるものではないませんが、僕の愛用したのだから、記念のため是非貴方に進上したいと思ひます。如何な雷獸とさうしてヅクもあの洋杖を貴方が取つたつて、まさか故障は申し立てますまい。だから決して御遠慮なさらずと好い。取つて御使ひなさい。——滿洲ことに大連は甚だ好い所です。貴方の様な有爲の青年が發展すべき所は當分外に無いでせう。思ひ切つて是非入らつしやいませんか。僕は此方へ来て以來滿鐵の方にも大分知人が出来たから、もし貴方が本當に來る氣なら、相當の御世話は出来る積りです。但し其節は前以て一寸御通知を願ひます。左様なら」

敬太郎は手紙を疊んで机の抽出へ入れたなり、主人夫婦へは森本の消息に就いて何事も語らなかつた。洋杖は依然として、傘入れの中に差さつてゐた。敬太郎は出入りの都度、夫を見るたびに一種妙な感に打たれた。

停留所

敬太郎に須永といふ友達があつた。是は軍人の子でありながら軍人が大嫌ひで、法律を修めながら役人にも會社員にもなる氣のない、至つて退嬰主義の男であつた。少なくとも敬太郎にはさう見えな。尤も父は餘程以前に死んだとかで、今では母とたつた二人ぎり、淋しいやうな、又床しいやうな生活を送つてゐる。父は主計官として大分好い地位に迄昇つた上、元來が貨殖の道に明らかな人であつた丈、今でも母子共衣食の上に不安の憂ひを知らない好い身分である。彼の退嬰主義も半ばは此安泰な境遇に慣れて、奮闘の刺激を失つた結果とも見られる。といふものは、父が比較的立派な地位にゐた所爲か、彼には世間體の好い計りでなく、實際爲になる親類があつて、幾何でも出世の世話をして遣らうといふのに、彼は何だ蚊だと手前勝手計り竝べて、今以て愚圖々々してゐるのを見ても分る。

「さう贅澤ばかり云つてちや勿體ない。厭なら僕に譲るがい」と敬太郎は冗談半分に須永を強請ることもあつた。すると須永は淋しさうな又氣の毒さうな微笑を洩らして、「だつて君ぢや不可ないんだから仕方がないよ」と斷るのが常であつた。斷られる敬太郎は冗談にせよ好い心持はしなかつた。己は己で何うかするといふ氣概も起して見た。けれども根が執念深くない性質だから、是しきの事で須永に對する反抗心などが永く續きよう筈がなかつた。其上身分が定まらないので、氣の落ち附く背景を有たない彼は、朝から晩迄下宿の一間に凝と坐つてゐる苦痛に堪へなかつた。用がなくつても半日は是非出て歩いた。さうして能く須永の家を訪問された。一つは何時行つても大抵留守の事がないので、行く敬太郎の方でも張合ひがあつたのかも知れない。

「糊口も糊口だが、糊口より先に、何か驚嘆に價する事件に會ひたいと思つてるが、いくら電車に乗つて方々歩いても全く駄目だね。攫徒にさへ會はない」などと云ふかと思ふと、「君、教育は一種の權利かと思つてゐたら全く一種の束縛だね。いくら學校を卒業したつて食ふに困るやうぢや何の權利かこれ有らんやだ。夫ぢや位地は何うでも可いから思ふ存分勝手な眞似をして構はないかといふと、矢つ張り構ふからね。厭に人を束縛するよ教育が」と忌々しさうに嘆息するところがある。須永は敬太郎の何れの不平に對しても餘り同情がないらしかつた。第一彼の態度からしてが本當に眞面目なのだか、又はたゞ空焦燥ぎに焦燥いでゐるのか見分けが附かなかつたのだ

らう。或時須永はあまり敬太郎が斯ういふ様な浮すつた事ばかり言ひ募るので、「夫ぢや君は何んな事がして見たいのだ。衣食問題は別として」と聞いた。敬太郎は警視廳の探偵見たやうな事をして見たいと答へた。

「ぢや爲るが好いちやないか、譯ないこつた」

「所がさうは行かない」

敬太郎は本氣に何故自分に探偵が出来ないかといふ理由を述べた。元來探偵なるものは世間の表面から底へ潜る社會の潜水夫のやうなものだから、是程人間の不思議を攫んだ職業はたんとあるまい。夫に彼等の立場は、たゞ他の暗黒面を観察する丈で、自分と墮落して懸かる危険性を帯びる必要がないから、猶の事都合が可いには相違ないが、如何せん其目的が既に罪惡の暴露にあるのだから、豫め人を陥れようとする成心の上で打ち立てられた職業である。そんな人の悪い事は自分には出来ない。自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機關が暗い闇夜に運轉する有様を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい。——斯ういふのが敬太郎の主意であつた。須永は逆らはずに聞いてゐたが、是といふ批判の言葉も放たなかつた。夫が敬太郎には老成と見えながら其實平凡なのだとしか受取れなかつた。しかも自分を相手にしないやうな落ち附き拂つた風のあるのを惡

く思つて別れた。けれども五日と経たないうちに又須永の宅へ行きたくなつて、表へ出ると直ぐ神田行の電車に乗つた。

二

須永はもとの小川亭即ち今の天下堂といふ高い建物を目標に、須田町の方から右へ小さな横町を爪先上りに折れて、二三度不規則に曲がつた極めて分り悪い所に居た。家並の立て込んだ裏通だから、山の手と違つて無論屋敷を廣く取る餘地はなかつたが、夫でも門から玄關程二間程御影の上を渡らなければ、格子先の電鈴に手が届かない位の一構であつた。もとから自分の持ち家だつたのを、一時親類の某に貸したなり久しく過ぎた所へ、父が死んだので、無人の活計には場所も廣さも恰好だらうといふ母の意見から、駿河臺の本宅を賣り拂つて此所へ引き移つたのである。尤も夫から大分手を入れた。殆ど新築したも同然さと嘗て須永が説明して聞かせた時に、敬太郎は成程左様かと思つて、二階の床柱や天井板を見廻した事がある。此二階は須永の書齋にするため、後から繼ぎ足したので、風が強く吹く日には少し揺れる氣味はあるが、外に是と云つて非の打ちやうのない綺麗に明らかな四疊六疊二間つゞきの室であつた。其室に坐つてゐると、庭に植

ゑた松の枝と、手斧目の附いた板塀の上の方と、夫から忍び返しが見えた。縁に出て手摺から見下ろした時、敬太郎は松の根に一面と咲いた鷺草を眺めて、あの白いものは何だと須永に聞いた事もあつた。

彼は須永を訪問して此座敷に案内されるたびに、書生と若旦那の區別を判然と心に呼び起さざるを得なかつた。さうして斯う小じんまり片附いて暮らしてゐる須永を輕蔑すると同時に、閑靜ながら餘裕のある此友の生活を羨みもした。青年があんなでは駄目だと考へたり、又あんなにも爲つて見たいと思つたりして、今日も二つの矛盾から出来上がった斑な興味を懷に、彼は須永を訪問したのである。

例の小路を二三度曲折して、須永の住居つてゐる道の角迄來ると、彼より先に一人の女が須永の門を潜つた。敬太郎はたゞ一目其後姿を見た丈だつたが、青年に共通の好奇心と彼に固有の浪漫趣味とが力を合はせて、引き摺るやうに彼を同じ門前に急がせた。一寸覗いて見ると、もう女の影は消えてゐた。例の通り紅葉を引手に張り込んだ障子が、閑靜に閉まつてゐる丈なのを、敬太郎は少し案外にかつ物足らず眺めてゐたが、やがて沓脱の上に脱ぎ捨てた下駄に氣を附けた。其下駄は勿論女ものであつたが、行儀よく向うむきに揃つてゐる丈で、下女が手を懸けて直した

迹が少しも見えない。敬太郎は下駄の向きと、思つたより早く上がつて仕舞つた女の所作とを繋ぎ合はして、是は取次を乞はずに、獨りで勝手に障子を開けて這入つた極めて懇意の客だらうと推察した。でなければ家のものだが、夫では少し變である。須永の家は彼と彼の母と仲働と下女の四人暮しである事を敬太郎はよく知つてゐたのである。

敬太郎は須永の門前にしばらく立つてゐた。今這入つた女の動靜をそつと塀の外から窺ふといふよりも、寧ろ須永と此女が何んな文に二人の浪漫を織つてゐるのだらうと想像する積りであつたが、矢張り聞き耳は立ててゐた。けれども内は何時もの通り森としてゐた。艶いた女の聲所か、咳嗽一つ聞こえなかつた。

「許嫁かな」

敬太郎は先づ第一に斯う考へたが、彼の想像は其位で落ち附く程、訓練を受けてゐなかつた。母は仲働を連れて親類へ行つたから今日は留守である。飯焚は下女部屋に引き下がつてゐる。須永と女とは今差向ひで何か私語いてゐる。——果してさうだとすると何時もの様に格子戸をがらりと開けて頼むと大きな聲を出すのも變なものである。或は須永も母も仲働も一所に出たかも知れない。おさんは屹度晝寐をしてゐる。女は其所へ這入つたのである。とすれば泥棒である。

此儘引き返しては濟まない。——敬太郎は狐憑きの様にのそりと立つてゐた。

三

すると二階の障子がすうと開いて、青い色の硝子瓶を提げた須永の姿が不意に縁側へ現はれたので敬太郎は一寸吃驚した。

「何をしてゐるんだ。落し物でもしたのかい」と上から不思議さうに聞きかける須永を見ると、彼は咽喉の周圍に白いフラネルを捲いてゐた。手に提げたのは含嗽劑らしい。敬太郎は上を向いて、風邪を引いたのかとか何とか二三言葉を換はしたが、依然として表に立つた儘、動かうともしなかつた。須永は仕舞に這入ると云つた。敬太郎はわざと這入つても可いかと念を入れて聞き返した。須永は殆ど其意味を覺らない人の如く、軽く首肯いたがり障子の内に引き込んでしまつた。

階段を上がる時、敬太郎は奥の部屋で微かに衣摺れの音がする様な氣がした。二階には今迄須永の羽織つてゐたらしい黒八丈の襟の掛かつたどてらが脱ぎ捨ててある丈で、外に平生と變つた所はどこにも認められなかつた。敬太郎の性質から云つても、彼の須永に對する交情から云つて

も、是程氣に掛かる女の事を、率直に切り出して聞けない筈はなかつたのだが、今迄に何處か罪な想像を逞しくしたといふ疚しさもあり、又面と向つてすぐとは云ひ悪い皮肉な覘ひを附けた自覺もあるので、今しがた君の家へ這入つた女は全體何者だと無邪氣に尋ねる勇氣も出なかつた。却て自分の先へ先へと走りたがる心を壓し隠すやうな風に、

「空想はもう當分已めた。夫よりか口の方が大事だからね」と云つて、兼て須永から聞いてゐる内幸町の叔父さんといふ人に、一應さういふ方の用向きで會つて置きたいから紹介して呉れと眞面目に頼んだ。此叔父といふのは須永の母の妹の連合ひで、官吏から實業界へ這入つて、今では四つか五つの會社に關係を有つてゐる相當な地位の人であつたが、須永は其叔父の力を藉りて何うしようといふ料簡もないと見えて、「叔父が色々云つて呉れるけれども、僕は餘り進まないから」と、かつて敬太郎に話した事があつたのを、敬太郎は覺えてゐたのである。

須永は今朝既に其叔父に會ふ筈であつたが、咽喉を痛めたため、外出を見合はせたのださうで、四五日内には大抵行けるだらうから、其時には是非話して見ようと答へたあとで、「叔父も忙しい身體だしね、夫に方々から頼まれるやうだから、屹度とは受合はれないが、まあ會つて見給へ」と念の爲だか何だか附け加へた。餘り望みを置き過ぎられては困るといふのだらうと敬太郎は解

釋したが、夫でも會はないよりは増した位に考へて、例に似ず宜しく頼む氣になつた。が、口で頼むほど腹の中では心配も苦勞もしてゐなかつた。

元來彼が卒業後相當の地位を求めゝる爲に、腐心し運動し奔走し、今も猶しつゝあるのは、當人の公言する如く伴りなき事實ではあるが、未だに成功の曙光を拜まないと云つて、左も苦しうな聲を出して見せるうちには、尠くとも五割方の懸値が籠もつてゐた。彼は須永の様な一人息子ではなかつたが、(妹が片附いて)母一人残つてゐる所は兩方共同じてあつた。彼は須永の様に地面家作の所有主でない代りに、國に少し田地を有つてゐた。固より大した穀高になるといふ程のものでもないが、俵が幾何といふ極まつた金に毎年替へられるので、二十や三十の下宿代に窮する身分ではなかつた。其上女親の甘いのに附け込んで、自分で自分の身を喰ふやうな臨時費を請求した事も今迄に一度や二度ではなかつた。だから位地々々と云つて騒ぐのが、全くの空騒ぎでないにしても、郷黨だの朋友だの又は自分だのに對する虚榮心に煽られてゐる事は慥かであつた。そんなら學校にゐるうちもつと勉強して好い成績でも取つて置きさうなものなのに、そこが浪漫家丈あつて、學課は成るべく怠けよう怠けようと思掛けて通して來た結果、頗る鮮やかならぬ及第をして仕舞つたのである。

四

それで約一時間程須永と話す間にも、敬太郎は位地とか衣食とかいふ苦しい問題を自分と進んで持ち出して置きながら、矢つ張り先刻見た後姿の女の事が氣に掛かつて、肝心の世渡りの方には口先程眞面目になれなかつた。一度下座敷で若々しい女の笑ひ聲が聞こえた時などは、誰か御客が來てゐるやうだねと尋ねて見ようかしらんと考へた位である。所が其考へてゐる時間が、既に自然を打ち壞す道具になつて、折角の間が間外れにならうとしたので、とう／＼口へ出さずに已めて仕舞つた。

それでも須永の方では成るべく敬太郎の好奇心に媚びる様な話題を持ち出した氣でゐた。彼は自分の住んでゐる電車の裏通が、如何に小さな家と細い小路の爲に、賽の目のやうに區切られて、名も知らない都會人士の巢を形づくつてゐるうちに、社會の上層に浮き上がらない戯曲が殆ど戸毎に演ぜられてゐると云ふやうな事實を敬太郎に告げた。

先づ須永の五六軒先には日本橋邊の金物屋の隱居の妾がゐる。其妾が宮戸座とかへ出る役者を情夫にしてゐる。夫を隱居が承知で黙つてゐる。其向う横町に代言だか周旋屋だか分らない小綺

麗な格子戸作りの家があつて、時々表へ女記者一名、女コック一名至急入用などといふ廣告を黒板へ書いて出す。其所へある時二十七八の美しい女が、襷を取つた紺綾の長いマントをすぼりと被つて、丸で西洋の看護婦といふ服装をして来て職業の周旋を頼んだ。それが其家の主人の昔書生をしてゐた家の御嬢さんなので、主人は勿論細君も驚いたといふ話がある。次に背中合せの裏通へ出ると、白髪頭で二十位の細君を持つた高利貸がある。人の評判では借金に取つた女房ださうである。其隣の博奕打が、大勢同類を寄せて、互に血眼を擦り合つてゐる最中に、ねんね子で赤ん坊を負つた上さんが、勝負で夢中になつてゐる亭主を迎へに来る事がある。上さんが泣きながら何うか一所に歸つて呉れといふと、亭主は歸るには歸るが、もう一時間程して負けたものを取り返してから歸るといふ。すると上さんはそんな意地を張れば張る程負ける丈だから、是非今歸つて呉れと絶り附くやうに頼む。いや歸らない、いや歸れといつて、往來の氷る夜中でも四隣の眠りを驚かせる。……

須永の話しを段々聞いてゐるうちに、敬太郎は斯ういふ實地小説のはびこる中に年來住み慣れて来た須永も亦人の見ないやうな芝居をこつそり遣つて、口を拭つて済ましてゐるのかも知れないといふ氣が強くなつて来た。固より其推察の裏には先刻見た後姿の女が薄い影を投げてゐた。

「序に君の分も聞かうぢやないか」と切り込んで見たが、須永はふんと云つて薄笑ひをした丈であつた。其後で簡単に「今日は咽喉が痛いから」と云つた。左も小説は有つてゐるが、君には話さないのだと云はん許りの挨拶に聞こえた。

敬太郎が二階から玄關へ下りた時は、例の女下駄がもう見えなかつた。歸つたのか、下駄箱へ仕舞はしたのか、又は氣を利かして隠したのか、彼には丸で見當が附かなかつた。表へ出るや否や、何ういふ料簡か彼はすぐ一軒の煙草屋へ飛び込んだ。さうして其所から一本の葉巻を銜へて出て来た。それを吹かしながら須田町迄来て電車に乗らうとする途端に、喫煙御断りといふ社則を思ひ出したので、又萬世橋の方へ歩いて行つた。彼は本郷の下宿へ歸る迄此葉巻を持たず積りで、ゆつくり／＼足を運ばせながら猶須永の事を考へた。其須永は決して何時もの様に單獨には頭の中へは這入つて来なかつた。考へるたびに屹度後姿の女がちら／＼跟いて来た。仕舞に「本郷臺町の三階から遠眼鏡で世の中を覗いてゐて、浪漫的探險なんて氣の利いた眞似が出来るものか」と須永から冷笑された様な心持がし出した。

彼は今日迄、俗にいふ下町生活に呢懇も趣味も有ら得ない男であつた。時たま日本橋の裏通な
 どを通つて、身を横にしなければ潜れない格子戸だの、三和土の上から譯もなくぶら下がつてゐ
 る鐵燈籠だの、上り框の下を張り詰めた綺麗に光る竹だの、杉だか何だか日光が透つて赤く見え
 る程薄つぺらな障子の腰だのを眼にする度に、如何にもせよこましさうな心持になる。斯う萬事
 がさちりと小さく整つて且光つてゐられては窮屈で堪らないと思ふ。是程小じんまりと几帳面に
 暮らして行く彼等は、恐らく食後に使ふ楊枝の削り方迄氣に掛けてゐるのではなからうかと考へ
 る。さうして夫が悉く傳説的の法則に支配されて、丁度彼等の用ひる煙草盆の様に、先祖代々順
 順に拭き込まれた習慣を笠に、恐るべく光つてゐるのだらうと推察する。須永の家へ行つて、用
 もない松へ大事さうな雪除けをした所や、狭い庭を馬鹿丁寧に枯松葉で敷き詰めた景色杯を見る
 時ですら、彼は繊細な江戸式の開化の懐に、ぼうと育つた若旦那を聯想しない譯に行かなかつた。
 第一須永が角帯をさうと締めてさちりと坐る事からが彼には變であつた。其所へ長唄の好きだと
 かいふ御母さんが時々出て来て、滑つこい癖にアクセントの強い言葉で、舌觸りの好い愛嬌を振
 り懸けてくれる折などは、昔から重詰めにして藏の二階へ仕舞つて置いたものを、今取り出して
 来たといふ風に、出来合ひ以上の旨さがあるので、紋切形とは無論思はないけれども、幾代も掛

かつて辭令の練習を積んだ巧みが、其底に潜んでゐるとしか受取れなかつた。

要するに敬太郎はもう少し調子外れの自由なものが欲しかつたのである。けれども今日の彼は
 少なくとも想像の上に於て平生の彼とは違つてゐた。彼は徳川時代の濕つぽい空氣が未だに漂つ
 てゐる黒い藏造りの立ち竝ぶ裏通に、親譲りの家を構へて、敬ちゃん御遊びなといふ友達を相手
 に、泥棒ごつこや大将ごつこをして成長したかつた。月に一遍宛蠣殻町の水天宮様と深川の不動
 様へ御参りをして、護摩でも上げたかつた。(現に須永は母の御供をして斯ういふ舊弊な真似を
 當り前の如く遣つてゐる。) 夫から鐵無地の羽織でも着ながら、歌舞伎を當世に崩して往來へ流
 した句のする町内を恍惚と歩きたかつた。さうして習慣に縛られた、且習慣を飛び超えた艶かし
 い葛藤でも其所に見出だしたかつた。

彼は此時忽ち森本の二字を思ひ浮かべた。すると其二字の周圍にある空想が妙に色を變へた。
 彼は物好きにも自ら進んで此後暗い奇人に握手を求めた結果として、もう少しで飛んだ迷惑を蒙
 る所であつた。幸ひに下宿の主人が自分の人格を信じたから可いやうなもの、疑らうとすれば
 何處迄も疑られ得る場合なのだから、主人の態度如何に依つては警察位へ行かなければならな
 かつたのかも知れない。と、斯う考へると、彼の空中に編み上げる勝手な浪漫が急に温か味を失つ

て、醜い想像から出来上がった雲の峯同様に、意味もなく崩れて仕舞つた。けれども其奥に口髭をだらしなく垂らした二重瞼の瘡せぎすの森本の顔丈は粘り強く残つてゐた。彼は其顔を愛しいやうな、侮りたいやうな、又憐みたいやうな心持になつた。さうして此凡庸な顔の後に解すべからざる怪しい物がぼんやり立つてゐるやうに思つた。さうして彼が記念に呉れると云つた妙な洋杖を聯想した。

此洋杖は竹の根の方を曲げて柄にした極めて單簡のものだが、たゞ蛇を彫つてある所が普通の杖と違つてゐた。尤も輸出向きに能く見るやうに蛇の身をぐる／＼竹に巻き附けた毒々しいものではなく、彫つてあるのはたゞ頭丈で、其頭が口を開けて何か呑み掛つてゐる所を握りにしたものであつた。けれども其呑み掛けてゐるのが何であるかは、握りの先が丸く滑つこく削られてゐるので、蛙だか鶏卵だか誰にも見當が附かなかつた。森本は自分で竹を伐つて、自分で此蛇を彫つたのだと云つてゐた。

六

敬太郎は下宿の門口を潜る時何より先にまづ此洋杖に眼を附けた。といふよりも途すがらの聯

想が、硝子戸を開けるや否や、彼の眼を瀬戸物の傘入れの方へ引き附けたのである。實をいふと、彼は森本の手紙を受取つた當座、此洋杖を見るたびに、自分にも説明の出来ない妙な感じがしたので、成るべく眼を觸れないやうに、出入りの際視線を逸らした位である。所がさうすると今度はわざと見ない振をして傘入れの傍を通るのが苦になつてきて、極めて輕微な程度ではあるけれども此變な洋杖におのづと祟られたと云ふ風になつて仕舞つた。彼自身も遂には自分の神經を不思議に思ひ出した。彼は一種の利害關係から、過去に溯る嫌疑を恐れて、森本の居所も又其の言傳も主人夫婦に告げられないといふ弱味を有つてゐるには違ひないが、夫は良心の上にとれ程の曇りも懸けなかつた。記念として上げるとわざ／＼云つて來たものを、快く貰ひ受ける勇氣の出来ないのは、他の好意を空しくする點に於て、面白くないに極まつてゐるが、是とても苦になる程ではない。たゞ森本の浮世の風にあたる運命が近いうちに終りを告げるとする。(恐らくはたれ死といふ終りを告げるのだらう。) 其憐れな最期を今から豫想して、此洋杖が傘入れの中に立つてゐるとする。さうして多能な彼の手によつて刻まれた、胴から下のない蛇の首が、何物かを呑まうとして吞まず、吐かうとして吐かず、何時迄も竹の棒の先に、口を開いた儘喰つ附いてゐるとする。——斯ういふ風に森本の運命と其運命を黙つて代表してゐる蛇の頭とを結び附けて考

へた上に、其代表者たる蛇の頭を毎日握つて歩くべく、近い内にのたれ死をする人から頼まれたとすると、敬太郎は其時に始めて妙な感じが起るのである。彼は自分で此洋杖を傘入れの中から抜き取る事も出来ず、又下宿の主人に命じて、自分の目の届かない所へ片付けさせる譯にも行かないのを大袈裟ではあるが一種の因果のやうに考へた。けれども詩で染めた色彩と、散文で行く活計とは大分一致しない所もあつて、實際を云ふと、是が爲に下宿を變へて落ち附いた方が樂だと思ふ程彼は洋杖に災されてゐなかつたのである。

今日も洋杖は依然として傘入れの中に立つてゐた。鎌首は下駄箱の方を向いてゐた。敬太郎は夫を横に見たなり自分の室に上がったが、やがて机の前に坐つて、森本に遣る手紙を書き始めた。先づ此間向うから來た音信の禮を述べた上、何故早く返事を出さなかつたかといふ辯解を二三行でも可いから附け加へたいと思つたが、夫を明らかに打ち開けては、君の様な漂浪者を知己に有つ僕の不名譽を考へると、書信の往復などは爲る氣になれなかつたからだとても書くより外に仕方がないので、其所は例の奔走に取り紛れと簡單な一句で胡魔化して置いた。次に彼が大連で好都合な職業に有り附いた祝ひの言葉を一寸入れて、其後へ段々東京も寒くなる時節柄、滿洲の霜や風は嘸凌ぎ悪いだらう。殊に貴方の身體では應へるに違ひないから、是非用心して病氣に罹

らない様になさいと優しい文句を數行綴つた。敬太郎から云ふと、實は此所が手紙を出す主意なのだから、成るべく自分の同情が先方へ徹する様に旨く且長く、さうして誰が見ても實意の籠もつてゐるやうに書きたかつたのだけれども、讀み直して見ると、矢つ張り普通の人が普通時候の挨拶に述べる用語以外に、何の新しい所もないので、彼は少し失望した。と云つて、固々戀人に送る艶書程熱烈な眞心を籠めたものでないのは覺悟の前である。それで自分は文章が下手だから、いくら書き直したつて駄目だ位の口實の下に、其所は其儘にして前へ進んだ。

七

森本が下宿へ置き去りにして行つた荷物の始末に就いては義理にも何とか書き添へなければ濟まなかつた。然し其處置の附け方を亭主に聞くのは厭だし、聞かなければ委細の報道は出来る筈はなし、敬太郎は筆の先を宙に浮かした儘考へてゐたが、とうとう「貴方の荷物は、僕から主人に話して、何うでも彼の都合の宜い様に取り計らはせるとの御依頼でしたが、貴方の千里眼の通り、僕が何も云はない先に、雷獸の方で勝手に取り計らつて仕舞つたやうですから左様御承知を願ひます。梅の盆栽を下さるといふ事ですが、是は影も形も見えないやうですから、頂きません。

たゞ御禮丈申し述べて置きます。夫から」とつゞけて置いて、又筆を休めた。

敬太郎は愈洋杖の所へ来たのである。根が正直な男だから、あの洋杖は折角の思召だから、頂戴して毎日散歩の時突いて出ます杯と空々しい嘘は吐けず、と言つて御親切は難有いが僕は貰ひませんとは猶更書けず。仕方がないから、「あの洋杖は未だに傘入れの中に立つてゐます。持主の歸るのを毎日毎夜待ち暮らしてゐる如く立つてゐます。雷獸もあの蛇の頭へは手を觸れる事を敢てしません。僕はあの首を見るたびに、彫刻家としての貴方の手腕に敬服せざるを得ないです」と好い加減な御世辭を並べて、事實を暈す手段とした。

状袋へ名宛を書くときに、森本の名前を思ひ出さうとしたが、何うしても胸に浮かばないので、已むを得ず大連電氣公園内娯樂掛り森本様とした。今迄の關係上主人夫婦の眼を憚らなければならぬ手紙なので、下女を呼んでポストへ入れさせる譯にも行かなかつたから、敬太郎はすぐ夫を自分の袂の中に藏した。彼はそれを持つて夕食後散歩 旁外へ出懸ける氣で寒い梯子段を下迄降り切ると、須永から電話が掛かつた。

今日内幸町から従妹が來ての話に、叔父は四五日内に用事で大阪へ行くかも知れないさうだから、餘り遅くなつてはと思つて、立つ前に會つて貰へまいかと電話で聞いて見たら、宜しい

といふ返事だから、行く氣なら成るべく早く行つた方が可からう。尤も電話の上に咽喉が痛いの
で、詳しい話しは出来なかつたから、其積りでゐて呉れといふのが彼の用向きであつた。敬太郎
は「どうも難有う。おや成るべく早く行くやうにするから」と禮を述べて電話を切つたが、何う
せ行くなら今夜にでも行つて見ようといふ氣が起つたので、再び三階へ取つて返して此間拵へた
セルの袴を穿いた上、愈表へ出た。

曲り角へ來てポストへ手紙を入れる事は忘れなかつたけれども、肝心の森本の安否は此時既に
敬太郎の胸に、たゞ微かな火氣を残すのみであつた。夫でも状袋が郵便函の口を滑つて、すとな
と底へ落ちた時は、受取人の一週間以内に封を披く様を想見して、滿更悪い心持もしまいと思つ
た。

夫から電車へ乗る迄はたゞ一直線にすた／＼歩いた。考へも一直線に内幸町の方を向いてゐ
たが、電車が明神下へ出る時分、何氣なく今しがた電話口で須永から聞いた言葉を、頭の内で繰
り返して見ると、覺えずはつと思ふ所が出て來た。須永は「今日内幸町からイトコが來て」と
慥かに云つたが、其イトコが彼の叔父さんの子である事は疑ふ迄もない。然し其子が男であるか
女であるかは不完全な日本語の丸で關係しない所である。

「何方だらう」

敬太郎は突然氣にし始めた。若しそれが男だとすれば、あの後姿の女に就いての手掛りにはならない。従つて女は彼の好奇心を徒らに刺激した丈で、ちつとも動いて来ない。然し若し女だとすると、日といひ時刻といひ、須永の玄關から上り具合といひ、何うも自分より一足先へ這入つたあの女らしい。想像と事實を繼ぎ合はせる事に巧みな彼は、さうと確めないうちに、端的さうと極めて仕舞つた。斯う解釋した時彼は、今迄泡立つてゐた自分の好奇心に幾分の冷水を注したやうな満足を覺えると共に、豫期したよりも平凡な方角に、手掛りが一つ出来たと云ふ詰らなさを感した。

八

彼は小川町迄来た時、一寸電車を下りても須永の門口迄行つて、友の口から事實を確かめて見たい位に思つたが、單純な好奇心以外にそんな立ち入つた詮議をすべき理由を何處にも見出だし得ないので、我慢してすぐ三田線に移つた。けれども眞直に神田橋を抜けて丸の内を疾驅する際にも、自分は今須永の従妹の家に向つて走りつゝあるのだといふ心持は忘れなかつた。彼は勸業銀

行の邊で下りる筈の所を、つい櫻田本郷町迄乗り越して驚いて又暗い方へ引き返した。淋しい夜であつたが尋ねる目的の家はすぐ知れた。丸い瓦斯に田口と書いた門の中を覗いて見ると、思つたより奥深さうな構であつた。けれども實際は砂利を敷いた路が往來から筋違に玄關を隠してゐると、正面を遮る植込みがこんもり黒ずんで立つてゐるので、幾分か嚴しい景氣を夜陰に添へた迄で、門内に這入つた所では見附き程手廣な住居でもなかつた。

玄關には西洋擬ひの硝子戸が二枚閉てあつたが、頼むといつても、電鈴を押しても、取次が中々出て来ないので、敬太郎は已むを得ずしばらく其傍に立つて内の様子を窺つてゐた。すると、何處からか漸く足音が聞こえて出して、眼の前の擦硝子がぱつと明るくなつた。夫から庭下駄で三和土を踏む音が二足三足したと思ふと、玄關の扉が片方開いた。敬太郎は此際取次の風采を想望する程の物數奇もなく、全く漫然と立つてゐた丈であるが、夫でも緋の羽織を着た書生か、双子の綿入を着た下女が、一應御辭儀をして彼の名刺を受取る事とのみ期待してゐたのに、今戸を半分開けて彼の前に立つたのは、思ひも寄らぬ立派な服装をした老紳士であつた。電氣の光を背中に受けてゐるので、顔は判然しなかつたが、自縮緬の帯丈はすぐ彼の眼に映じた。其瞬間にすぐ是が田口といふ須永の叔父さんだらうといふ感じが敬太郎の頭に働いた。けれども事が餘り意外

なので、すぐ挨拶をする餘裕も出ず少しはあつけに取られた氣味で、益槍してゐた。其上自分を甚だ若く考へてゐる敬太郎には、四十代だらうが五十代だらうが乃至六十代だらうが殆ど區別のない一様の爺さんに見える位、彼は老人に對して親しみのない男であつた。彼は四十五と五十五を見分けて遣る程の同情心を年長者に對して有たなかつたと同時に、其何れに向つても慣れないうちは異人種のやうな無氣味を覺えるのが常なので、猶更迷兒ついたのである。然し相手は何も氣に掛からない様子で「何か用ですか」と聞いた。丁寧でもなければ輕蔑でもない至つて無難な其言葉つきが、少し敬太郎の度胸を回復させたので、彼は漸く自分の姓名を名乗ると共に手短かく來意を告げる機會を得た。すると年嵩な男は思ひ出したやうに、「さう〜先刻市藏（須永の名）から電話で話がありました。然し今夜御出でになるとは思ひませんでしたよ」と云つた。さうして君さう早く來たつて不可ないといふ様子が其裏に見えたので、敬太郎は精一杯言譯をする必要を感じた。老人はそれを聞くでもなし聞かぬでもなしといつた風に黙つて立つてゐたが、「そんなら又入らつしやい。四五日うちに一寸旅行しますが、其前に御目に掛かれる暇さへあれば、御目に掛かつても宜う御座んす」と云つた。敬太郎は篤く禮を述べて又門を出たが、暗い夜の中で、禮の述べ方がちと馬鹿丁寧過ぎたと思つた。

是はずつと後になつて、須永の口から敬太郎に知れた話であるが、此所の主人は、此時玄關に近い應接間で、たつた一人碁盤に向つて、白石と黒石を互違ひに並べながら考へ込んでゐたのださうである。夫は客と一石遣つた後の引續きとして、是非共ある問題を解決しなければ氣が済まなかつたからであるが、肝心の所で敬太郎がさも田舎者らしく玄關を騒がせるものだから、先づ此邪魔を追つ拂つた後でといふ積りになつて、焦慮つたさの餘り自分と取次に出たのだといふ。須永に此顛末を聞かされた時に、敬太郎は益々自分の挨拶が丁寧過ぎたやうな氣がした。

九

中一日置いて、敬太郎は堂々と田口へ電話を懸けて、是からすぐ行つても差支へないかと聞き合はせた。向うの電話口へ出たものは、敬太郎の言葉つきや話し振の比較的横風な所から大分位地の高い人とも思つたらしく、「どうぞ少々御待ち下さいまし、只今主人の都合を一寸尋ねますから」と丁寧な挨拶をして引き込んだが、今度返事を傳へるときは「あ、もし〜今ね、來客中で少し差支へるさうです。午後の一時頃來るなら來て頂きたいといふ事です」と前よりは言葉が餘程粗末になつてゐた。敬太郎は、「さうですか、夫では一時頃上がりまますから、どうぞ御主人

に宜しく」と答へて電話を切つたが、内心は一種厭な心持がした。

十二時かつさらに午飯を食ふ積りで、あらかじめ下女に云ひ附けて置いた膳が、時間通り出て来ないので、敬太郎は騒々しく鳴る大學の鐘に急ぎ立てられでもする様に催促をして、出来る丈早く食事を済ました。電車の中では一昨日の晩會つた田口の態度を思ひ浮かべて、今日も亦あゝいふ風に無難な取扱ひを受けるのか知らん、夫とも向うで會ふといふ位だから、もう少しは愛嬌のある挨拶でもして呉れるか知らんと考へなどした。彼は此紳士の好意で、相當の地位さへ得られるならば、多少腰を曲めて窮屈な思ひをする位は我慢する積りであつた。けれども先刻電話の取次に出たものの様に、五分と経たないうちに、言葉使ひを悪い方に改められたりすると、もう不愉快になつて、どうか其奴が又取次に出なければいゝがと思ふ。其癖自分の掛け方の自分としては少し横風過ぎた事には丸で氣が附かない性質であつた。

小川町の角で、斜に須永の家へ曲がる横町を見た時、彼ははつと例の後姿の事を思ひ出して、急に日蔭から日向へ想像を移した。今日も美しい須永の従妹の居る所へ訪問に出掛けるのだと自分で自分に教へる方が、億劫な手数を掛けて、好い顔もしない爺さんに、衣食の途を授けて下さいと泣き附きに行くのだと意識するよりも、敬太郎に取つては遙かに麗らかであつたからである。

彼は須永の従妹と田口の爺さんを自分勝手に親子と極めて置きながら何處迄も二人を引き離して考へてゐた。此間の晩田口と向き合つて玄關先に立つた時も、光線の具合で先方の人品は判然分らなかつたけれども、眼鼻だちの輪廓丈で評した所が、あまり立派な方ではなかつた事は、此爺さんの第一印象として、敬太郎の胸に夜目にも疑ひなく描かれたのである。夫でゐて彼は此男の娘なら、須永との關係は何うあらうとも、器量はあまり可い方ぢやあるまいといふ氣が何處にも起らなかつた。そこで離れてゐて合ひ、合つてゐて離れる様な日向日蔭の裏表を一枚にした頭を彼は田口家に對して抱いてゐたのである。それを互違ひに繰り返した後、彼は田口の門前に立つた。すると其所に大きな自動車に御者を乗せた儘待つてゐたので、少し安からぬ感じがした。玄關へ掛かつて名刺を出すと、小倉の袴を穿いた若い書生がそれを受取つて、「一寸」と云つた儘奥へ這入つて行つた。其聲が確かに先刻電話口で聞いたのに違ひないので、敬太郎は彼の後姿を見送りながら厭な奴だと思つた。すると彼は名刺を持つた儘又現はれた。さうして「御氣の毒ですが、只今來客中ですから又何うぞ」と云つて、敬太郎の前に突立つてゐた。敬太郎も少し勃とした。

「先程電話で御都合を伺つたら、今客があるから午後一時頃來いといふ御返事でしたか」

「實はさつきの御客がまだ御歸りにならないで、御膳などが出て混雑してゐるんです」
落ち附いて聞きさへすれば満更無理もない言譯なのだ、電話以後此取次が癪に障つてゐる敬太郎には彼の云ひ草が如何にも氣に喰はなかつた。それで自分の方から先を越す積りか何かで、「さうですか、度々御足勞でした。どうぞ御主人へよろしく」と平仄の合はない捨臺詞のやうな事を云つた上、何だこんな自動車だと云はぬ許りに其傍を擦り抜けて表へ出た。

十

彼は此日必要な會見を都合よく済ました後、新しく築地に世帯を持つた友人の所へ廻つて、須永と彼の従妹とそれから彼の叔父に當たる田口とを想像の線で巧みに繋ぎ合はせつゝある一部始終を御馳走に、晩迄話し込む氣でゐたのである。けれども田口の門を出て日比谷公園の傍に立つた彼の頭には、そんな餘裕は更になかつた。後姿を見た丈ではあるが、在所を既に突き留めて、今其人の家を尋ねたのだといふ陽氣な心持は固よりなかつた。位置を求めに此所迄來たといふ自覺は猶なかつた。彼はたゞ屈辱を感じた結果として、腹を立ててゐた丈である。さうして自分を田口のやうな男に紹介した須永こそ此取扱ひに對して當然責任を負はなくてはならないと感じて

ゐた。彼は歸り掛けに須永の所へ寄つて、逐一顛末を話した上、存分文句を並べてやらうと考へた。それで又電車に乗つて一直線に小川町迄引返して來た。時計を見ると、二時にはまだ二十分程間があつた。須永の家の前へ來て、わざと往來から須永々々と二聲ばかり呼んで見たが、居るのか居ないのか二階の障子は立て切つた儘遂に開かなかつた。尤も彼は體裁家で、平生から斯ういふ呼び出し方を田舎者らしいといつて厭がつてゐたのだから、聞こえても知らん顔をしてゐるのではなからうかと思つて、敬太郎は正式に玄關の格子口へ掛かつた。けれども取次に出た仲働の口から「午少し過ぎに御出ましになりました」といふ言葉を聞いた時は、一寸張合ひが抜けて少しの間黙つて立つてゐた。

「風邪を引いてゐた様でしたか」

「はい、御風邪を召して入らつしやいましたが、今日は大分好いからと仰しやつて、御出掛けになりました」

敬太郎は歸らうとした。仲働は「一寸御隠居さまに申し上げますから」といつて、敬太郎を格子のうちに待たした儘奥へ這入つた。と思ふと襖の陰から須永の母の姿が現はれた。脊の高い面長の下町風に品のある婦人であつた。

「さあ何うぞ。もう其内歸りませうから」

須永の母に斯う云ひ出されたが最後、江戸慣れない敬太郎は何うそれを断つて外へ出て可いか、未だに其心得がなかつた。第一何處で断る隙間もないやうに、調子の好い文句が夫から夫へとずるずる彼の耳へ響いて來るのである。それが世間體の好い御世辭と違つて、引き留められてゐるうちに、上がつては迷惑だらうといふ遠慮が何時の間にか失くなつて、つい氣の毒だから少し話して行かうといふ氣になるのである。敬太郎は云はれる儘にとう／＼例の書齋へ腰を卸ろした。須永の母が御寒いでせうと云つて、仕切りの唐紙を締めて呉れたり、さあ御手を御出しなさいと云つて、佐倉を埋けた火鉢を勧めて呉れたりするうちに、一時昂奮した彼の氣分は次第に落ち附いて來た。彼はシキとかいふ白い絹へ秋田蓑を一面に大きく摺つた襖の模様だの、唐桑らしくてらてらした黄色い手焙だのを眺めて、此しとやかで能辯な、人を外らす事を知らないといふ風の母と話をした。

彼女の語る所によると、須永は今日矢來の叔父の家へ行つたのださうである。

「ぢやあ序だから歸りに小日向へ廻つて御寺參りを爲て來て御呉れつて申しましたら、御母さんは近頃無精になつた様ですね、此間も他に代理をさせたちやありませんか、年を取つた所爲かしら……」

しらなんて悪口を云ひ云ひ出て參りましたが、あれもね貴方、先達て中から風邪を引いて咽喉を痛めて居りますので、今日も何なら止した方が可いぢやないかと留めて見ましたが、矢つ張り若いものは用心深いやうでも何處か我無しやうで、年寄の云ふ事杯には一切無頓着で御座いますから……」

須永の留守へ行くと、彼の母は唯一の楽しみみのやうに斯ういふ調子で倅の話をするのが常であつた。敬太郎の方で須永の評判でも持ち出さうものなら、何時迄でも其問題の後へ喰つ附いて來て、容易に話頭を改めないのが例になつてゐた。敬太郎もそれには大分慣れてゐるから、此際も向うのいふ通りを只ふん／＼と大人しく聞いて、一段落の來るのを待つてゐた。

十一

其内話しがいつか肝心の須永を逸れて、矢來の叔父といふ人の方へ移つて行つた。是は内幸町と違つて、此御母さんの實の弟に當たる男ださうで、一種の贅澤屋の様に敬太郎は須永から聞いてゐた。外套の裏は縞子でなくては見つともなくて着られないと云つたり、要りもしないのに古渡りの更紗玉とか號して、石だか珊瑚だか分らないものを愛玩したりする話は未だに覺えてゐ

た。「何もしないで贅澤に遊んでゐられる位好い事はないんだから、結構な御身分ですね」と敬太郎が云ふのを引き取るやうに母は、「何うして貴方、打ち明けた御話しが、まあ何うにか斯うにか遣つて行けるといふ迄で、樂だの贅澤だのといふ段にはまだ中々なので御座いますから不可ません」と打ち消した。

須永の親戚に當たる人の財力が、左程敬太郎に關係のある譯でもないのに、彼は夫なり黙つて仕舞つた。すると母は少しでも談話の途切れるのを自分の過失でもあるやうに、すぐ言葉を繼いだ。

「夫でも妹婿の方は御蔭さまで、何だ蚊だつて方々の會社へ首を突つ込んで居りますから、此方はまあ不自由なく暮らしてをる模様で御座いますが、手前共や矢來の弟などになりますと、云はゞ浪人同様で、昔に比べたら、尾羽うち枯らさない許りの體たらくだつて、よく弟ともさう申しては笑ふこつて御座いますよ」

敬太郎は何となく自分の身の上を顧て氣恥づかしい思ひをした。幸ひに先方がすらく喋舌つて呉れるので、此方に受け答へをする文句を考へる必要がないのを責めてもの得として聞き續けた。

「夫にね、御承知の通り市藏があゝいふ引つ込み思案の男だもんで御座んすから、私もたゞ學校を卒業させた丈では、全く心配が抜けませんので、まことに困り切ります。早く氣に入つた嫁でも貰つて、年寄に安心でもさせて呉れる様におしなと申しますと、さう御母さんの都合のいゝやうに計り世の中は行きやしませんて、天で相手にしないんで御座いますよ。そんなら世話をしてくれる人に頼んで、何處へでも可いから、務めにでも出る氣になればまだしも、そんな事には又丸で無頓着で貴方……」

敬太郎は此點に於て實際須永が横着過ぎると平生から思つてゐた。「餘計な事ですが、少し目上の人から意見でも仕上げる様にしたら何うでせう。今御話しの矢來の叔父さんからでも」と全く年寄に同情する氣で云つた。

「所が是が又大の交際嫌ひの變人で御座いまして、忠告どころか、何だ銀行へ這入つて算盤なんかパチ／＼云はすなんて馬鹿があるもんかと、斯うで御座いますから頭から相談にも何にもありません。それを又市藏が嬉しがりまです。矢來の叔父の方が好さだとか氣が合ふとか申しちや能く出掛けます。今日なども日曜ぢやあるし御天氣は好しするから、内幸町の叔父が大阪へ立つ前に一寸あちらへ顔でも出せば可いので御座いますけれども、矢つ張り矢來へ行くんだつて、

とうとう自分の好きな方へ参りました」

敬太郎は此時自分が今日何の爲に馳け込むやうに此家を襲つたかの原因に就いて、又新しく考へ出した。彼は須永の顔を見たら随分過激な言葉を使つても其不都合を責めた上、僕はもう二度とあすこの門は潜らない積りだから、さう思つて呉れ給へ位の臺詞を云つて歸る氣でゐたのに、肝心の須永は留守で、事情も何も知らない彼の母から、逆さに色々な話しを仕掛けられたので、怒つて遣らうといふ氣は無論抜けて仕舞つたのである。が、夫でも行き掛り上、田口と會見を遂げ得なかつた顛末丈は、一應此母の耳へでも構はないから入れて置く必要があるだらう。それに話しの中に内幸町へ行くとか行かないとかが問題になつてゐる今が一番可からう。——斯う敬太郎は思つた。

十二

「實はその内幸町の方へ今日私も出たんですが」と云ひ出すと、自分の息子の事ばかり考へてゐた母は、「ちや左様で御座いましたか」と漸と氣が附いて濟まないといふ顔附をした。此間から敬太郎が躍起になつて口を探してゐる事や、探しあぐんで須永に紹介を頼んだ事や、須永が

それを引き受けて内幸町の叔父に會へるやうに周旋した事は、須永の傍にゐる母として彼女の悉く見たり聞いたりした所であるから、行き届いた人なら先方で何も云ひ出さない前に、此方から何んな模様です位は聞いて遣るべきだとも思つたのだらう。斯う觀察した敬太郎は、此一句を前置きに、今迄の成行を残らず話さうと力めに掛かつたが、時々相手から「左様で御座いますとも」とか、「本當にまあ、間の悪い時にはね」とか、何方にも同情したやうな間投詞が出るので、自分がむかつ腹を立てて悪體を吐いた事などは話しのうちから綺麗に抜いて仕舞つた。須永の母は氣の毒といふ言葉を何遍も繰り返した後で、田口を辯護するやうに斯んな事を云つた。——

「そりやあ實の所忙しい男なので。妹などもあゝして一つ家に住んで居りますやうなもの、——何で御座んせう。——落ち／＼話しの出来るのは恐らく一週間に一日も御座いますまい。私が見兼ねて要作さんいくら御金が儲かるたつて、さう働いて身體を壊しちや何にもならないから、偶には骨休めをなさいよ、身體が資本ぢやありませんかと申しますと、己等もさう思つてゐるんだが、夫から夫へと用が湧いてくるんで、傍から掬ひ出さないと、用が腐つちまふから仕方がないなんて笑つて取り合ひませんので。さうかと思ふとまた妹や娘に今日は是から鎌倉へ伴れて行く、さあすぐ支度をしろつて、丸で足元から鳥が立つやうに急ぎ立てる事も御座いますか……」

「御嬢さんが御有りなのですか」

「え、二人居ります。何れも年頃で御座いますから、もうそろそろ何處かへ片附けるとか婿を取るとかしなければなりませんまいか」

「其内の一人の方が、須永君の所へ御出でになる譯でもないんですか」

母は一寸口籠つた。敬太郎もたゞ自分の好奇心を満足させるためにあまり立ち入つた質問を掛け過ぎたと気が附いた。何とかして話題を轉じようと考へてゐるうちに、相手の方で、

「まあ何うなりますか。親達の考へも御座いませうし。當人達の存じ寄りも確と聞き糺して見ないと分りませんし。私ばかりで斯うもしたい、彼あもしたいと幾何熱急思つても是計りは致し方が御座いません」と何だか意味のありさうな事を云つた。一度退き掛けた敬太郎の好奇心は此答で又打ち返して來さうにしたが、善くないといふ克己心にすぐ抑へられた。

母は猶田口の辯護をした。そんな忙しい身體だから、時によると心にもない約束違ひ杯をする事もあるが、一旦引き受けた以上は忘れる男ではないから、まあ旅行から歸る迄待つて、緩り會つたら宜からうといふ注意とも慰藉とも附かない助言も與へた。

「矢來のは居つても會はん方で、是は仕方が御座いませんが、内幸町のは居ないでも都合さ

へ附けば馳けて歸つて來て會ふといった風の性質で御座いますから、今度旅行から歸つて來さへすれば、此方から何とも云つて遣らないでも、向うで屹度市藏の所へ何とか申して參りますよ。屹度」

斯う云はれて見ると、成程さういふ人らしいが、それは此方が大人しくしてゐればこそで、先刻の様にぶん／＼怒つては到底物にならないに極まり切つてゐる。然し今更それを打ち明ける譯には行かないので、敬太郎はたゞ黙つてゐた。須永の母は猶「あんな顔はして居りますが、見懸けによらない實意のある剽輕者で御座いますから」と云つて一人で笑つた。

十三

剽輕者といふ言葉は田口の風采なり態度なりに照り合はせて見て、何うも敬太郎の臍に落ちない形容であつた。然し實際を聞いて見ると、成程當たつてゐる所もあるやうに思はれた。田口は昔ある御茶屋へ行つて、姉さん此電氣燈は熱り過ぎるね、もう少し暗くして御呉れと頼んだ事があるさうだ。下女が怪訝な顔をして小さい球と取り換へませうかと聞くと、いゝえさ、其所を一寸捻ぢつて暗くするんだと眞面目に云ひ附けるので、下女は是は電氣燈のない田舎から出て來た

人に違ひないと見て取つたものか、くすくす笑ひながら、旦那電氣はランプと違つて捻つたつて暗くはなりませんよ、消えちまふ丈ですから。ほらねとばかりと音をさせて座敷を眞暗にした上、又ばつと元通りに明るくするかと思ふと、大きな聲でばあと云つた。田口は少しも悄然ずに、おやおや未だ舊式を使つてるね。見つともないぢやないか、此所の家にも似合はないこつた。早く會社の方へ改良を申し込んで置くと可い。順番に直して呉れるから。と左も尤もらしい忠告を與へたので、下女もとうとう眞に受け出して、本當に是ぢや不便ね、だいち點けつ放して寐る時なんか明る過ぎて、困る人が多いでせうからと左も感心したらしく、改良に賛成したさうである。ある時用事が出来て門司とか馬關とか迄行つた時の話は是よりも餘程念が入つてゐる。一所に行ぐべき筈のAといふ男に差支へが起つて、二日ばかり彼は宿屋で待ち合はしてゐた。其間の退屈紛れに、彼はAを一つ擔いで遣らうと巧らんだ。是は町を歩いてゐる時、一軒の寫眞屋の店先で不圖思ひ附いた悪戯で、彼は其店から地方の藝者の寫眞を一枚買つたのである。其裏へA様と書いて、手紙を添へた贈物のやうに拵へた。其手紙は女を一人雇つて、充分の時間を與へた上、出来る丈Aの心を動かす様に艶かしく曲らしたもので、誰が貰つても嬉しい顔をするに足る計りか、今日の新聞を見たら、明日此所へ御着きの筈だと出てゐたので、久し振に此手紙を上げるんだか

ら、何うか読み次第、何處其所迄来て頂きたいと書いた中々安くないものであつた。彼は其晩自分で此手紙をポストへ入れて、翌日配達の時又それを自分で受取つたなり、Aの來るのを待ち受けた。Aが着いても彼は此手紙を中々出さなかつた。力めて眞面目な用談に就いての打合せなどを大事らしく爲績けて、漸と同じ食卓で晚餐の膳に向つた時、突然思ひ出したやうに袂の中からそれを取り出してAに與へた。Aは表に至急親展とあるので、一寸箸を下に置くと、すぐ封を開いたが、少し読み下すと同時に包んである寫眞を抜いて裏を見るや否や、急に丸める様に懐へ入れて仕舞つた。何か急ぎの用でも出来たのかと聞くと、いや何といふばかりで、不得要領に又箸を取つたが、何處となくそはくした様子で、まだ段落の附かない用談を其儘に、少し失禮する腹が痛いからと云つて自分の部屋に歸つた。田口は下女を呼んで、今から十五分以内にAが外出するだらうから、出るときは車が待つてもゐたやうに、Aが何も云はない先に彼を乗せて馳け出して、その思はく通り何處の何といふ家の門へ御ろすやうにしると云ひ附けた。さうして自分はAより早く同じ家へ行つて、主婦を呼ぶや否や、今おれの宿の提灯を點けた車に乗つて、是々の男が來るから、來たらすぐ綺麗な座敷へ通して、丁寧に取扱つて、向うで何も云はない先に、御連様は疾うから御待ち兼ねで御座いますと云つたなり引き退がつて、すぐ己の所へ知らせして呉

れと頼んだ。さうして一人で煙草を吹かして腕組をしながら、事件の経過を待つてゐた。すると萬事が旨い具合に豫定の通り進行して、愈自分の出る順が来た。そこでAの部屋の傍へ行つて間の襖を開けながら、やあ早かつたねと挨拶すると、Aは顔の色を變へて驚いた。田口は其前へ坐り込んで、實は是々だと残らず自分の悪戯を話した上、「擔いだ代りに今夜は僕が奢るよ」と笑ひながら云つたんだといふ。

「斯ういふ飄氣た真似をする男なんで御座いますから」と須永の母も話した後で可笑しうに笑つた。敬太郎はあの自動車はまさか悪戯ぢやなかつたらうと考へながら下宿へ歸つた。

十四

自動車事件以後敬太郎はもう田口の世話になる見込はないものと諦めた。それと同時に須永の従弟と假定された例の後姿の正體も、略發端の入口に當たる浅い所ではたりと行き留まつたのだと思ふと、其底に齒痒いやうな又煮え切らないやうな不愉快があつた。彼は今日迄何一つ自分の力で、先へ突き抜けたといふ自覺を有つてゐなかつた。勉強だらうが、運動だらうが、其他何事に限らず本氣に遣り掛けて、貫き終せた試しがなかつた。生れてから只一つ行ける所迄行つたの

は、大學を卒業した位なものである。それすら精を出さずにとぐろ計り巻きたがつてゐるのを、向うで引き摺り出して呉れたのだから、中途で動けなくなつた間怠さのない代りには、漸との思ひで井戸を掘り抜いた時の晴々とした心持も知らなかつた。

彼は益槍して四五日過ぎた。不圖學生時代に學校へ招待した或宗教家の談話を思ひ出した。其宗教家は家庭にも社會にも何の不満もない身分なのに、自ら進んで坊主になつた人で、其當時の事情を述べる時に、何うしても不思議で堪らないから斯の道に入つて見たと云つた。此人は何んな朝らかに透き徹る様な空の下に立つても、四方から閉ぢ込められてゐる様な氣がして苦しかつたのださうである。樹を見ても家を見ても往來を歩く人間を見ても鮮やかに見えながら、自分丈硝子張の箱の中に入れられて、外の物と直かに續いてゐない心持が絶えずして、仕舞には窒息する程苦しくなつて來るんだといふ。敬太郎は此話を聞いて、それは一種の神經病に罹つてゐたのではなからうかと疑つたなり、今日迄氣にも掛けずにゐた。然し此四五日益槍屈託してゐるうちに能く／＼考へて見ると、彼自身が今迄に、何一つ突き抜いて痛快だといふ感じを得た事のないのは、坊主にならない前の此宗教家の心に何處か似た點があるやうである。勿論自分のは比較にならない程微弱で、しかも性質が丸で違つてゐるから、此坊さんの様にえらい勇斷を爲る必要は

ない。もう少し奮發して氣張る事さへ覺えれば、當たつても外れても、今よりはまだ痛快に生きて行かれるのに、今日迄つひぞ其所に心を用ひる事をしなかつたのである。

敬太郎は一人で斯う考へて、何處へでも進んで行かうと思つたが、又一方では、もうすつぽ抜きの後の祭の様な氣がして、何と云ふ當てもなく又三四日ぶらくと暮らした。其間に有樂座へ行つたり、落語を聞いたり、友達と話したり、往來を歩いたり、色々遣つたが、何れも藥罐頭を攫むと同じ事で、世の中は少しも手に握れなかつた。彼は碁を打ちたいのに、碁を見せられるといふ感じがした。さうして同じ見せられるなら、もう少し面白い波瀾曲折のある碁が見たいと思つた。

すると直ぐ須永と後姿の女との關係が想像された。もと／＼頭の中で無暗に色澤を着けて奥行のある様に組み立てる程の關係でもあるまいし、あつた所が他の事を餘計な御切買だと、自分で自分を嘲りながら、あゝ馬鹿らしいと思ふ後から、矢つ張り何かあるだらうといふ好奇心が今の様にちよい／＼と閃めいて來るのである。さうして此道をもう少し辛抱強く先へ押して行つたら、自分が今迄経験した事のない浪漫的な或物に打つかるかも知れないと考へ出す。すると田口の玄關で怒つたなり、あの女の研究迄投げて仕舞つた自分の短氣を、自分の好奇心に釣り合はない弱

味だと思ひ始める。

職業に就いても、あんな些細の行違ひの爲に愛想づかしを假令一句でも口にして、自分と田口の敷居を高くする筈ではなかつたと思ふ。あれで出來るとも出來ないとも、まだ方のつかない未來を中途半端に仕切つてしまつた。さうして好んで煮え切らない思ひに惱んでゐる姿になつてしまつた。須永の母の保證する所では、田口といふ老人は見掛けに寄らない親切氣のある人ださうだから、或は旅行から歸つて來た上で、又改めて會つて呉れないとも限らない。が、此方からも一遍會見の都合を問ひ合はせたり杯して、常識のない馬鹿だと輕蔑まれても詰らない。けれども何の道突き抜けた心持を確り捕まへる爲には馬鹿と云はれる迄も、其所迄突つ懸けて行く必要があるだらう。——敬太郎は屈託しながらも色々考へた。

十五

けれども身の一大事を即座に決定するといふ非常な場合と違つて、敬太郎の思案には屈託の裏に、何處か呑氣なものがふは／＼してゐた。此道をとゞの詰り迄進んで見ようか、又は是限り已めにして、更に新しいものに移る支度をしようか。問題は煎じ詰める迄もなく當初から至極簡單

に出来上がつてゐたのである。それに迷ふのは、一度籤を引き損なつたが最後、もう浮かぶ瀬はないといふ非道い目に會ふからではなくつて、何方に轉んでも大した影響が起らないため、何うでも好いといふ怠けた心持が何時しらす働くからである。彼は眠い時に本を讀む人が、眠氣に抵抗する努力を厭ひながら、文字の意味を判明頭に入れようと試みる如く、呑氣の懷で決斷の卵を温めてゐる癖に、たゞ旨く孵化らない事ばかり苦にしてゐた。この不決斷を逃れなければといふ口實の下に、彼は暗に自分の物數奇に媚びようとした。さうして自分の未來を賣卜者の八卦に訴へて判斷して見る氣になつた。彼は加持、祈禱、御封、蟲封じ、降巫の類に、全然信仰を有つ程、非科學的に教育されてはゐなかつたが、それ相當の興味は、何れに對しても昔から今日迄失はずに成長した男である。彼の父は方位九星に詳しい神經家であつた。彼が小學校へ行く時分の事であつたが、ある日曜日に、彼の父は尻を端折つて、鍬を擔いだ儘庭へ飛び下りるから、何をするのかと思つて、後から跟いて行かうとすると、父は敬太郎に向つて、御前は其所にゐて、時計を見て居ろ、さうして十二時が鳴り出したら、大きな聲を出して合圖をして呉れ、すると御父さんがあの乾に當たる梅の根つこを掘り始めるからと云ひ附けた。敬太郎は子供心に又例の家相だと思つて、時計がちゃんと鳴り出すや否や命令通り、十二時ですようと大きな聲で叫んだ。それで、

其場は無事に済んだが、あれ程正確に鍬を下ろす積りなら、肝心の時計が狂つてゐない様に豫め直して置かなくてはならない筈だのにと敬太郎は父の迂濶を可笑しく思つた。學校の時計と自分の家のは其時二十分近く違つてゐたからである。所が其後摘草に行つた歸りに、馬に蹴られて土堤から下へ轉がり落ちた事がある。不思議に怪我も何もしなかつたのを、御祖母さんが大層喜んで、全く御地藏様が御前の身代りに立つて下さつた御蔭だ是御覽と云つて、馬の繫いであつた傍にある石地藏の前に連れて行くと、石の首がぼくりと缺けて、涎掛丈が残つてゐた。敬太郎の頭には其時から怪しい色をした雲が少し流れ込んだ。其雲が身體の具合や四邊の事情で、濃くなつたり薄くなつたりする變化はあるが、成長した今日に至る迄、未だに抜け切らずにゐた事丈は慥かである。

斯ういふ譯で、彼は明治の世に傳はる面白い職業の一つとして、何時でも大道占ひの弓張提灯を眺めてゐた。尤も金を拂つて筵竹の音を聞く程の熱心はなかつたが、散歩の序に、寒い顔を提灯の光に映した女などが、悄然其所に立つてゐるのを見掛けると、此暗い影を未來に投げて、思案に沈んでゐる憐れな人に、易者が何んな希望と不安と畏怖と自信とを與へるだらうといふ好奇心に惹かされて、面白半分、そつと傍へ寄つて、陰の方から立聞きをする事が屢あつた。彼の友

八二
の某が、自分の脳力に悲観して、試験を受けようか學校を已めようかと思ひ煩つてゐる頃、ある人が旅行の序に、善光寺如來の御神籤を頂いて第五十五の吉といふのを郵便で送つて呉れたら、其中に雲散じて月重ねて明らかなり、といふ句と、花發いて再び重榮といふ句があつたので、物は試しだからまあ受けて見ようと云つて、受けたら綺麗に及第した時、彼は興に乗つて、方々の神社で手當り次第御神籤を頂き廻つた事さへある。しかも夫は別に是といふ目的なしに頂いたのだから彼は平生でも、優に賣卜者の顧客になる資格を充分具へてゐたに違ひない。其代り今度の様な場合にも、何處か慰みがてらに、まあ遣つて見ようといふ浮氣が大分交つてゐた。

十六

敬太郎は何處の占ひ者に行つたものと考へて見たが、生憎何處といふ當てもなかつた。白山の裏とか、芝公園の中とか、銀座何丁目とか今迄に名前を聞いたのは二三軒あるが、無暗に流行るのは山師らしくつて行く氣にならず、と云つて、自分で嘘と知りつゝ出鱈目を強ひて尤もらしく述べる奴は猶不都合であるし、出来るならば餘り人の込み合はない家で、閑靜な髻を生やした爺さんが奇警な言葉で、簡潔にすばく道破つて呉れるのが何處かにゐれば可いと思つた。

さう思ひながら、彼は自分の父が能く相談に出掛けた、郷里の一本寺の隱居の顔の頭の中に描き出した。夫から不圖氣が附いて、考へるんだか只坐つてゐるんだか分らない自分の様子が馬鹿馬鹿しくなつたので、兎に角出て其所いらを歩いてるうちに、運命が自分を誘ひ込むやうな占ひ者の看板に打つかるだらうといふ漠然たる頭に帽子を載せた。

彼は久し振に下谷の車坂へ出て、あれから東へ真直に、寺の門だの、佛師屋だの、古臭い生薬屋だの、徳川時代のがらくたを埃と一所に竝べた道具屋だのを左右に見ながら、わざと門跡の中を抜けて、奴鰻の角へ出た。

彼は子供の時分よく江戸時代の淺草を知つてゐる彼の祖父さんから、しばく觀音様の繁華を耳にした。仲見世だの、奥山だの、並木だの、駒形だの、色々云つて聞かされる中には、今の人があまり口にしなない名前さへあつた。廣小路に菜飯と田樂を食はせるすみ屋といふ洒落た家があるとか、駒形の御堂の前の綺麗な繩暖簾を下げた鱈屋は昔から名代なものだとか、食物の話も大分聞かされたが、凡ての中で最も敬太郎の頭を刺激したものは、長井兵助の居合抜きと、脇差をぐいぐい呑んで見せる豆藏と、江州伊吹山の麓にゐる前足が四つで後足が六つある大墓の干し固めたのであつた。夫等には藏の二階の長持の中にある草双紙の畫解さが、子供の想像に都合の好

いやうな説明を幾何でも與へて呉れた。一本歯の下駄を穿いた儘、小さい三寶の上に曲んだ男が、禱掛けで身體よりも高く反り返つた刀を抜かうとする所や、大きな蝦蟇の上に胡坐をかいて、兒雷也が魔法か何か使つてゐる所や、顔より大きき天眼鏡を持つた白い髻の爺さんが、唐机の前に坐つて、平突張つたちよん鬚を上から見下ろす所や、大抵の不思議なものはみんな繪本から抜け出して、想像の淺草に竝んでゐた。斯う云ふ譯で敬太郎の頭に映る觀音の境内には、歴史的に妖嬌陸離たる色彩が、十八間の本堂を包んで、子供の時から常に陽炎つてゐたのである。東京へ來てから、此怪しい夢は固より手痛く打ち崩されて仕舞つたが、夫でも時々は今でも觀音様の屋根に鶴の鳥が巢を食つてゐるだらう位の考へにふら／＼となる事がある。今日も淺草へ行つたら何うかなるだらうといふ料簡が暗に働いて、足が自づと此方に向いたのである。然しルナパークの後から活動寫眞の前へ出た時は、是や占ひ者などの居る所ではないと今更の様に其雜沓に驚いた。切めて御賓頭願でも撫でて行かうかと思つたが、何處にあるか忘れてしまつたので、本堂へ上がつて、魚河岸の大提灯と頼政の襦袢を退治してゐる額丈見てすぐ雷門を出た。敬太郎の考へでは是から淺草橋へ出る間には、一軒や二軒の易者はあるだらう。もし在つたら何でも構はないから入る事にしよう。或は高等工業の先を曲がつて柳橋の方へ抜けて見ても好いなどと、丸で時分

どきに恰好な飯屋でも探す氣で歩いてゐた。所がいざ探すととなると生憎なもので、平生は散歩さへすれば至る所に神易の看板がぶら下がつてゐる癖に、あの廣い表通に門戸を張つてゐる卜者は丸で見當たらなかつた。敬太郎は此企圖も亦例によつて例の如く、突き抜けずに中途で御仕舞ひになるのかも知れないと思つて少し失望しながら藏前まで來た。すると漸との事で尋ねる商賣の家が一軒あつた。細長い堅木の厚板に、身の上判断と割書をした下に、文錢占ひと白い字で彫つて、其又下に、漆で塗つた眞赤な唐辛子が描いてある。此奇態な看板が先づ敬太郎の眼を惹いた。

十七

能く見ると是は一軒の生薬屋の店を仕切つて、其狭い方へ小瀟洒した差掛け様のものを作つたので、中に七色唐辛子の袋を竝べてあるから、看板の通りそれを賣る傍、占ひを見る趣向に違ひない。敬太郎は斯う觀察して、そつと館轉餅屋に似た差掛けの奥を覗いて見ると、小作りな婆さんが只一人裁縫をしてゐた。狭い室一つの住居としか思はれないのに、肝心の易者の影も形も見えないから、主人は他行中で、細君が留守番をしてゐる所かとも思つたが、店先の構造から推すと、奥は生薬屋の方と續いてゐるかも知れないので、一概に留守と見切りを附ける譯にも行かな

かつた。それで二三歩先へ出て、藥種店の方を覗くと、八つ目鰻の干したのも釣るしてなければ、大きな龜の甲も飾つてないし、人形の腹をがらん胴にして、五色の五臓を外から見えるやうに、腹の中の棚に載せた古風の裝飾もなかつた。一本寺の隠居に似た髻のある爺さんは固より坐つてゐなかつた。彼は再び立ち戻つて、身の上判斷文錢占ひといふ看板の懸かつた入口から暖簾を潜つて内へ入つた。裁縫をしてゐた婆さんは、針の手を已めて、大きな眼鏡の上から睨むやうに敬太郎を見たが、たゞ一口、占ひですかと聞いた。敬太郎は「え、一寸見て貰ひたいんだが、御留守のやうですね」と云つた。すると婆さんは、膝の上のやはらか物を隅の方へ片附けながら、御上がりなさいと答へた。敬太郎は云はれる通り素直に上がつて見ると、狭いけれども居心地の悪い程汚れた室ではなかつた。現に壘杯は取り替へ立ててまだ新しい香がした。婆さんは煮立つた鐵瓶の湯を湯呑みに注いで、香煎を敬太郎の前に出した。さうして昔は藥箱でも載せた棚らしい所に片附けてあつた小机を取り卸ろしに掛かつた。其机には無地の羅紗が掛けてあつたが、婆さんはそれを其儘敬太郎の正面に据ゑて、さうして再び故の座に歸つた。

「占ひは私かするのです」

敬太郎は意外の感に打たれた。此小さい丸髻に結つた、黒縞子の襟の掛かつた着物の上に、地

味な縞の羽織を着た、一心に縫物をしてゐる、純然家庭的の女が、自分の未來に横たはる運命の豫言者であらうとは全く想像の外にあつたのである。其上彼は此婦人の机の上に、篋竹も算木も天眼鏡もないのを不思議に眺めた。婆さんは机の上に乗つてゐる細長い袋の中からちやら／＼と音をさせて、穴の開いた錢を九つ出した。敬太郎は始めて是が看板に「文錢占ひ」とある文錢なるものだらうと推察したが、偕此九枚の文錢が、暗い中で自分を操つてゐる運命の糸と、どんな關係を有つてゐるか、固より想像し得る筈がないので、たゞ其所に鑄出された模様と、それが仕舞つてあつた袋とを見比べるだけで、何事も云はずにゐた。袋は能装束の切れ端か、懸物の表具の餘りで拵へたらしく、金の糸が所々に光つてゐるけれども、大分古いものと見えて、手擦れと時代のため、派手な色を全く失つてゐた。

婆さんは年寄に似合はない白い纖麗な指で、九枚の文錢を三枚宛三列に並べたが、ひよつと顔を上げて、「身の上を御覽ですか」と聞いた。

「さあ一生涯の事を一度に聞いて置いても損はないが、夫よりか今此所で何うしたら可いか、其方を極めて懸かる方が僕には大切らしいから、まあ夫を一つ願はう」

婆さんはさうですかと答へたが、夫で御年はと又敬太郎の年齢を尋ねた。それから生れた月と

八八
目を確めた。其後で胸算用でもする案排しきで、指を折つて見たり、たゞ考へたりしてゐたが、やがて又綺麗な指で例の文錢を新しく竝べ更へた。敬太郎は表に波が出たり或は文字が現はれたりして、三枚が三列に續く順序と排列を、深い意味でもある様な眼附をして見守つてゐた。

十八

婆さんはしばらく手を膝の上に載せて、何事も云はずに古い錢の面を凝と注意してゐたが、やがて考への中心點が明快纏まつたといふ様子をして、「貴方は今迷つて入らつしやる」と云ひ切つたなり敬太郎の顔を見た。敬太郎はわざと何も答へなかつた。

「進まうか止さうかと思つて迷つて入らつしやるが、是は御損ですよ。先へ御出になつた方が、たとひ一時は思はしくない様でも、未始終御爲ですから」

婆さんは一區限り附けると、又口を閉ぢて敬太郎の様子を窺つた。敬太郎は始めからたゞ先方のいふ事をふん／＼聞く丈にして、此方では何も喋舌らない積りに、腹の中で極めて掛かつたのであるが、婆さんの此一言に、ぼんやりした自分の頭が、相手の聲に映つてちらりと姿を現はしたやうな氣がしたので、つい其刺激に應じて見たくなつた。

「進んでも失敗る様な事はないでせうか」

「えゝ。だから成るべく大人しくして。短氣を起さないやうにね」

是は豫言ではない、常識があらゆる人に教へる忠告に過ぎないと思つたけれども婆さんの態度に、是といふ故意とらしい點も見えないので、彼は猶質問を續けた。

「進むつて何方の方へ進んだものでせう」

「夫は貴方の方が能く分つて入らつしやる筈ですがね。私はたゞ最う少し先迄御出なさい、其方が御爲だからと申し上げる迄です」

斯うなると敬太郎も行き掛り上さうですかと云つて引込む譯に行かなくなつた。

「だけれども道が二つ有るんだから、その内で何方を進んだら可からうと聞くんです」

婆さんは又黙つて文錢の上を眺めてゐたが、前よりは重苦しい口調で、「まあ同じですね」と答へた。さうして先刻裁縫をしてゐた時に散らばした絲屑を拾つて、其中から紺と赤の絹絲の可也長いのを擇り出して、敬太郎の見てゐる前で、それを綺麗に繕り始めた。敬太郎はたゞ手持無沙汰の徒事とばかり思つて、別段意にも留めなかつたが、婆さんは丹念にそれを五六寸の長さに繕り上げて、文錢の上に載せた。

「是を御覧なさい。斯う繕り合はせると、一本の絲が二筋の絲で、二筋の絲が一本の絲になるぢやありませんか。そら派手な赤と地味な紺が。若い時には兎角派手の方へ派手の方へと驅け出して遣り損なひ勝ちのものです。貴方は今の所此繕り絲見た様に丁度好い具合に、一所に絡まり合つてゐる様ですから御仕合せです」

絹絲の喩は何とも知らず面白かつたが、御仕合せですと云はれて見ると、嬉しいよりも却て可笑しい心持の方が敬太郎を動かした。

「ぢや其紺絲で地道を踏んで行けば、其間にちら／＼派手な赤い色が出て来ると云ふんですね」と敬太郎は向うの言葉を呑み込んだ様な尋ね方をした。

「さうです左様なる筈です」と婆さんは答へた。始めから敬太郎は占ひの一言で、是非共右か左へ片附けなければならぬと迄切に思ひ詰めてゐた譯でもなかつたけれども、是丈で歸るのも少し物足りなかつた。婆さんの云ふ事が、丸で自分の胸と懸け隔たつた別世界の消息なら、固より論はないが、意味の取り方では大分自分の今の身の上に、應用の利く點もあるので、敬太郎は其所に微かな未練を残した。

「最う何も伺ふ事はありませんか」

「さうですね。近い内に一寸した事が出来るかも知れません」

「災難ですか」

「災難でもないでせうが、氣を附けないと遣り損なひます。さうして遣り損なへば夫つさり取返しが附かない事です」

十九

敬太郎の好奇心は少し鋭敏になつた。

「全體何んな性質の事ですか」

「夫は起つて見なければ分りません。けれども盗難だの水難だのではない様です」

「ぢや何うして失敗らない工夫をして好いか、それも分らないでせうね」

「分らない事もあります。若し御望みなら、最う一遍占ひを立て直して見て上げて宜う御座んす」

敬太郎は、では御頼み申しますと云はない譯に行かなかつた。婆さんは又繊細な指先を小器用に動かして、例の文錢を裏表に竝べ更へた。敬太郎から云へば先の竝べ方も今度の竝べ方も大抵

似たものであるが、婆さんには其所に何か重大の差別があるものと見えて、其一枚を引つ繰り返すにも軽卒に手は下さなかつた。漸く九枚を夫々念入りに片附けた後で、婆さんは敬太郎に向つて「大體分りました」と云つた。

「何うすれば好いんですか」

「何うすればつて、占ひには陰陽の理で大きな形が現はれる丈だから、實地は各自が其場に臨んだ時、其大きな形に合はして考へる外ありませんが、まあ斯うです。貴方は自分の様な又他人の様な、長い様な又短かい様な、出る様な又這入る様なものを持つて入らつしやるから、今度事件が起つたら、第一にそれを忘れないやうになさい。左様すれば旨く行きます」

敬太郎は烟に巻かれざるを得なかつた。いくら大きな形が陰陽の理で現はれたにした所で、是ぢや方角さへ立たない霧の様なものだから、假令嘘でも本當でも、最う少し切り詰めた應用の利く所を是非云はせようと思つて、二三押し問答をして見たが、一向埒が明かなかつた。敬太郎はとうとう此禪坊主の寡言に似たものを、手拭に包んだ懷爐の如く懷中させられて表へ出た。御負けに出掛けに七色唐辛子を二袋買つて袂へ入れた。

翌日彼は朝飯の膳に向つて、烟の出る味噌汁椀の蓋を取つたとき、忽ち昨日の唐辛子を思ひ出

して、袂から例の袋を取り出した。それを十二分に汁の上に振り掛けて、ひり／＼するのを我慢しながら食事を済ましたが、婆さんの云はゆる「陰陽の理によつて現はれた大きな形」を頭の中に呼び起して見ると、まだ漠然と瓦斯の如く残つてゐた。然し手の附け様のない謎に氣を揉む程熱心な占ひ信者でもないので、彼は何うにかそれを解釋して見たいと焦心する苦悶を知らなかつた。只其分らない所に妙な趣きがあるので、忘れないうちに、婆さんの云つた通りを紙片に書いて机の抽出へ入れた。

もう一遍田口に會ふ手段を講じて見る事の可否は、昨日既に婆さんの助言で斷定されたものと敬太郎は解釋した。けれども彼は占ひを信じて動くのではない、動かうとする矢先へ婆さんが動く縁を附けて呉れたに過ぎないのだと思つた。彼は須永へ行つて彼の叔父が既に大阪から歸つたか何うか尋ねて見ようかと考へたが、自動車事件の記憶がまだ新たに彼の胸を壓迫してゐるので、足を運ぶ勇氣が一寸出なかつた。電話も此際利用しにくかつた。彼は己むを得ず、手紙で用を辨ずる事にした。彼は先達て須永の母に話したと略同様の顛末を簡略に書いた後で、田口がもう旅行から歸つたか何うかを聞き合はせて、若し歸つたなら御多忙中甚だ恐れ入るけれども、都合して會つて呉れる譯には行くまいか、此方は何うせ閑な身體だから、何時でも指定された時日出

九四
られる積りだがと、此間の權幕は、綺麗に忘れた様な口振を見せた。敬太郎は此手紙を出すと同じ時に、須永の返事を明日にも豫想した。所が二日立つても三日立つても何の挨拶もないので、少し不安の念に惱まされ出した。なまじひ賣卜者の言葉などに動かされて、恥を搔いては詰らないといふ後悔も交つた。すると四日目の午前になつて、突然田口から電話口へ呼び出された。

二十

電話口へ出て見ると案外にも主人の聲で、今直ぐ来る事が出来るかといふ簡単な問ひ合せであつた。敬太郎はすぐ出ますと答へたが、夫丈で電話を切るのは何となく打つ切ら棒過ぎて愛嬌が足りない氣がするので、少し色を着ける爲に、須永君から何か御話しても御座いましたかと聞いて見た。すると相手は、え、市藏から御希望を通知して來たのですが、手數だから直接に私の方で御都合を伺ひました。おや御待ち申しますから、直ぐどうぞ。と云つて夫なり引つ込んで仕舞つた。敬太郎は又例の袴を穿きながら、今度こそ様子が好ささうだと思つた。夫から此間買つた許りの中折を帽子掛けから取ると、未來に富んだ顔に生氣を漲らして快豁に表へ出た。外には白い霜を一度に推いた日が、木枯しにも吹き捲くられずに、穏やかな往來をおつとりと一面に照ら

してゐた。敬太郎は其中を突つ切る電車の上で、光を割いて進む様な感じがした。

田口の玄關は此間と違つて蕭條してゐた。取次に袴を着けた例の書生が現はれた時は、少し極りが悪かつたが、まさか先達ては失禮しましたとも云へないので、素知らぬ顔をして丁寧に來意を告げた。書生は敬太郎を覺えてゐたのか、居ないのか、只はあと云つたなり名刺を受取つて奥へ這入つたが、やがて出て來て、何うぞ此方へと應接間へ案内した。敬太郎は取次の揃へて呉れた上靴を穿いて、御客らしく通るには通つたが、四五脚ある椅子の何れへ腰を掛けて可いか一寸迷つた。一番小さいのにさへ極めて置けば間違ひはあるまいといふ謙遜から、彼は腰の高い眩懸けも裝飾も附かない最も輕さうなのを擇つて、わざと位置の悪い所へ席を占めた。

やがて主人が出て來た。敬太郎は使ひ慣れない切り口上を使つて、初對面の挨拶やら會見の禮やらを述べると、主人は軽くそれを聞き流す丈で、只はあはあと挨拶した。さうしていくら區切りが來ても、一向何とも云つて呉れなかつた。彼は主人の態度に失望する程でもなかつたが、自分の言葉がさう思ふ通り長く續かないのに弱つた。一應頭の中にある挨拶を出し切つて仕舞ふと、後は夫限りで、手持無沙汰と知りながら黙らなければならなかつた。主人は卷蓑入から敷島を一本取つて、あとを心持ち敬太郎のゐる方へ押し遣つた。

「市藏から貴方の御話しは少し聞いた事もあります、一體何ういふ方を御希望なんですか」
實を云ふと、敬太郎には何といふ特別の希望はなかつた。只相當の位置さへ得られ、ばと計り考へてゐたのだから、斯う聞かれると益槍した答より外に出来なかつた。

「凡ての方面に希望を有つてゐます」

田口は笑ひ出した。さうして機嫌の好い顔附をして、學士の數の斯んなに殖えて來た今日、幾何世話をする人があらうとも、さう最初から好い地位が得られ、譯のものでないといふ事情を懇ろに説いて聞かせた。然し夫は田口から改めて教はる迄もなく、敬太郎の疾うから痛切に承知してゐる所であつた。

「何でも遣ります」

「何でも遣りますつたつて、まさか鐵道の切符切りも出来ないでせう」

「いえ出来ませぬ。遊んでるよりは増しですから。將來の見込のあるものなら本當に何でも遣ります。第一遊んでゐる苦痛を逃れる丈でも結構です」

「さう云ふ御考へなら又私の方でも能く氣を附けて置きませう。直ぐといふ譯にも行きます、まづが」

「何うぞ。——まあ試しに使つて見て下さい。貴方の御家の——と云つちや餘り變ですが、貴方の私事にでも可いから一寸使つて見て下さい」

「そんな事でも爲て見る氣がありますか」

「あります」

「それぢや、事に依ると何か願つて見るかも知れませぬ。何日でも構ひませんか」

「え、成るべく早い方が結構です」

敬太郎は是で會見を切り上げて、朗らかな顔をして表へ出た。

二十一

穏やかな冬の日が又二三日續いた。敬太郎は三階の室から、窓に入る空と樹と屋根瓦を眺めて、自然を橙色に暖める大人しい此日光が、恰も自分の爲に世の中を照らしてゐる様な愉快を覺えた。彼は此間の會見で、自分に都合の好い結果が、近い内にわが頭の上に落ちて來るものと固く信ずる様になつた。さうして其結果が何んな異様の形を装つて、彼の前に現はれるかを、彼は最も楽しんで待ち暮らした。彼が田口に依頼した仕事のうちには、普通の依頼者の申し出で以上のもの

迄含んでゐた。彼は一定の職業から生ずる義務を希望した計りでなく、刺激に充ちた一時性の用事をも田口から期待した。彼の性質として、もし成功の影が彼を掠めて閃めくならば、恐らく尋常の雑務とは切り離された特別の精彩を帯びたものが、卒然彼の前に投げ出されるのだらう位に考へた。そんな望みを抱いて、彼は毎日美しい日光に浴してゐたのである。

すると四日ばかりして、又田口から電話が掛かつた。少し頼みたい事が出来たが、わざ／＼呼び寄せるのも氣の毒だし、電話では手間が要つて却て面倒になるし、仕方がないから、速達便で手紙を出す事にしたから、委細はそれを見て承知して呉れ。もし分らない事があつたら、又電話で聞き合はしても可いといふ通知であつた。敬太郎はぼんやり見えてゐた遠眼鏡の度がびたりと合つた時のやうに愉快な心持がした。

彼は机の前を一寸も離れずに、速達便の届くのを待つてゐた。さうして其間絶えず例の想像を逞しくしながら、田口の所謂用事なるものを胸の中で組み立てて見た。其所には何時か須永の門前で見つた後姿の女が、稍ともすると断りなしに入り込んで来た。不圖氣が附いて、もつと實際的のもので有るべき筈だと思ふと、其時丈は自分で自分の空想を叱る様にしては、彼はもどかしい時を過ごした。

やがて待ち焦がれた状態が彼の手に落ちた。彼はすつと音をさせて、封を裂いた。息も繼がずに巻紙の端から端迄を一氣に讀み通して、思はずあつといふ微かな聲を揚げた。與へられた彼の用事は待ち設けた空想よりも猶浪漫的であつたからである。手紙の文句は固より簡單で用事以外の言葉は一切書いてなかつた。今日四時と五時の間に、三田方面から電車に乗つて、小川町の停留所で下りる四十恰好の男がある。それは黒の中折に霜降りの外套を着て、顔の面長い脊の高い、痩せぎすの紳士で、眉と眉の間に大きな黒子があるから其特徴を目標に、彼が電車を降りてから二時間以内の行動を探偵して報知しろといふ丈であつた。敬太郎は始めて自分が危険なる探偵小説中に主要の役割を演ずる一個の主人公の様な心持がし出した。同時に田口が自己の社會的利害を護る爲に、斯んな暗がりの所作を敢てして、他日の用に、他の弱點を握つて置くのではなからうかと云ふ疑ひを起した。さう思つた時、彼は人の狗に使はれる不名譽と不徳義を感じて、一種苦悶の膏汗を腋の下に流した。彼は手紙を手にした儘、凝と眸を据ゑたなり固くなつた。然し須永の母から聞いた田口の性格と、自分が直かに彼に會つた時の印象とを纏めて考へて見ると、決してそんな人の悪さうな男とも思はれないので、たとひ他人の内行に探りを入れるにした所で、必ずしも夫程下品な料簡から出るとは限らないといふ推斷も附いて見ると、一旦硬直になつた筋

肉の底に、又温かい血が通ひ始めて、徳義に逆らふ吐氣なしに、たゞ興味といふ一點から此問題を面白く眺める餘裕も出来てきた。それで世の中に接觸する経験の第一着手として、兎も角も田口から依頼された通りに此仕事を遣り終らせて見ようといふ氣になつた。彼はもう一度篤と田口の手紙を読み直した。さうして其所に書いてある特徴と條件丈で、果して満足な結果が實際に得られるだらうか何うかを確かめた。

二十二

田口から知らせて来た特徴のうちで、本當に其人の身を離れないものは、眉と眉の間の黒子だけであるが、この日の短かい昨今の、四時とか五時とかいふ薄暗い光線の下で、乗降に忙しい多數の客の中から、指定された局部の一點を目標に、是だと思ふ男を過ちなく見附け出さうとするのは容易の事ではない。ことに四時と五時の間と云へば、丁度役所の退ける刻限なので、丸の内から只一筋の電車を利用して、神田橋を出る役人の數丈でも大したものである。それに外と違つて停留所が小川町だから、年の暮に間もない左右の見世先に、幕だの樂隊だの、蓄音機だのを飾るやら具へるやらして、電燈以外の景氣を附けて、不時の客を呼び寄せる混雜も勘定に入れな

ればなるまい。それを想像して事の成否を考へて見ると、到底一人の手際ではといふ覺束ない心持が起つて来る。けれども又尋ね出さうとする其人が、霜降りの外套に黒の中折といふ服装で電車を降りると極まつて見れば、其所にまだ一縷の望がある様にも思はれる。無論霜降りのお套丈では、どんな恰好にしる手掛りになりよう筈がないが、黒の中折を被つてゐるなら、色變りより外に用ひる人のない今日、すぐ眼に附くだらう。夫を目宛てに注意したら或は成功しないとも限るまい。

斯う考へた敬太郎は、兎も角も停留所迄行つて見る事だといふ氣になつた。時計を眺めると、まだ一時を打つた許りである。四時より三十分前に向うへ着くとした所で、三時頃から宅を出れば澤山なのだから、未だ二時間の猶豫がある。彼は此二時間を最も有益に利用する積りで、凝とした儘坐つてゐた。けれども只眼の前に、美土代町と小川町が、丁字になつて交叉してゐる三つ角の雑沓が入り亂れて映る丈で、是と云つて成功を誘ふに足る上分別は浮かばなかつた。彼の頭は考へれば考へる程、同じ場所に吸ひ附いたなり丸で動くことを知らなかつた。其所へ、何うしても目指す人には會へまいといふ掛念が、不安を伴なつて胸の中をぎわつかせた。敬太郎は一層の事時間が来る迄外を歩き續けに歩いて見ようかと思つた。さう決心をして、兩手を机の縁に掛

1011
けて、勢ひよく立ち上がらうとする途端に、此間淺草で占ひの婆さんから聞いた「近い内に何か事があるから、其時には斯うくいふものを忘れない様にしろ」といふ注意を思ひ出した。彼は婆さんの其時の言葉を、解すべからざる謎として、殆ど頭の外へ落として仕舞つたにも拘らず、参考の爲わざ／＼書附にして机の抽出に入れて置いた。で又其紙片を取り出して、自分の様で他人の様な、長い様で短かい様な、出る様で這入る様なといふ句を飽かず眺めた。始めのうちは今迄通り到底意味のある筈がないとしか見えなかつたが、段々繰り返して讀むうちに、辛抱強く考へさへすれば、斯ういふ妙な特性を有つたものが或は出て來るかも知れないといふ氣になつた。其上敬太郎は婆さんに、自分が持つてゐるんだから、いざといふ場合に忘れない様になさいと注意されたのを感じてゐたので、何でも好い、たゞ身の周圍の物から、自分の様で他人の様な、長い様で短かい様な、出る様で這入る様なものを探し中てさへすれば、比較的狭い範圍内で、此問題を解決する事が出來る譯になつて、存外早く片が附くかも知れないと思ひ出した。そこでわが自由になる是から先の二時間を、全く此謎を解く爲の二時間として、大切に利用しようといふ決心した。

1012
所が先づ眼の前の机、書物、手拭、座蒲團から順々に進行して行李鞆靴下迄行つたが、一向それらしい物に出合はないうちに、とう／＼一時間経つて仕舞つた。彼の頭は焦燥つと共に亂れて來た。彼の觀念は彼の室の中を駆け廻つて落ち附けないので、制するの聞かずに、戸外へ出て縦横に走つた。やがて彼の前に、霜降りの外套を着た黒の中折を被つた脊の高い瘦せぎすの紳士が、彼の是から探さうといふ其人の權威を具へて、あり／＼と現はれた。すると其顔が忽ち大連にゐる森本の顔になつた。彼はだらしのない髻を生やした森本の容貌を想像の眼で眺めた時、突然電流に感じた人の様にあつと云つた。

二十三

1013
森本の二字は疾うから敬太郎の耳に變な響を傳へる媒介となつてゐたが、此頃ではそれが一層高じて全然一種の符徴に變化して仕舞つた。元から此男の名前さへ出ると、必ず例の洋杖を聯想したものが、洋杖が二人を繋ぐ縁に立つてゐると解釋しても、或は二人の中を割く邪魔に挟まつてゐると見做しても、兎に角森本と此竹の棒の間にはある距離があつて、さう一足飛に片方から片方へ移る譯に行かなかつたのに、今では夫が一つになつて、森本と云へば洋杖、洋杖と云へば森本といふ位劇しく敬太郎の頭を刺激するのである。其刺激を受けた彼の頭に、自分の所有の

様な又森本の所有の様な、持主の何方とも片附かないといふ觀念が、熱つた血に流されながら偶然浮かび上がった時、彼はあゝ是だと叫んで、亂れ逃げる黒い影の内から、其洋杖杖をうんと捕まへたのである。

「自分の様な他人の様な」と云つた婆さんの謎は是で解けたものと信じて、敬太郎は一人嬉しがつた。けれども未だ「長い様な短かい様な、出る様な這入る様な」といふ所迄は考へて見ないので、彼はあまる二箇條の特性をも等しく此洋杖の中から探し出さうといふ料簡で、更に新たな努力を鼓舞して掛かつた。

始めは見方一つで長くもなり短かくもなる位の意味かも知れないと思つて、先へ進んで見たが、夫では餘り平凡過ぎて、解釋が附いたも附かないも同じ事の様な心持がした。其所で又後戻りをして、「長い様な短かい様な」といふ言葉を幾度か口の内で繰り返しながら思索した。が、容易に解決の出来る見込は立たなかつた。時計を見ると、自由に使つて可い二時間のうちで、もう三十分しか残つてゐない。彼は抜け裏と間違へて袋の口へ這入り込んだ結果、好んで行き惱みの状態に悶えてゐるのでは無からうかと、自分で自分の判断を危み出した。出端のない行き留りに立つ位なら、もう一遍引き返して、新しい途を探すが増したとも考へた。然し斯う時間が逼つてゐ

るのに、初手から出直しては、到底間に合ふ筈がない、既に此處迄來られたといふ一部分の成功を縁起にして、是非先へ突き抜ける方が順當だとも考へた。是が可からう彼が可からうと右左に思ひ亂れてゐる中に、彼の想像は不圖全體としての杖を離れて、握りに刻まれた蛇の頭に移つた。其瞬間に、鱗のざら／＼した細長い胴と、匙の先に似た短かい頭とを我知らず比較して、胴のない鎌首だから、長くなければならぬ筈なのに短かく切られてゐる、其所が即ち長い様な短かい様な物であると悟つた。彼は此答案を稻妻の如く頭の奥に閃めかして、得意の餘り踴躍した。あとに残つた「出る様な這入る様な」ものは、大した苦勞もなく約五分の間に解けた。彼は鶏卵とも蛙とも何とも名状し難い或物が、半ば蛇の口に隠れ、半ば蛇の口から現はれて、呑み盡くされもせず、逃れ切りもせず、出るとも這入るとも片の附かない状態を思ひ浮かべて、すぐ是だと判断したのである。

是で萬事が綺麗に解決されたものと考へた敬太郎は、躍り上がる様に机の前を離れて、時計の鎖を帯に絡んだ。帽子は手に持つた儘、袴も穿かずに室を出ようとしたが、あの洋杖を何うして持つて出たものだらうかといふ問題が一寸彼を躊躇させた。あれに手を觸れるのは無論、たとひ傘入れから引き出した處で、森本が置き去りにして行つてから既に久しい今日となつて見れば、

主人に断らないにしろ、咎められたり怪しまれたりする氣遣ひはないに極まつてゐるが、偕彼等が傍に居ない時、又居るにしても見ないうちに、夫を提げて出ようとするには相當の思慮か準備が必要になる。迷信のはびこる家庭に成長した敬太郎は、呪禁に使ふ品物を（是から其目的に使ふんだといふ料簡があつて）手に入れる時には、屹度人の見てゐない機會を偷んで遣らなければ利かないといふ言ひ傳へを、郷里に居た頃、よく母から聞かされてゐたのである。敬太郎は宿の上り口の正面に懸けてある時計を見る振をして、二階の梯子段の中途迄降りて下の様子を窺つた。

二十四

主人は六疊の居間に、例の通り大きな瀨戸物の丸火鉢を抱へ込んでゐた。細君の姿は何處にも見えなかつた。敬太郎が梯子段の途中で、及び腰をして、硝子越しに障子の中を覗いてゐると、主人の頭の上で忽然呼鈴が烈しく鳴り出した。主人は仰向いて番號を見ながら、おい誰かゐないかねと次の間へ聲を掛けた。敬太郎は又そろ／＼三階の自分の室へ歸つて來た。彼はわざ／＼戸棚を開けて、行李の上に投げ出してあるセルの袴を取り出した。彼は夫を穿くとき、腰板を後に引き摺つて、室の中を歩き廻つた。それから足袋を脱いで、靴下に更へた。是

丈身装を改めた上、彼は又三階を下りた。居間を覗くと細君の姿は依然として見えなかつた。下女も其所には居なかつた。呼鈴も今度は鳴らなかつた。家中ひっそり閑としてゐた。たゞ主人丈は前の通り大きな丸火鉢に靠れて、上り口の方を向いたなり凝と坐つてゐた。敬太郎は段々を下迄降り切らない先に、高い所から斜に主人の丸くなつた背中を見て、是はまだ都合が悪いと考へたが、つひに思ひ切つて上り口へ出た。主人は案の定「御出掛けで」と挨拶した。さうして例の通り下女を呼んで下駄箱に仕舞つてある履物を出させようとした。敬太郎は主人一人の眼を掠めるのにさへ苦心してゐた所だから、此上下女に出られては敵はないと思つて、いや宜しいと云ひながら、自分で下駄箱の垂れを上げて、早速靴を取り卸ろした。旨い具合に下女は彼が土間へ降り立つ迄出て來なかつた。けれども、亭主は依然として此方に向いてゐた。

「一寸御願ひですがね。室の机の上に今月の法學協會雜誌がある筈だが、一寸取つて來て呉れませんか。靴を穿いてしまつたんで、又上がるのが面倒だから」

敬太郎はこの主人に多少法律の心得があるのを知つて、わざと斯う頼んだのである。主人は自分より外のものでは到底辨じない用事なので、「はあ能うがす」と云つて氣作に立つて梯子段を上つて行つた。敬太郎は其ひまに例の洋杖を傘入れから抜き取つたなり、抱き込む様に羽織の下へ

入れて、主人の座に歸らないうちに竊と表へ出た。彼は洋杖の頭の曲がつた角を、右の腋の下に感じつゝ、急ぎ足に本郷の通迄来た。其所で一旦羽織の下から杖を出して蛇の首を凝と眺めた。さうして杖の手帛で上から下迄綺麗に埃を拭いた。夫からは普通の杖の様に右の手に持つて、力任せに振りくゞ歩いた。電車の上では、蛇の頭へ兩手を重ねて、其上に頭を載せた。さうして漸と今一段落附いた自分の努力を顧て、ほつと一息吐いた。同時に是から先指定された停留所へ行つてからの成否が又氣に掛かり出した。考へて見ると、是程骨を折つて、偷む様に持ち出した洋杖が、何うすれば眉と眉の間の黒子を見分ける必要品になるのか、全く彼の思量の外にあつた。彼はたゞ婆さんに云はれた通り、自分の様な他人の様な、長い様な短かい様な、出る様な這入る様なものを、一生懸命に探し當てて、それを忘れないで携へてゐるといふ迄であつた。此怪しげに見えて平凡な、しかも無暗に軽い竹の棒が、寐かさうと起かさうと、手に持たうと袖に隠さうと、未知の人を探す上に、果して何の役に立つか知らんと疑つた時、彼は一寸の間、瘧を振ひ落とした人の様にけろりとして、車内を見廻した。さうして頭の毛穴から湯氣の立つ程業を煮やし、た先刻の努力を氣恥づかしくも感じた。彼は自分で自分の所作を紛らす爲に、わざと洋杖を取り直して、電車の床をとん／＼と軽く叩いた。

やがて目的の場所へ来た時、彼は取り敢ず青年會館の手前から引き返して、小川町の通へ出たが、四時にはまだ十五分程間があるので、彼は人通りと電車の響を横切つて向う側へ渡つた。其所には交番があつた。彼は派出所の前に立つてゐる巡查と同じ態度で、赤いポストの傍から、真直に南へ走る大通と、緩い弧線を描いて左右に廻り込む廣い往來とを眺めた。是から自分の活躍すべき舞臺面を一應斯ういふ風に檢分した後で、彼はすぐ停留所の所在を確めに掛かつた。

二十五

赤い郵便函から五六間東へ下ると、白いペンキで小川町停留所と書いた鐵の柱がすぐ彼の眼に入つた。此所にさへ待つてゐれば、假令混雜に取り紛れて注意人物を見失ふ迄も、刻限に自分の部署に着いたといふ強味はあると考へた彼は、是丈の安心を胸に握つた上、又目標の鐵の柱を離れて、四邊の光景を見廻した。彼のすぐ後には藏造りの瀬戸物屋があつた。小さい盃の澤山並んだのを箱入りにして額の様仕立てたのがその軒下に懸かつてゐた。大きな鐵製の鳥籠に、陶器で出来た餌壺を幾個となく外から括り附けたのも、其所にぶら下がつてゐた。其隣は皮屋であつた。眼も爪も全く生きた時の儘に残した大きな虎の皮に、緋羅紗の縁を取つたのが此店の重な装

飾であつた。敬太郎は琥珀に似た其虎の眼を深く見詰めて立つた。細長くつて眞白な皮で出来た襟巻らしいものの先に、豆狸の様な顔が附着してゐるのも滑稽に見えた。彼は時計を出して時間を計りながら、又次の店に移つた。さうして瑪瑙で刻つた透明な兎だの、紫水晶で出来た角形の印材だの、翡翠の根懸だの孔雀石の緒締だの、金の指輪やリンクスと共に、美しく並んでゐる寶石商の硝子窓を覗いた。

敬太郎は斯うして店から店を順々に見ながら、つい天下堂の前を通り越して唐木細工の店先迄来た。其時後から来た電車が、突然自分の歩いてゐる往來の向う側で留まつたので、若しやといふ心から、筋違に通を横切つて細い横町の角にある唐物屋の傍へ近寄ると、其所にも一本の鐵の柱に、先刻のと同じ様な、小川町停留所といふ文字が白く書いてあつた。彼は念の爲此角に立つて、二三臺の電車を待ち合はせた。すると最初には青山といふのが来た。次には九段新宿といふのが来た。が、何れも萬世橋の方から眞直に進んで來るので彼は漸く安心した。是でよもやの懸念もなくなつたから、そろ／＼元の地位に歸らうといふ積りで、彼は足の向きを更へに掛かつた途端に、南から来た一臺がぐるりと美土代町の角を回轉して、又敬太郎の立つてゐる傍で留まつた。彼は其車の運轉手の頭の上に黒く掲げられた巢鴨の二字を讀んだ時、始めて自分の不注意に

氣が附いた。三田方面から丸の内を抜けて小川町で降りるには、神田橋の大通を眞直に突き當たつて、左へ曲がつても今敬太郎の立つてゐる停留所で降りられるし、又右へ曲がつても先刻彼の檢分して置いた瀬戸物屋の前で降りられるのである。さうして兩方とも同じ小川町停留所と白いペンキで書いてある以上は、自分が是から後を跟けようといふ黒い中折の男は、何方へ降りるのだから、彼には丸で見當が附かない事になるのである。眼を走らせて、二本の赤い鐵柱の距離を分量で測つて見ると、一町には足りない位だが、幾何眼と鼻の間だからと云つて、一方丈を専門にしてさへ覺束ない彼の監視力に對して、兩方共手落ちなく見張り終せる手際を要求するのは、何れ程自分の敏腕を高く見積もりたい今の敬太郎にも絶對の不可能であつた。彼は自分の住居つてゐる地理上の關係から、常に本郷三田間を連絡する電車に計り乗つてゐた爲、巢鴨方面から水道橋を通つて同じく三田に續く線路の存在に、今が今迄氣が附かずゐた自己の迂濶を深く後悔した。

彼は困却の餘り不圖思ひ附いた窮策として、須永の助力でも借りに行かうかと考へた。然し時計はもう四時七分前に逼つてゐた。つい此裏通に住んでゐる須永だけれども、門前迄駆け附ける時間と、かい摘んで用事を呑み込まず時間を勘定に入れれば到底間に合ひさうにない。よし其位

の間は取れるとした所で、須永に一方の見張りを頼む以上は、もし例の紳士が彼のゐる方へ降りるならば、何かの手段で敬太郎に合圖をしなければならぬ。それも此人込の中だから、手を擧げたり手帛を振る位では一寸通じかねる。紛れもなく敬太郎に分らせようとするには、往來を驚かす程な大きな聲で叫ぶに限ると云つても可い位なものだが、さう云ふ突飛は餘程な場合でも體裁を重んずる須永の様な男に出来る筈がない。萬一我慢して遣つて呉れた處で、此方から驅けて行く間には、肝心の黒の中折帽を被つた男の姿は見えなくなつて仕舞はないとも云へない。――斯う考へた敬太郎は己むを得ないから運を天に任せて何方か一方の停留所を待ち守らうと決心した。

二十六

決心は爲たやうなもの、夫では今立つてゐる所を動かさないための横着と同じ事になるので、わざと成效を度外に置いて仕事に掛かつた不安を感じずには居られなかつた。彼は首を延ばす様にして、又東の停留所を望んだ。位地の所爲か、向きの具合か、夫とも自分が始終乗降に慣れてゐる譯か、どうも其方の方が陽氣に見えた。尋ねる人も何だか向うで降りさうな心持がした。彼はもう一度見張りのステーションを移さうかと思ひながら、猶且決しかねて暫く躊躇してゐた。

すると其所へ江戸川行の電車が一臺來てずる／＼と留まつた。誰も降者が無いのを確めた車掌は、一分と立たないうちに又車を出さうとした。敬太郎は錦町へ抜ける細い横町を背にして、眼の前の車臺には殆ど氣の附かない程、此所にゐようか彼所へ行かうかと迷つてゐた。所へ後の横町から突然馳け出して來た一人の男が、敬太郎を突き除ける様にして、ハンドルへ手を掛けた運轉手の臺へ飛び上がった。敬太郎の驚きが未だ回復しないうちに、電車はがたりと云ふ音を出して既に動き始めた。飛び上がった男は硝子戸の内へ半分身體を入れながら失敬しましたと云つた。敬太郎は其男と顔を見合はせた時、彼の最後の視線が、自分の足の下に落ちたのを注意した。彼は敬太郎に當つた拍子に、敬太郎の持つてゐた洋杖を蹴飛ばして、それを持主の手から地面の上へ振り落とさしたのである。敬太郎は直ぐ曲んで洋杖を拾ひ上げようとした。彼は其時蛇の頭が偶然東向きに倒れてゐるのに氣が附いた。さうして其頭の恰好を何となしに、方角を教へる指標の様に感じた。

「矢つ張り東が好からう」

彼は早足に瀬戸物屋の前迄歸つて來た。其所で本郷三丁目と書いた電車から降りる客を、一人残らず物色する氣で立つた。彼は最初の二三臺を親の敵でも覘ふ様に怖い眼附で吟味した後、少

し心に餘裕が出来るに連れて、腹の中が段々氣丈になつて來た。彼は自分の眼の届く廣場を、一面の舞臺と見做して、其上に自分と同じ態度の男が三人ゐる事を發見した。其一人は派出所の巡查で、是は自分と同じ方を向いて同じ様に立つてゐた。もう一人は天下堂の前にゐるポイントマンであつた。最後の一人は廣場の真中に青と赤の旗を神聖な象徴の如く振り分ける分別盛りの中年者であつた。其内で何時出て來るか知れない用事を期待しながら、人目にはさも退屈さうに立つてゐるものは巡查と自分だらうと敬太郎は考へた。

電車は入れ代り立ち代り彼の前に留まつた。乗るものは無理にも窮屈な箱の中に押し込まうとする、降りるものは權柄づくで上から押し懸かつて來る。敬太郎は何處の何物とも知れない男女が聚まつたり散つたりする爲に、自分の前で無作法に演じ出す一分時の争ひを何度となく見た。けれども彼の目的とする黒の中折の男はいくら待つても出て來なかつた。ことに依ると、もう疾うに西の停留所から降りて仕舞つたものではなからうかと思ふと、斯うして役にも立たない人の顔ばかり見詰めて、眼のちらちらする程一つ所に立つてゐるのは、随分馬鹿氣た所作に見えて來る。敬太郎は下宿の机の前で熱に浮かされた人のやうに夢中で費やした先刻の二時間を、充分須永と打ち合せをして彼の援助を得るために利用した方が、遙かに常識に適つた遣り口だと考へ出た。

した。彼が此苦い氣分を痛切に嘗めさせられる頃から空は段々光を失つて、眼に映る物の色が一面に蒼く沈んで來た。陰鬱な冬の夕暮を補ふ瓦斯と電氣の光がぼつ／＼其所らの店硝子を彩どりはじめた。不圖氣が附いて見ると、敬太郎から一間許りの所に、廂髪に結つた一人の若い女が立つてゐた。電車の乗降が始まる度に、彼は注意の餘波を自分の左右に拂つてゐた積りなので、何時何方から歩き寄つたか分からない婦人を思はぬ近くに見た時は、何より先にまづ其存在に驚かされた。

二十七

女は年に合はして地味なコートを引き摺る様に長く着てゐた。敬太郎は若い人の肉を飾る華麗な色を其裏に想像した。女は又わざと夫を世間から押し包む様にして立つてゐた。襦袢の襟さへ羽二重の襟巻で隠してゐた。其羽二重の白いのが、夕暮の逼るに連れて、空氣から浮き出して來る外に、女は身の周圍に何と云つて他の注意を惹くものを着けて居なかつた。けれども時節柄に頓着なく、當人の好尚を示した此一色が、敬太郎には何よりも際立つて見えた。彼は光の抜けて行く寒い空の下で、不調和な異な物に出逢つた感じよりも、煤けた往來に牙を／＼しい一點を認

めた気分になつて女の頸の邊を注意した。女は敬太郎の視線を正面に受けた時、心持ち身體の向きを變へた。夫でも猶落ち附かない様子をして、右の手を耳の所迄上げて、鬢から洩れた毛を後へ掻き遣る風をした。固より女の髪は綺麗に揃つてゐたのだから、敬太郎には此舉動が實のない科としてのみ映つたのだが、其手を見た時彼は又新たな注意を女から強ひられた。

女は普通の日本の女性の様に絹の手袋を穿めてゐなかつた。さちりと合ふ山羊の革製ので、華奢な指をつましやかに包んでゐた。夫が色の着いた蠟を薄く手の甲に流したと見える程、肉と革がしつくり喰つ附いたなり、一筋の皺も一分の弛みも餘してゐなかつた。敬太郎は女の手を上げた時、此手袋が女の白い手頸を三寸も深く隠してゐるのに氣が附いた。彼は夫限り眼を轉じて又電車に向つた。けれども乗降の一混雜が済んで、思ふ人が出て來ないと、また心に二三分の餘裕が出来るので、それを利用してと待ち構へる程の執着はなかつたにせよ、電車の通り越した相間々々には覺られない位の視力を使つて常に女の方を注意してゐた。

始め彼は此女を「本郷行」か「龜澤町行」に乗るのだらうと考へてゐた。所が兩方の電車が一順廻つて來て、自分の前に留まつても、一向乗る様子がないので、彼は少々變に思つた。或は無理に込み合つてゐる車臺に乗つて、押し潰されさうな窮屈を我慢するよりも、少し時間の浪費を

怵へた方が差引き得になるといふ主義の人かとも考へて見たが、満員といふ札も懸けず、一つや二つの空席は充分ありさうなのが廻つて來ても、女は少しも乗る素振を見せないで、敬太郎は愈變に思つた。女は敬太郎から普通以上の注意を受けてゐると覺つたらしく、彼が少しでも手足の態度を改めると、雨の降らないうちに傘を廣げる人の様に、わざと彼の觀察を避ける準備をした。さうして故意に反對の方を見たり、或は向うへ二三歩あるき出したりした。夫がため、妙に遠慮深い所の出來た敬太郎は成るべく露骨に女の方を見るのを慎んでゐた。が仕舞に不圖氣が附いて、此女は不案内のため、自分の勝手に好い加減に極めた停留所の前に來て、乗れもしない電車を何時迄も待つてゐるのではなからうかと思つた。それなら親切に教へて遣るべきだといふ勇氣が急に起つたので、彼は逡巡する氣色もなく、眞正面に女の方を向いた。すると女はふいと歩き出して、二三間先の寶石商の窓際迄行つたなり、恰も敬太郎の存在を認めぬものの如くに、其所で額を窓硝子に着ける様に、中に竝べた指環だの、帶留だの枝珊瑚の置物だのを眺め始めた。敬太郎は見ず知らずの他人に入らざる好意立てをして、却て自分と自分の品位を落としたのを馬鹿らしく感じた。

女の容貌は始めから大したものではなかつた。眞向きに見ると夫程でもないが、横から眺めた

鼻附は誰の目にも少し低過ぎた。其代り色が白くて、晴々しい心持のする眸を有つてゐた。寶石商の電燈は今硝子越しに彼女の鼻と、豊くらした頬の一部分と額とを照らして、斜かけに立つてゐる敬太郎の眼に、光と陰とから成る一種妙な輪廓を與へた。彼は其輪廓と、長いコートに包まれた恰好の可い彼女の姿とを胸に收めて、又電車の方に向つた。

二十八

電車が又二三臺來た。さうして二三臺共又敬太郎の失望を繰り返さして東へ去つた。彼は成功を思ひ切つた人の如くに帯の下から時計を出して眺めた。五時はもう疾うに過ぎてゐた。彼は今更氣が附いた様に、頭の上に被さる黒い空を仰いで、苦々しく舌打ちをした。是程骨を折つて網を張つた中へ掛からない鳥は、西の停留所から平氣で逃げたんだと思ふと、他を騙す爲にわざわざ拵へた婆さんの豫言も、大事さうに持つて出た竹の洋杖も、其洋杖が與へて呉れた方角の暗示も、悉く忌々しさの種になつた。彼は暗い夜を欺いて眼先にちら／＼する電燈の光を見廻して、自分を其中心に見出だした時、此明るい輝きも必竟自分の見残した夢の影なんだらうと考へた。彼は其位興を覺ましながらまだ其位寐惚けた心持を失はずに立つてゐたが、やがて早く下宿へ歸

つて正氣の人間に爲らうといふ覺悟をした。洋杖は自分の馬鹿を嘲る記念だから、歸り掛けに人の見てゐない所で二つに折つて、蛇の頭も鐵の輪の突きかねも滅茶々に、萬世橋から御茶の水へ放り込んで遣らうと決心した。

彼は既に動かうとして一歩足を移しかけた時、又先刻の若い女の存在に氣が附いた。女は何時の間にか寶石商の窓を離れて、元の通り彼から一間許りの所に立つてゐた。脊が高いで、手足も人尋常より恰好よく伸びた所を、彼は快く始めから眺めたのだが、今度は殊に其右の手が彼の心を惹いた。女は自然の儘に夫をすらりと垂れたなり、丸で他の注意を豫期しないであつたのである。彼は素直に調子の揃つた五本の指と、しなやかな革で堅く括られた手頸と、手頸と袖口の間から微かに現はれる肉の色を夜の光で認めた。風の少ない晩であつたが、動かないで長く一所に立ち盡くすものに、寒さは辛く當つた。女は心持ち顔を襟卷の中に埋めて、俯目勝ちに凝としてゐた。敬太郎は自分の存在をわざと眼中に置かない様な此眼遣ひの底に、却て自分が氣に掛かつてゐるらしい反證を得たと信じた。彼が先刻から蚤取眼で、黒の中折帽を被つた紳士を探してゐる間、此女は彼と同じ鋭い注意を集めて、觀察の矢を絶えず此方に射懸けてゐたのではなからうか。彼は或男を探偵しつゝ、又或女に探偵されつゝ、一時間餘りを此所に過ごしたのではな

らうか。けれども何處の何物とも知れない男の、何をするか分らない行動を、何の爲に探るのだか、彼には何等の考へがなかつた如く、何處の何物とも知れない女から何を仕出かすか分らない人として何の爲に自分が覗かれるのだから、其所へ行くと矢張り丸で要領を得なかつた。敬太郎は此方で少し歩き出して見せたら向うの様子もつと鮮明に分るだらうといふ氣になつて、そろりそろりと派出所の後を西の方へ動いて行つた。勿論女に勘付かれない爲に、彼は振り向いて後を見る動作を固く憚つた。けれども何時迄も前計り見て先へ行つては、肝心の目的を達する機會がないので、彼は十間程來たと思ふ時分に、わざと見たくもない硝子窓を覗いて、其所に飾つてある天鵝絨の襟の着いた女の子のマントを眺める風をしながら、そつと後を振り向いた。すると女は自分の背後にゐる所ではなかつた。延び上がつても色々な人が自分を追ひ越す様に後から後から來る陰になつて、白い襟巻も長いコートも更に彼の眼に入らなかつた。彼は其儘前へ進む勇氣があるかを自分で自分に疑つた。黒い中折の帽子を被つた人の事なら、定刻の五時を過ぎた今だから、斷念しても夫程の遺憾はないが、女の方は何んなつまらない結果に終らうとも、最う少し觀察してゐたかつた。彼は女から自分が探偵されてゐると云ふ疑念を逆に投げ返して、此方から女の行動を今しばらく注意して見ようといふ物數奇を起した。彼は落し物を拾ひに歸る人の急ぎ足で、又元の派出所近く來た。その暗い陰に身を寄せる様にして窺ふと、女は依然として凝と通の方を向いて立つてゐた。敬太郎の戻つた事には丸で氣が附いてゐない風に見えた。

二十九

其時敬太郎の頭に、此女は處女だらうか細君だらうかといふ疑ひが起つた。女は現代多數の日本婦人にあまねく行はれる廂髪に結つてゐるので、其邊の區別は始めから不分明だつたのである。が、愈物陰に來て、半ば後になつた其姿を眺めた時は、第一番に何方の階級に屬する人だらうといふ問題が、新たに彼を襲つて來た。見懸けからいふと或は人に嫁いだ經驗がありさうにも思はれる。然し身體の發育が尋常より遙かに好いから事によれば年は存外取つて居ないのかも知れない。夫なら何故あんな地味な服装をしてゐるのだらう。敬太郎は婦人の着る着物の色や縞柄に就いて、何をいふ權利も有たない男だが、若い女なら此陰鬱な師走の空氣を跳ね返す様に、派手な色を肉の上に重ねるものだ位の漠とした觀察はあつたのである。彼は此女が若々しい自分の血に高い熱を與へる刺激性の文を何處にも見せて居ないのを不思議に思つた。女の身に着けたものの内で、纔かに人の注意を惹くのは頸

の周囲を包む羽二重の襟巻丈であるが、夫はたゞ清いと云ふ感じを起す寒い色に過ぎなかつた。あとは冬枯の空と似合つた長いコートですぼりと隠してゐた。

敬太郎は年に合はして餘りに媚びる氣分を失ひ過ぎた此衣服を再び後から見て、何うしても既に男を知つた結果だと判じた。其上此女の態度には何處か大人びた落附きがあつた。彼は其落附きを品性と教育からのみ來た所得とは見做し得なかつた。家庭以外の空氣に觸れたため、初々しい羞恥が、手帛に振り懸けた香水の香の様に自然と抜けて仕舞つたのではなからうかと疑つた。それ計りではない、此女の落附きの中には、落ち附かない筋肉の作用が、身體全體の運動となつたり、眉や口の運動となつて、ちよいと出て來るのを彼は先刻目撃した。最も鋭敏に動くものは其眼であらうと彼は疾くに認めてゐた。けれども其鋭敏に動かうとする眼を、強ひて動かすまいと力める女の態度も亦同時に認めない譯に行かなかつた。だから此女の落附きは、自分で自分の神經を殺してゐるといふ自覺に伴なつたものだと思はれて居た。

所が今後から見た女は身體といひ氣分といひ比較的沈靜して兩方の間に旨く調子が取れてゐる様に思はれた。彼女は先刻と違つて、別段姿勢を改めるでもなく、そろ／＼歩き出すでもなく、寶石商の窓へ寄り添ふでもなく、寒さを凌ぎかねる風情もなく、殆ど閑雅とでも形容したい様子

をして、一段高くなつた人道の端に立つてゐた。傍には次の電車を待ち合はせる人が二三散らばつてゐた。彼等は皆向うから來る車臺を見詰めて、早く自分の傍へ招き寄せたい風に見えた。敬太郎が立ち退いたので大いに安心したらしい彼女は、其中最も熱心に何かを待ち受ける一人となつて、筋向うの曲り角を凝と注意し始めた。敬太郎は派出所の陰を上へ廻つて車道へ降りた。さうしてペンキ塗の交番を楯に、巡查の立つてゐる横から女の顔を覗く様に見た。さうして其表情の變化に又驚かされた。今迄後姿を眺めて物陰にゐた時は、彼女を包む一色の目立たないコートと、其脊の高さと、大きな廂髪とを材料に、想像の國で寧ろ自由過ぎる結論を弄んだのだが、斯うして彼女の知らない間に、其顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新しい人に始めて出逢つた様な氣がしない譯に行かなかつた。要するに女は先刻より大變若く見えただのである。切に何物かを待ち受けてゐる其眼も其口も、たゞ生々した一種華やかな氣色に充ちて、夫より外の表情は毫も見當たらなかつた。敬太郎は其中に處女の無邪氣ささへ認めた。

やがて女の見詰めてゐる方角から一臺の電車が弓なりに曲がつた線路を、ぐるりと緩く廻轉して來た。それが女の居る前で滑る様に留まつた時、中から二人の男が出た。一人は紙で包んだボール箱の様なものを提げて、すた／＼巡查の前を通り越して人道へ飛び上がったが、一人は降り

ると直に女の前に行つて、其所に立ち留まつた。

三十

敬太郎は女の笑ひ顔を此時始めて見た。唇の薄い割に口の大きいのを其特徴の一つとして彼は最初から眺めてゐたが、美しい齒を露き出しに現はして、潤澤の饒かな黒い大きな眼を、上下の睫の觸れ合ふ程、共に寄せた時は、此女から夢にも豫期しなかつた印象が新たに彼の頭に刻まれた。敬太郎は女の笑ひ顔に見惚れると云ふよりも寧ろ驚いて相手の男に視線を移した。すると其の頭の上に黒い中折が乗つてゐるのに氣が附いた。外套は判切霜降りとは見分けられなかつたが、帽子と同じ暗い光を敬太郎の眸に投げた。其上脊は高かつた。瘦せぎすでもあつた。たゞ年齢の點に至ると、敬太郎には兎角の判断を下しかねた。けれども其人が壽命の度盛の上に於て、自分とは遙か隔たつた向うに居る事丈は慥かなので、彼は此男を躊躇なく四十恰好と認めた。是丈の特點を前後なく殆ど同時に胸に入れ得た時、彼は自分が先刻から馬鹿を盡くして附け覗つた本人がやつと今電車を降りたのだと断定しない譯に行かなかつた。彼は例刻の五時が疾うの昔に過ぎたのに、妙な酔興を起して、矢張り同じ所にぶら附いて居た自分を仕合せだと思つた。其酔

興を起させるため、自分の好奇心を釣りに若い女が偶然出て来て呉れたのを有難く思つた。更に其若い女が自分の探す人を、自分よりも倍以上の自信と忍耐を以て、待ち終せたのを幸運の一つに數へた。彼は此 X といふ男に就いて、田口のために、ある知識を供給する事が出来ると共に、同じ知識が Y といふ女に關する自分の好奇心を幾分か満足させ得るだらうと信じたからである。男と女は丸で敬太郎の存在に氣が附かなかつたと見えて、前後左右に遠慮する氣色もなく、猶立ちながら話してゐた。女は始終微笑を洩らす事を已めなかつた。男も時々聲を出して笑つた。二人が始めて顔を合はした時の挨拶の様子から見ても彼等は決して疎遠な間柄ではなかつた。異性を繋ぎ合はせる様で、其實兩方の仲を堰く、慇懃な男女間の禮義は彼等の何方にも見出だす事が出来なかつた。男は帽子の縁に手を掛ける面倒さへ敢てしなかつた。敬太郎は其鏢の下にあるべき筈の大きな黒子を面と向つて是非突き留めたかつた。もし女が居なかつたならば肉の上に取残された此異様な一點を確める爲に、彼はつか／＼と男の前へ進んで行つて、何でも好いから只口から出任せの質問を掛けたかも知れない。夫でなくても、直ちに彼の傍へ近寄つて、満足の行く迄其顔を覗き込んだらう。此際さう云ふ大膽な行動を妨げるものは、男の前に立つてゐる例の女であつた。女が敬太郎の態度を悪く疑つたか何うかは問題として、彼の舉動に不審を抱いた

様子は、同じ場所に長く立ち竝んだ彼の目に親しく映じた所である。それを承知しながら、再び其視線の内に、自分の顔を無遠慮に突き出すのは、多少紳士的でない上に、嫌疑の火の手をわざと強くして、自分の目的を自分で打ち毀すと同じ結果になる。

斯う考へた敬太郎は、自然の順序として相應の機会が廻つて来る迄は、黒子の有る無しを見届ける丈は差し控へた方が得策だらうと判断した。其代り見え隠れに二人の後を跟けて、出来得るならば断片的でも可いから、彼等の談話を小耳に挟まうと覺悟した。彼は先方の許諾を待たないで、彼等の言動を、ひそかに我胸に疊み込む事の徳義的價値に就いて、別に良心の相談を受ける必要を認めなかつた。さうして自分の骨折から出る結果は、世故に通じた田口によつて、必ず善意に利用されるものと只淡泊に信じてゐた。

やがて男は女を誘ふ風をした。女は笑ひながら夫を拒む様に見えた。仕舞に半ば向き合つてゐた二人が、肩と肩を揃へて瀬戸物屋の軒端近く歩き寄つた。其所から手を組み合はせない許りに竝んで東の方へ歩き出した。敬太郎は二三間早足に進んで、すぐ彼等の背後迄來た。さうして自分の歩調を彼等と同じ速度に改めた。萬一女に振り向かれても、疑惑を免れる爲に、彼は決して彼等の後姿には眼を注がなかつた。偶然前後して天下の往來を同じ方角に行くものの如くに、故

意とあらぬ方を見て歩いた。

三十一

「だつて餘りだわ。斯んなに人を待たして置いて」

敬太郎の耳に入つた第一の言葉は、女の口から出た斯ういふ意味の句であつたが、是に對する男の答は全く聞き取れなかつた。夫から五六間行つたと思ふ頃、二人の足が急に今迄の歩調を失つて、竝んだ影法師が殆ど敬太郎の前に立ち塞がりさうにした。敬太郎の方でも、後から向うに突き當たらないう限りは先へ通り抜けなければ跋が悪くなつた。彼は二人の後戻りを恐れて、急に傍にあつた菓子屋の店先へ寄り添ふやうに自分を片附けた。さうして其所に竝んで居る大きな硝子壺の中のビスケットを見詰める風をしながら、二人の動くのを待つた。男は外套の中へ手を入れる様に見えたが、夫が濟むと少し身體を横にして、下向きに右手で持つたものを店の灯に映した。男の顔の下に光るものが金時計である事が、其時敬太郎に分つた。

「まだ六時だよ。そんなに遅かあない」
「遅いわ貴方、六時なら。妾もう少しで歸る所よ」

「何うも御氣の毒さま」

二人は又歩き出した。敬太郎も壺入りのビスケツトを見棄てて其後に従つた。二人は淡路町迄来て其所から駿河臺下へ抜ける細い横町を曲がつた。敬太郎も續いて曲がらうとすると、二人は其角にある西洋料理屋へ入つた。其時彼は其門口から射す強い光を浴びた男と女の顔を横から一眼見た。彼等が停留所を離れる時、二人連れ立つて何處へ行くだらうか、敬太郎には丸で想像も附かなかつたのだが、突然斯んな家へ入られて見ると、何でもない所丈に、却て案外の感に打たれざるを得なかつた。それは寶亭と云つて、敬太郎の元から知つてゐる料理屋で、古くから大學へ出入りをする家であつた。近頃普請をしてから新しいペンキの色を半分電車通に曝して、斜懸けに立ち切られた様な棟を南向きに見せてゐるのを、彼は通り掛りに時々注意した事がある。彼は其薄青いペンキの光る内側で、額に仕立てたミュンヘン麥酒の廣告寫眞を仰ぎながら、肉刀と肉叉を凄しく鬨はした數度の記憶さへ有つてゐた。

二人の行く先に就いては、是といふ明らかな希望も豫期も無かつたが、少しは紫が、つた空氣の匂ふ迷路の中に引き入れられるかも知れない位の感じが暗に働いて是迄後を跟けて來た敬太郎には、馬鈴薯や牛肉を揚げる油の臭ひが、臺所からぶん／＼往來へ溢れる西洋料理屋は餘りに平

凡らしく見えた。けれども自分の到底近寄れない幽玄な所へ姿を隠して、夫限り出て來ないよりは、遙かに都合が好いと考へ直した彼は、二人の身體が、誰にでも近寄る事の出来る、普通の洋食店のペンキの奥に圍はれてゐるのを寧ろ心丈夫だと覺つた。幸ひ彼は此位な程度の家で、冬空の外氣に刺激された食欲を充たすに足る程の財布を懐中してゐた。彼はすぐ二人の後を追つて其所の二階へ上らうとしたが、電燈の強く往來へ射す門口迄來た時、不圖氣が附いた。既に女から顔を覺えられた以上、殆ど同時に一つ二階へ押し上がつては不味い。ひよつとすると此人は自分を跟けて來たのだといふ疑惑を故意先方に與へる譯になる。

敬太郎は何氣ない振をして、往來へ射す光を横切つた儘、黒い小路を一丁許り先へ歩いた。さうして其小路の盡さる坂下から又黒い人となつて、自分の影法師を自分の身體の中へ疊み込んだ様にひつそりと明るい門口迄歸つて來た。それから其門を潜つた。時々來た事があるので、彼は此家の勝手を略承知してゐた。下には客を通す部屋がなくつて、二階と三階丈で用を辨じてゐるが、餘程込み合はなければ三階へは案内しない、大抵は二階で済むのだから、上がつて右の奥か、左の横にある廣間を覗けば、大抵二人の席が見えるに違ひない、もし其處に居なかつたら表の方の細長い室迄開けてやらう位の考へで、階段を上がり掛けると、白服の給仕が彼を案内すべく上

り口に立つてゐるのに気が附いた。

三十二

敬太郎は手に持った洋杖を其儘に段々を上り切つたので、給仕は彼の席を定める前に、まづ其洋杖を受取つた。同時に此方へと云ひながら背中を向けて、右手の廣間へ彼を案内した。彼は給仕の後から自分の洋杖が何處に落ち附くかを一目見届けた。すると其所に先刻注意した黒の中折帽が掛かつてゐた。霜降りらしい外套も、女の着て居た色合のコートも釣るしてあつた。給仕が其裾を動かして、竹の洋杖を突込んだ時、大きな模様を抜いた羽二重の裏が敬太郎の眼にちらついた。彼は蛇の頭がコートの裏に隠れるのを待つて、更に其持主の方に眼を轉じた。幸ひに女は男と向き合つて、入口の方に背中計りを見せてゐた。新しい客の來た物音に、振り返りたい氣があつても、ぐるりと廻るのが、一旦席に落ち附いた品位を崩す恐れがあるので、必要のない限り、普通の婦人はさういふ動作を避けたがるだらうと考へた敬太郎は、女の後姿を眺めながら、一先づ安堵の思ひをした。女は彼の推察通り果して後を向かなかつた。彼は其間に女の坐つてゐるすぐ傍迄行つて背中合せに第二列の食卓に就かうとした。其時男は顔を上げて、まだ腰も掛けず向

きも改めない敬太郎を見た。彼の食卓の上には支那めいた鉢に植ゑた松と梅の盆栽が飾り附けてあつた。彼の前にはスーアの皿があつた。彼は其中に大きな匙を落としたなり敬太郎と顔を見合はせたのである。二人の間に横たはる六尺に足らない距離は明らかに電燈が隈なく照らしてゐた。卓上に掛けた白い布が又此明るさを助けるやうに、潔い光を四方の食卓から反射してゐた。敬太郎は斯ういふ都合のいゝ條件の具備した室で、男の顔を満足する迄見た。さうして其顔の眉と眉の間に、田口から通知のあつた通り、大きな黒子を認めた。

此黒子を別にして、男の容貌に是と云つた特異な點はなかつた。眼も鼻も口も全く人並であつた。けれども離れに見ると凡庸な道具が揃つて、面長な顔の表に夫々の位地を占めた時、彼は尋常以上に品格のある紳士としか誰の目にも映らなかつた。敬太郎と顔を合はせた時、その中に匙を入れた儘、啜る手を少時已めた態度などは、何處かに寧ろ氣高い風を帯びてゐた。敬太郎はそれなり背中を彼の方に向けて自分の席に着いたが、探偵といふ文字に普通附着してゐる意味を心のうちで考へ出して、此男の風采態度と探偵とは到底釣り合はない性質のものだといふ氣がした。敬太郎から見ると、此人は探偵して然るべき何物をも彼の人相の上に有つて居なかつたのである。彼の顔の表に竝んでゐる眼鼻口の何れを取つても、其奥に祕密を隠さうとするには、

餘りに出來が尋常過ぎたのである。彼は自分の席へ着いた時、田口から引き受けた此宵の仕事に對する自分の興味が、既に三分の一ばかり蒸發した様な失望を感じた。第一斯んな性質の仕事を田口から引き受けた徳義上の可否さへ疑はしくなつた。

彼は自分の注文を通したなり、ポカンとして麵麩に手も觸れずに居た。男と女は彼等の傍に坐つた新しい客に幾分か遠慮の氣味で、一寸の間話しを途切らした。けれども敬太郎の前に暖められた白い皿が現はれる頃から、又少し調子づいたと見えて、二人の聲が互違ひに敬太郎の耳に入つた。

「今夜は不可ないよ。少し用があるから」

「何んな用？」

「何んな用つて、大事な用さ。中々さう安くは話せない用だ」

「あら好くつてよ。妾ちやんと知つてゐるわ。——散ざつばら他を待たした癖に」

女は少し拗ねたやうな物の云ひ方をした。男は四邊に遠慮する風で、低く笑つた。二人の會話は夫限り靜かになつた。やがて思ひ出した様に男の聲がした。

「何しろ今夜は少し遅いから止さうよ」

「些とも遅かないわ。電車に乗つて行きやあ直さぢやありませんか」

女が勧めてゐる事も男が躊躇してゐる事も敬太郎には能く解つた。けれども彼等が何處へ行く積りなのだか、その肝心な目的地になると、彼には何等の觀念もなかつた。

三十三

もう少し聞いてゐる内には或は中りが附くかも知れないと思つて、敬太郎は自分の前に残された皿の上の肉刀と、其傍に轉がつた赤い人參の一切を眺めてゐた。女は猶男を強ひる事を已めない様子であつた。男は其度に何とか蚊とか云つて逃れてゐた。然し相手を怒らせまいとする優しい態度は何時も變らなかつた。敬太郎の前に新しい肉と青豌豆が運ばれる時分には、女もとうとう我を折り始めた。敬太郎は心の内で、女が何處迄も剛情を張るか、でなければ男が好い加減に降參するか、何方かになれば可いがと、ひそかに祈つてゐたのだから、思つた程女の強くないのを發見した時は少なからず残念な氣がした。責めて二人の間に名を出す必要のないものとして略されつゝあつた目的地でも、何かの機會に小耳に挟んで置きたかつたが、愈話しが纏まらな

「ぢや行かなくつても可いから、あれを頂戴」と、やがて女が云ひ出した。

「あれつて。只あれぢや分らない」

「ほら彼よ。此間の。ね、分つたでせう」

「ちつとも分らない」

「失敬ね、貴方は。ちやんと分つてる癖に」

敬太郎は一寸振り向いて後が見たくなつた。其時階段を踏む大きな音が聞こえて、三人許りの客がどや／＼と一度に上がつて来た。其内の一人はカーキ色の服に長靴を穿いた軍人であつた。さうして床の上を歩く音と共に、腰に釣るした劔をがちや／＼鳴らした。三人は上がつて左側の室へ案内された。此物音が例の男と女の會話を攪き亂した爲、敬太郎の好奇心もちらつく劔の光が落ち附く迄中途に停止してゐた。

「此間見せて頂いたものよ。分つて」

男は分つたとも分らないとも云はなかつた。敬太郎には無論想像さへ附かなかつた。彼は女が何故淡泊に自分の欲しいといふものの名を判切云つて呉れないかを恨んだ。彼は何とはなしに夫が知りたかつたのである。すると、

「あんなもの今茲に持つてるもんかね」と男が云つた。

「誰も茲に持つてるつて云やしないわ。たゞ頂戴つて云ふのよ。今度で可いから」

「そんなに欲しけりや遣つても可い。が……」

「あつ嬉し」

敬太郎は又振り返つて女の顔が見たくなつた。男の顔も序に見て置きたかつた。けれども女と一直線になつて、背中合せに坐つてゐる自分の位置を考へると、此際そんな盲動は慎まなければならぬので、眼の遣り所に困るといふ風で、たゞ正面をぼかんと見廻した。すると勝手の上り口の方から、給仕が白い皿を二つ持つて入つて来て、夫を古いのと引き更へに、二人の前へ置いて行つた。

「小鳥だよ。食べないか」と男が云つた。

「妾もう澤山」

女は焼いた小鳥に手を觸れない様子であつた。其代り暇の出来た口を男よりは餘計動かした。二人の問答から察すると、女の男に呉れと逼つたのは珊瑚樹の珠か何からしい。男は斯ういふ事に精通してゐるといふ口調で、色々な説明を女に與へてゐた。が、夫は敬太郎には興味もなけれ

ば、解りもしない好事家の嬉しがる知識に過ぎなかつた。練物で作つたのへ指先の紋を押し附けたりして、時々旨く胡魔化した贖物があるが、夫は手障りが何處かざら／＼するから、本當の古渡りとは直ぐ區別ができる杯と丁寧に女に教へてゐた。敬太郎は前後を綜合して、何でも餘程貴い、又大變珍らしい、今時さう容易くは手に入らない時代の附いた珠を、女が男から貰ふ約束をしたといふ事が解つた。

「遣るには遣るが、御前あんなものを貰つて何にする氣だい」

「貴方こそ何になさるの。あんな物を持つてて、男の癖に」

三十四

しばらくして男は「御前御菓子を食べるかい、菓物にするかい」と女に聞いた。女は「何方でも好いわ」と答へた。彼等の食事が漸く終りに近附いた合圖とも見られる此簡單な問答が、今迄うつかりと二人の話しに釣り込まれてゐた敬太郎に、忽ち自分の義務を注意する様に響いた。彼は此料理屋を出た後の二人の行動をも觀察する必要があるものとして、自分で自分の役割を作つてゐたのである。彼は二人と同時に二階を下りる事の不得策を初めから承知してゐた。後れて席

を立つにしても、巻煙草を一本吸はない先に、夜と人と、雑沓と暗闇の中に、彼等の姿を見失ふのは慥かであつた。もし間違ひなく彼等の影を踏んで後から喰つ附いて行かうとするなら、何うしても一足先へ出て、相手に氣の附かない物陰か何かで、待ち合はせるより外に仕方がないと考へた。敬太郎は早く勘定を済まして置くに若くはないといふ氣になつて、早速給仕を呼んでビールを請求した。

男と女はまた落ち附いて話してゐた。然し二人の間に何といふ極まつた題目も起らないので、夫を種に意見や感情の交換も始まる機會はなく、只だらしのない雲の様に夫から夫へと流れて行く丈に過ぎなかつた。男の特徴に數へられた眉と眉の間の黒子杯も偶然女の口に上つた。

「何故そんな所に黒子なんぞが出来たんでせう」

「何も近頃になつて急に出来やしまいし、生れた時からあるんだ」

「だけどさ。見つともななくなつて、其んな所にあつて」

「幾何見つともなくなつても仕方がないよ。生れ付きだから」

「早く大學へ行つて取つて貰ふと可いわ」

敬太郎は此時指洗碗の水に自分の顔の映る程下を向いて、両手で自分の米嚙を隠す様に抑へ

ながら、くすくすと笑つた。所へ給仕が釣銭を盆に乗せて持つて來た。敬太郎はそつと立つて目立たない様に階段の上り口迄大人しく足を運ぶと、其所に立つてゐた給仕が大きな聲で「御立ち」と下へ知らせた。同時に敬太郎は先刻給仕に預けた洋杖を取つて來るのを忘れた事に氣が附いた。其洋杖はいまだに室の隅に置いてある帽子掛けの下に突き込まれた儘、女の長いコートの下に隠されてゐた。敬太郎は室の中にある男女を憚る様に、抜き足で後戻りをして、靜かにそれを取り出した。彼が蛇の頭を握つた時、すべくした羽二重の裏と、柔らかい外套の裏が、優しく手の甲に觸れるのを彼は感じた。彼は又爪先で歩かない許りに氣を附けて階段の上迄來ると、其所から急に調子を變へて、とん、とん、とんと刻み足に下へ驅け下りた。表へ出るや否や電車通を直ぐ向うへ横切つた。其突當りに、大きな古着屋のやうな洋服屋のやうな店があるので、彼は其店の電燈の光を後にして立つた。斯うしてさへゐれば料理屋から出る二人が大通を右へ曲がらうが、左へ折れようが、又は中川の角に添つて連雀町の方へ抜けようが、或は門からすぐ小路傳ひに駿河臺下へ向はうが、何方へ行かうと見逃す氣遣ひはないと彼は心丈夫に洋杖を突いて、目指す家の門口を見守つてゐた。

彼は約十分許り待つた後で、注意の燒點になる光の中に、一向人影が射さないのを不審に思ひ始めた。己むを得ず二階を眺めてその窓丈明るくなつた奥を覗く様に、彼等の早く席を立つ事を祈つた。さうして待ち草臥れた眼を移す毎に、屋根の上に廣がる黒い空を仰いだ。今迄地面の上を照らしてゐる人間の光ばかりに欺かれて、丸で其存在を忘れてゐた此大きな夜は、黒い頭の上で、先刻から寒さうな雨を醸してゐたらしく、敬太郎の心を侘びしがらせた。不圖考へると、今迄は自分に遠慮して只の話をしてゐた二人が、自分の立つたのを幸ひに、自分の役目として是非聞いて置かなければならない様な肝心の相談でもし始めたのではなからうか。彼は此疑惑と共に黒い空を仰ぎながら、其内に二人の向き合つた姿をありくと認めた。

三十五

彼はあまり注意深く立ち廻つて、却て洋食店の門を早く出過ぎたのを悔んだ。けれども二人が彼に氣兼ねをする以上は、たとひ同じ席に何時迄も根が生えた様に腰を据ゑてゐた所で、矢つ張り普通の世間話より外に聞く譯には行かないのだから、よし今迄坐つた儘動かないものと假定しても、其結果は早く席を立つたと略同じ事になるのだと思ふと、彼は寒いのを我慢しても、同じ所に見張つてゐるより仕方なかつた。すると帽子の廂へ雨が二雫程落ちた様な氣がするので、彼

は又仰向いて黒い空を眺めた。闇より外に何も眼を遮らない頭の上は、彼の立つてゐる電車通と違つて非常に静かであつた。彼が頬の上に一滴の雨を待ち受ける積りで、久しく顔を上げたなり、恰好さへ分らない大きな暗いものを見詰めてゐる間に、今にも降り出すだらうといふ懸念を何處かへ失つて、こんな落ち附いた空の下にゐる自分が、何故こんな落ち附かない真似を好んで遣るのだらうと偶然考へた。同時に凡ての責任が自分の今突いてゐる竹の洋杖にあるやうな気がした。彼は例の如く蛇の頭を握つて、寒さに對する鬱憤を晴らす如くに、二三度それを烈しく振つた。其時待ち侘びた人の影法師が揃つて洋食店の門口を出た。敬太郎は何より先に女の細長い頸を包む白い襟巻に眼を附けた。二人はすぐと大通へ出て、敬太郎の向う側を、先刻とは反對の方角に、元來た道へ引き返しに掛かつた。敬太郎も猶豫なく向うへ渡つた。彼等は緩い歩調で、賑やかに飾つた店先を軒毎に覗く様に足を運ばした。後から跟いて行く敬太郎は是非共二人に釣り合つた歩き方をしなければならぬので、其遅過ぎるのが大分苦になつた。男は香の高い葉巻を銜へて、行く／＼夜の中へ微かな色を立てる烟を吐いた。それが風の具合で後から従ふ敬太郎の鼻を時々快く侵した。彼は其香ひを嗅ぎ／＼鈍い足並を我慢して實直に其跡を踏んだ。男は脊が高いので後から見ると、一寸西洋人の様に思はれた。夫には彼の吹かしてゐる強い葉巻が多少錯覺を助

けた。すると聯想が忽ち伴侶の方に移つて、女が旦那から買つて貰つた革の手袋を穿めてゐる洋妾の様に思はれた。敬太郎が不圖斯ういふ空想を起して、可笑しいと思ひながらも、なほ一人で興を催してゐると、二人は最前待ち合はした停留所の前まで来て一寸立ち留まつたが、やがてまた線路を横切つて向う側へ越した。敬太郎も二人のする通りを真似た。すると二人はまた美士代町の角を此方から反對の側へ渡つた。敬太郎もつゞいて同じ側へ渡つた。二人はまた歩き出して南へ動いた。角から半町許り來ると、其所にも赤く塗つた鐵の柱が一本立つてゐた。二人は其柱の傍へ寄つて立つた。彼等は又三田線を利用して南へ、歸るか、行くか、する人だと此時始めて気が附いた敬太郎は、自分も是非同じ電車へ乗らなければならぬまいと覺悟した。彼等は申し合はせた様に敬太郎の方を顧た。固より彼のゐる方から電車が横町を曲がつて來るからではあるが、夫にしても敬太郎は餘り好い心持はしなかつた。彼は帽子の鍔を引つ繰り返して、ぐつと下へ卸ろして見たり、手で顔を撫でて見たり、成るべく軒下へ身を寄せて見たり、わざと變な見當を眺めて見たりして、電車の現はれるのをつらく待ち侘びた。

間もなく一臺來た。敬太郎はわざと二人の乗つた後から這入つて、嫌疑を避けようと工夫した。夫でしばらく後の方に愚圖々々してゐると、女は例の長いコートの裾を踏まへない許りに引き摺

つて車掌臺の上に足を移した。然しあとから直ぐ續くと思つた男は、案外上がる氣色もなく、足を揃へた儘、兩手を外套の隠袋に突き差し立ってゐた。敬太郎は女を見送りに男がわざ／＼此所迄足を運んだのだといふ事に漸く氣が附いた。實をいふと、彼は男よりも女の方に餘計興味を持つてゐたのである。男と女が此所で分かるとすれば、無論男を捨てて女の先途丈を見届けたかつた。けれども自分が田口から依頼されたのは女と關係のない黒い中折帽を被つた男の行動丈なので、彼は我慢して車臺に飛び上がるのを差し控へた。

三十六

女は車臺に乗つた時、一寸男に目禮したが、夫限り中へ這入つて仕舞つた。冬の夜の事だから、窓硝子は悉く締め切つてあつた。女はことさらにそれを開けて内から首を出す程の愛嬌も見せなかつた。夫でも男はのっそり立つて、車の動くのを待つてゐた。車は動き出した。二人の間に挨拶の交換がもう必要でないと認められた如く、電力は急いで光る窓を南の方へ運び去つた。男は此時口に銜へた葉巻を土の上に投げた。夫から足の向きを變へて又三つ角の交叉點迄出ると、今度は左へ折れて唐物屋の前で留まつた。其所は敬太郎が人に突き當たられて、竹の洋杖を取り落とし

た記憶の新しい停留所であつた。彼は男の後を見え隠れに此所迄跟いて来て、又見たくもない唐物屋の店先に飾つてある新柄の襟飾だの、絹帽だの、變り縞の膝掛だのを覗き込みながら、斯う遠慮をする様では、探偵の興も覺める丈だと考へた。女が既に離れた以上、自分の仕事に飽きが來たと云つては濟まないが、前同様であるべき窮屈の程度が急に著しく感ぜられてならなかつた。彼の依頼されたのは中折の男が小川町で降りてから二時間内の行動に限られてゐるのだから、もう是で偵察の役目は濟んだものとして、下宿へ歸つて寐ようかと思つた。

其所へ男の待つてゐる電車が來たと見えて、彼は長い手で鐵の棒を握るや否や瘠せた身體を體よく留まり切らない車臺の上に乗せた。今迄躊躇してゐた敬太郎は急に此瞬間を失つてはといふ氣が出たので、すぐ同じ車臺に飛び上がった。車内は其程込みあつて居なかつたので、乗客は自由互の顔を見合ふ餘裕を充分持つてゐた。敬太郎は箱の中に身體を入れると同時に、既に席を占めた五六人から一度に視線を集められた。其うちには今坐つた許りの中折の男の交つてゐたが、彼の敬太郎を見た眼のうちには、おやといふ認識はあつたが、附け靨はれてゐるなといふ疑惑は更に現はれてゐなかつた。敬太郎は漸く伸び／＼した心持になつて、男と同じ側を擇つて腰を掛けた。此電車で何處へ連れて行かれる事かと思つて軒先を見ると、江戸川行と黒く書いてあ

つた。彼は男が乗り換へさへすれば、自分も早速降りる積りで、停留所へ来る毎に男の様子を窺つた。男は始終隠袋へ手を突き込んだ儘、多くは自分の正面かわが膝の上かを見てゐた。其様子を形容すると、何も考へずに何か考へ込んでゐると云ふ風であつた。所が九段下へ掛かつた頃から、長い首を時々伸ばして、或物を確かめたい様に、窓の外を覗き出した。敬太郎もつい釣り込まれて、見悪い外を透かす様に眺めた。やがて電車の中、窓硝子にあたりつて推ける雨の音が、ぼつり／＼と耳元でし始めた。彼は携へてゐる竹の洋杖を眺めて、この代りに雨傘を持つて来れば可かつたと思ひ出した。

彼は洋食店以後、中折を被つた男の人柄と、世の中に丸で疑ひを掛けてゐない其眼附とを注意した結果、此時不圖、こんな窮屈な思ひをして、入らざる材料を集めるよりも、いつそ露骨に此方から話し掛けて、當人の許諾を得た事實を田口に報告した方が、今更遅蒔きの様でも、まだ氣が利いてゐやしないかと考へて、自分で自分を彼に紹介する便法を工夫し始めた。其内電車はとう／＼終點迄来た。雨は益々烈しくなつたと見えて、車が留まるとぞあとといふ音が急に彼の耳を襲つた。中折の男は困つたなと云ひながら、外套の襟を立てて洋袴の裾を返した。敬太郎は洋杖を突きながら立ち上がった。男は雨の中へ出ると、直ぐ寄つて来る俥引を捕まへた。敬太郎も

後れない様に一臺雇つた。車夫は棍棒を上げながら、何處へと聞いた。敬太郎はあの車の後に附いて行けと命じた。車夫はへいと云つて無暗に馳け出した。一筋道を矢來の交番の下迄来ると、車夫は又棍棒を留めて、旦那何方へ行くんですと聞いた。男の乗つた車は幾何幌の内から延び上がつても影さへ見えなかつた。敬太郎は車上に洋杖を突つ張つた儘、雨の音のする中で方角に迷つた。

眼が覺めると、自分の住み慣れた六疊に、何時もの通り寐てゐる自分が、敬太郎には全く變に思はれた。昨日の出来事は凡て本當の様でもあつた。又纏まりのない夢の様でもあつた。もつと綿密に形容すれば「本當の夢」の様でもあつた。酔つた氣分で町の中に活動したといふ記憶も伴なつてゐた。夫よりか、酔つた氣分が世の中に充ち充ちてゐたといふ感じが一番強かつた。停留所も電車も酔つた氣分に充ちてゐた。寶石商も、革屋も、赤と青の旗振りも、同じ空氣に酔つてゐた。薄青いペンキ塗の洋食店の二階も、其所に席を占めた眉の間に黒子のある紳士も、色の白い女も、悉く此空氣に包まれてゐた。二人の話しに出て来る、何處にあるか分らない所の名も、男が女に遣る約束をした珊瑚の珠も、みんな陶然とした一種の氣分を帯びてゐた。最も此氣分に充ちて活躍したものは竹の洋杖であつた。彼が其洋杖を突いたまゝ、幌を打つ雨の下で、方角に迷つた時の心持は、此氣分の高潮に達した幕前の一區切りとして、殆ど狐から取り憑かれた人の

感じを彼に與へた。彼は其時店の灯で侘びしく照らされたびしよ濡れの往來と、坂の上に小さく見える交番と、其左手にぼんやり黒くうつる木立とを見廻して、果して是が今日の仕事の結末かと疑つた。彼は己むを得ず車夫に梶棒を向け直させて、思ひも寄らない本郷へ行けと命じた事を記憶してゐた。

彼は寐ながら天井を眺めて、自分に最も新しい昨日の世界を、幾順となく眼の前に循環させた。彼は二日酔いの眼と頭をもつて、蠶の絲を吐く様に夫から夫へと出てくる此記念の晝を飽かず見詰めてゐたが、仕舞には眼先に漂ふふはくした夢の蒼蠅さに堪へなくなつた。夫でも後から後からと向うで獨り勝手に現はれて来るので、彼は正氣でありながら、何かに魅入られたのではなからうかと云ふ疑ひさへ起した。彼は此淺い疑ひに關聯して、例の洋杖を胸に思ひ浮かべざるを得なかつた。昨日の男も女も彼の眼には繪を見る程明らかであつた。容貌は固より服装から歩き附きに至る迄、悉く記憶の鏡に判切と映つた。夫でゐて二人とも遠くの國にゐる様な心持がした。遠くの國にゐながら、つい近くにあるものを見るやうに、鮮やかな色と形を備へて眸を侵して來た。此不思議な影響が洋杖から出たかも知れないといふ神經を敬太郎は何處かに持つてゐた。彼は昨夕法外な車賃を食られて、宿の門口を潜つた時、何心なく其洋杖を持つた儘自分の室迄歸つ

て来て、是は人の目に觸れる所に置くべきものでないといふ顔をして、寐る前に、戸棚の奥の行李の後へ投げ込んで仕舞つたのである。

今朝は蛇の頭に夫程の意味がないやうにも思はれた。ことに是から田口に逢つて、探偵の結果を報告しなければならぬと云ふ實際問題の方が頭に浮いて來ると、猶更さういふ感じが深くなつた。彼は一日の午後から宵へ掛けて、妙に一種の空氣に酔はされた氣分で活動した自覺は慥かにあるが、いざ其活動の結果を、普通の人間が處世上に利用出来る様に、筋の立つた報告に纏める段になると、自分の引き受けた仕事は成效してゐるのか失敗してゐるのか殆ど分らなかつた。従つて洋杖の御蔭を蒙つてゐるのか、ぬないのかも判然しなかつた。床の中で前後を繰り返した敬太郎には、正しく其御蔭を蒙つてゐるらしくも見えた。又決して其御蔭を蒙つてゐない様にも思はれた。

彼は兎も角も二日酔の魔を拂ひ落としてからの事だと決心して、急に夜着を剥ぐつて跳ね起きた。夫から洗面所へ下りて氷る程冷たい水で頭をざあ／＼洗つた。是で昨日の夢を髪の毛の根本から振ひ落として、普通の人間に立ち還つた様な氣になれたので、彼は景氣よく三階の室に上つた。其所の窓を深く明け放した彼は、東向きに直立して、上野の森の上から高く射す太陽の光を

全身に浴びながら、十通許り深呼吸をした。斯う精神作用を人間並に刺激した後で、彼は一服しながら、田口へ報告すべき事柄の順序や條項に就いて力めて實際的に思慮を回らした。

二

突き留めて見ると、田口の役に立ちさうな種は丸で上がつてゐない様にも思はれるので、敬太郎は少し心細くなつて來た。けれども先方では今朝にも彼の報告を待ち受けてゐるやうに氣が急ぐので、彼は早速田口家へ電話を掛けた。是から直ぐ行つて可いかと聞くと、大分待たした後で、差支へないといふ答が、例の書生の口を通して來たので、彼は猶豫なく内幸町へ出掛けた。

田口の門前には車が二臺待つてゐた。玄關にも靴と下駄が一足宛あつた。彼は此間と違つて日本間の方へ案内された。其所は十疊程の廣い座敷で、長い床に大きな懸物が二幅掛かつてゐた。湯呑の様な深い茶碗に、書生が番茶を一杯汲んで出した。桐を剝つた手焙も同じ書生の手で運ばれた。柔らかい座蒲團も同じ男が勧めて呉れた丈で、女は一切出て來なかつた。敬太郎は廣い室の真中に畏まつて、主人の足音の近附くの窮屈に待つた。所が其主人は用談が果てないと見え、何時迄待つても中々現はれなかつた。敬太郎は己むを得ず茶色になつた古さうな懸物の價額

を想像したり、手焙の縁を撫で廻したり、或は袴の膝へさちりと兩手を乗せて一人改まつて見たりした。凡て自分の周囲があまり綺麗に調つてゐる丈に、居心地が新し過ぎて彼は容易に落ち附けなかつたのである。仕舞に違ひ棚の上にある畫帖らしい物を取り卸ろして覽ようかと思つたが、其立派な表紙が、是は裝飾だから手を觸れちや不可ないと斷る様に光るので、彼はつひに手を出し兼ねた。

斯う敬太郎の神經を悩ました主人は、彼を稍小一時間も待たした後で、漸く應接間から出て來た。

「何うも長い間御待たせ申して。——客が中々歸らないものだから」

敬太郎は此言譯に對して適當と思ふ様な挨拶を一口と、それに添へた丁寧な御辭儀を一つした。夫からすぐ昨日の事を云ひ出さうとしたが、何を何う先に述べたら都合が可いか、此場に臨んで急に又迷ひ始めたうちに、機を逸してしまつた。主人は又冒頭から左も忙しうに聲も身體も取り扱つてゐる癖に、何處か腹の中に餘裕の貯藏庫でもある様に、決して周章てて探偵の結果を聞きながらなかつた。本郷では氷が張るかとか、三階では風が強くなるだらうとか、下宿にも電話があるのかとか、調子は至極面白さうだけれども、其實詰らない事計り話しの種にした。敬太

郎は向うの間に從つて主人の満足する程度にわが答を運んでゐたが、相手は斯んな無意味な話しを進めて行くうちに、暗に彼の様子を注意してゐるらしかつた。其所迄は彼もぼんやり氣が附いた。然し主人が何故そんな注意を自分に拂ふのか、其譯は丸で解らなかつた。すると、

「何うです昨日は。旨く行きましたか」と主人が突然聞き出した。斯う聞かれるだらう位の腹は始めから敬太郎にも有つたのだが、正直に答へれば、「何うですか」といふ他を馬鹿にした生返事になるので、彼は一寸口籠もつた後、

「さうです御通知のあつた人丈は漸と探し當てました」と答へた。

「眉間に黒子がありましたか」

敬太郎は少し隆起した黒い肉の一點を局部に認めたと答へた。

「衣服も此方から云つて上げた通りでしたか。黒の中折に、霜降りの外套を着て」

「さうです」

「夫ぢや大抵間違ひはないでせう。四時と五時の間に小川町で降りたんですね」

「時間は少し後れた様です」

「何分位」

「何分か知りませんが、何でも五時餘つ程過ぎの様でした」
 「餘つ程過ぎ。餘つ程過ぎならそんな人を待つてゐなくても好いぢやありませんか。四時から五時迄の間と、わざ／＼時間を切つて通知して上げた位だから、五時を過ぎればもう貴方の義務は済んだも同然ぢやないですか。何故其儘歸つて、其通り報知しないんです」
 今迄穩やかに機嫌よく話してゐた長者から突然斯う手厳しく遣り附けられようとは、敬太郎は夢にも思はなかつた。

三

敬太郎は今迄下町出の旦那を眼の前に描いてゐた。夫が突然規律づくめの軍人として彼を威壓して来た時、彼は忽ち心の中心を狂はした。友達に對してなら云ひ得る「君の爲だから」といふ言葉も挨拶も有つてゐたのだが、此場合には夫が丸で役に立たなかつた。

「たゞ私の勝手で、時間が來ても其所を動かかなかつたのです」

敬太郎が斯う答へるか答へないうちに、田口は今の屹とした態度をすぐ崩して、

「そりや私の爲に大變都合が好かつた」と機嫌の好い調子で受けたが、然し貴方の勝手と云ふ

のは何です」と聞き返した。敬太郎は少し逡巡した。

「なに夫や聞かないでも構ひません。貴方の事だから。話したくなければ話さないでも差支へない」

田口は斯う云つて、自分の前に引き附けた手提煙草盆の抽出を開けると、其中から角で出來た細長い耳搔を搜し出した。それを右の耳の中に入れて、左も痒さうに搔き廻した。敬太郎は見ない振をしてわざと自分を見てゐるやうな、又耳丈に氣を取られてゐるやうな、田口の蹙面を薄氣味悪く感じた。

「實は停留所に女が一人立つてゐたのです」と彼はとう／＼面白して仕舞つた。

「年寄ですか、若い女ですか」

「若い女です」

「成程」

田口はたゞ一口斯う云つた丈で、何とも後を繼いで呉れなかつた。敬太郎も頓挫したなり言葉を途切らした。二人はしばらく差向ひの儘口を利かずゐた。

「いや、若からうが年寄だらうが、其婦人の事を聞くのは可くなかつた。夫は貴方丈に關係の

ある事なんでせうから、止しにしませう。私の方ぢや唯顔に黒子のある男に就いて、研究の結果さへ伺へば可いんだから」

「然し其女が黒子のある人の行動に始終入り込んでくるのです。第一女の方で男を待ち合はしてゐたのですから」

「はあ」

田口は一寸思ひも寄らぬといふ顔附をしたが、「ぢや其婦人は貴方の御知合でも何でもないのですね」と聞いた。敬太郎は固より知合だと答へる勇氣を有たなかつた。極りの悪い思ひをしても、見た事も口を利いた事もない女だと正直に云はなければならなかつた。田口はさうですかと、穏やかに敬太郎の返事を受けた丈で、少しも追窮する氣色を見せなかつたが、急に摧けた調子になつて、

「何んな女なんです。其若い婦人と云ふのは。器量からいふと」と興味に充ちた顔を提煙草盆の上に出した。

「いえ、なに、詰らない女なんです」と敬太郎は前後の行き掛り上答へて仕舞つて、實際頭の中でも詰らない様な氣がした。是が相手と場合次第では、うん器量は中々好い方だ位は固より云

ひ兼ねなかつたのである。田口は「詰らない女」といふ敬太郎の判断を聞いて、忽ち大きな聲を出して笑つた。敬太郎には其意味がよく解らなかつたけれども、何でも頭の上で大濤が崩れたやうな心持がして、幾分か顔が熱くなつた。

「宜御座んす、夫で。——夫から何うしました。女が停留所で待ち合はしてゐる所へ男が来て」田口は又普通の調子に戻つて、眞面目に事件の経過を聞かうとした。實をいふと敬太郎は自分が是から話す顛末を、何うして握る事が出来たかの苦心談を、先づ冒頭に敷衍して、二つある同じ名の停留所に迷つた事から、不思議な謎の活きて働く洋杖を、何う抱へ出して、何う利用したかに至る迄を、自分の手柄の成るべく重く響く様に、詳しく述べたかつたのであるが、會ふや否や四時と五時との行移で遣られた上に、勝手に見張りの時間を延ばした原因になる例の女が、原因にも何にもならない見ず知らずの女だつたりした不味い所があるので、自分を廣告する勇氣は全く抜けてゐた。夫で男と女が洋食屋へ入つてから以後の事丈を極淡泊話して見ると、宅を出る時自分が心配してゐた通り、少しも捕まへ所のない、恰も灰色の雲を一握り田口の鼻の先で開いて見せたと同じ様な貧しい報告になつた。

夫でも田口は別段厭な顔も見せなかつた。落ち附いた腕組を仕舞迄解かずに、只ふんとか、成程とか、夫からとか云ふ繋ぎの言葉を、時々敬太郎の爲に投げ込んで呉れる丈であつた。其代り報告の結末が来ても、まだ何か豫期してゐる様に、今迄の態度を容易に變へなかつた。敬太郎は仕方なしに「大丈夫です。實際詰らない結果で御氣の毒です」と言譯を附け加へた。

「いや大分参考になりました。何うも御苦勞でした。中々骨が折れたでせう」

田口の此挨拶の中に、大した感謝の意を含んでゐない事は無論であつたが、自分が馬鹿に見えつゝある今の敬太郎には是丈の愛嬌が充分以上に聞こえた。彼は辛うじて恥を搔かずに濟んだといふ安心を此時漸く得た。同時に垂味の出来た氣分が、すぐ田口に向いて働き掛けた。

「一體あの人は何なんですか」

「さあ何でせうか。貴方は何う鑑定しました」

敬太郎の前には黒の中折を被つて、襟開きの廣い霜降りのお外套を着た男の姿があり／＼と現れた。其人の様子といひ言葉遣ひといひ歩き附きといひ、何から何迄判切見えには見えなかつた。

田口に對する返事は一口も出て來なかつた。

「何うも分りません」

「ぢや性質は何んな性質でせう」

性質なら敬太郎にも略見當が附いてゐた。「穩やかな人らしく思ひました」と觀察の通りを答へた。

「若い女と話してゐる所を見て、さう云ふぢやありませんか」

斯う云つた時、田口の唇の角に薄笑の影がちら附いてゐるのを認めた敬太郎は、何か答へようとした口を又塞いで仕舞つた。

「若い女には誰でも優しいものですよ。貴方だつて満更經驗のない事でもないでせう。ことに彼の男と來たら、人一倍左うなのかも知れないから」と田口は遠慮なく笑ひ出した。けれども笑ひながらちやんと敬太郎の上に自分の眼を注いでゐた。敬太郎は傍で自分を見たら嘸氣の利かない愚物になつてゐるんだらうと考へながらも、矢つ張り苦しい思ひをして田口と共に笑はなければ居られなかつた。

「ぢや女は何物なんでせう」

田口は此所で觀察點を急に男から女へ移した。さうして今度は自分の方で敬太郎に斯ういふ質問を掛けた。敬太郎はすぐ正直に「女の方は男よりも猶分り悪いです」と答へて仕舞つた。

「素人だか黒人だか、大體の區別さへ付きませんか」

「左様」と云ひながら、敬太郎は一寸考へて見た。革の手袋だの、白い襟卷だの、美しい笑ひ顔だの、長いコートだの、續々記憶の表面に込み上げて來たが、それを綜べ括つた所で何處からも此間に應ぜられる様な要領は得られなかつた。

「割合に地味なコートを着て、革の手袋を穿めて居ましたが……」

女の身に着けた品物の中で、特に敬太郎の注意を惹いた此二點も、田口には何の興味も與へないらしかつた。彼はやがて眞面目な顔をして、「ぢや男と女の關係に就いて何か御意見はありませんか」と聞き出した。

敬太郎は先刻自分の報告が滞りなく濟んだ證據に、御苦勞さまと云ふ謝辭さへ受けた後で、斯う難問が續發しようとは毫も思ひ掛けなかつた。しかも窮してゐる所爲か、それが順を逐つて一段六づかしい方へ競り上がつて行く様に感ぜられてならなかつた。田口は敬太郎の行き詰まつた様子を見て、再び同じ問を外の言葉で説明して呉れた。

「例へば夫婦だとか、兄弟だとか、又はたゞの友達だとか、情婦だとかですね。色々な關係があるうちに何だと思ひますか」

「私も女を見た時に、處女だらうか細君だらうかと考へたんですが……然し何うも夫婦ぢやない様に思ひます」

「夫婦でないにしてもですね。肉體上の關係があるものと思ひますか」

五

敬太郎の胸にも此疑ひは最初から多少萌さないでもなかつた。改めて自分の心を解剖して見たら、彼等二人の間に祕密の關係が既に成立してゐるといふ假定が遠くから彼を操つて、それが爲に偵察の興味が一段と鋭く研ぎ澄まされたのかも知れなかつた。肉と肉の間に起る此關係を外にして、研究に價する交渉は男女の間に起り得るものでないと主張する程彼は理論家ではなかつたが、暖かい血を有つた青年の常として、此觀察點から男女を眺めるときに、始めて男女らしい心持が湧いて來るとは思つてゐたので、成るべく其所を離れずに世の中を見渡したかつたのである。年の若い彼の眼には、人間といふ大きな世界があまり判切分らない代りに、男女といふ小さな宇

宙は斯く鮮やかに映つた。従つて彼は大抵の社會的關係を、出来る丈此一點迄切り落として楽しんでゐた。停留所で逢つた二人の關係も、敬太郎の氣の附かない頭の奥では、既に斯ういふ一對の男女として最初から結び附けられてゐたらしかつた。彼は又其背後に罪惡を想像して要もないのに恐れを抱く程の道德家でもなかつた。彼は世間並な道義心の所有者として有り觸れた人間の一人であつたけれども、其道義心は彼の空想力と違つて、いざといふ場合にならなければ働かないのを常とするので、停留所の二人を自分に最も興味のある男女關係に引き直して見ても、別段不愉快にはならず済んだのである。彼はたゞ年齢の上にて二人の相違の著しいのを疑つた。が、又一方では其相違が却て彼の眼に映ずる「男女の世界」なるものの特色を濃く示してゐる様にも見えた。

彼の二人に對する心持は知らず／＼の間に斯う弛んでゐたのだが、愈さうかと正式に田口から質問を掛けられて見ると、斷然とした返答は、責任のあるなしに拘らず、纏まつた形となつて頭の中には現はれ惡かつた。それで斯う云つた。

「肉體上の關係はあるかも知れませんが、無いかも分かりません」

田口は唯微笑した。其所へ例の袴を穿いた書生が、一枚の名刺を盆に載せて持つて來た。田口

は一寸夫を受取つた儘、「まあ分らない所が本當でせう」と敬太郎に答へたが、すぐ書生の方を見て、「應接間へ通して置いて……」と命令した。先刻から餘程窮してゐた矢先だから、敬太郎はこの來客を好い機に、もう此所で切り上げようと思つて身繕ひに掛かると、田口はわざ／＼彼の立たない前に夫を遮つた。さうして敬太郎の辟易するのに頓着なく猶質問を進行させた。其内で敬太郎の明瞭に答へられるのは殆ど一ヶ條もなかつたので、彼は大學で受けた口答試験の時よりもまだ辛い思ひをした。

「ぢや是限りにしますが、男と女の名前は分りましたらう」

田口の最後と斷つた此間に對しても、敬太郎は固より満足な返事を有つてゐなかつた。彼は洋食店で二人の談話に注意を拂ふ間にも何々さんとか何々子とか或は何かとかいふ言葉が屹度何處かへ交つて來るだらうと心待ちに待つてゐたのだが、彼等は特にそれを避ける必要でもある如くに、御互の名は勿論、第三者の名も決して引合ひにさへ出さなかつたのである。

「名前も全く分りません」

田口は此答を聞いて、手焙の胸に當てた手を動かしながら、拍子を取るやうに、指先で桐の縁を敲き始めた。それを少時繰り返した後で、「何うしたんだか餘り要領を得ませんね」と云つたが、

直ぐ言葉を繼いで、「然し貴方は正直だ。其所が貴方の美點だらう。分らない事を分つた様に報告するよりも餘つ程好いかも知れない。まあ買へば其所を買ふんですね」と笑ひ出した。敬太郎は自分の觀察が、果して實用に向かなかつたのを發見して、多少わが迂濶に恥ぢ入る氣も起つたが、然し僅か二三時間の注意と忍耐と推測では、たとひ自分より十層倍行き届いた人間に代理を頼んだ所で、田口を満足させる様な結果は得られる譯のものでないと固く信じてゐたから、此評價に對して夫程の苦痛も感じなかつた。其代り正直と賞められた事も大した嬉しさにはならなかつた。此位の正直さ加減は全くの世間並に過ぎないと彼には見えただからである。

六

敬太郎は先刻から頭の上がらない田口の前で、たつた一言で好いから、思ひ切つた自分の腹をずばりと云つて見たいと考へてゐたが、此所で云はなければ最う云ふ機會はあるまいといふ氣が此時不圖萌した。

「要領を得ない結果計りで私も甚だ御氣の毒に思つてゐるんですが、貴方の御聞きになる様な立ち入つた事が、あれ丈の時間で、私の様な迂濶なものに見極められる譯はないと思ひます。斯

ういふと生意氣に聞こえるかも知れませんが、あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直かに會つて聞きたい事丈遠慮なく聞いた方が、まだ手数が省けて、さうして動かない確かな所が分りやしないかと思ふのです」

是丈云つた敬太郎は、定めて世故に長けた相手から笑はれるか、冷やかされる事だらうと考へて田口の顔を見た。すると田口は案外にも寧ろ真面目な態度で「貴方に夫丈の事が解つてゐましたか。感心だ」と云つた。敬太郎はわざと答を控へてゐた。

「貴方のいふ方法は最も迂濶の様で、最も簡便な又最も正當な方法ですよ。其所に氣が附いて居れば人間として立派なものです」と田口が再び繰り返した時、敬太郎は益返答に窮した。

「夫程の考へがちゃんとする貴方に、あんな詰らない仕事を御頼みしたのは私が悪かつた。人物を見損なつたのも同然なんだから。が、市藏が貴方を紹介する時に、さう云ひましたよ。貴方は探偵の遣るやうな仕事に興味を有つて御出でだつて。夫でね、つい飛んでもない事を御願ひして。止しやあ可かつた……」

「いえ須永君にはさう云ふ意味の事を慥かに話した覚えがあります」と敬太郎は苦しい思ひをして答へた。

「左様でしたか」

田口は敬太郎の矛盾を此一句で切り棄てたなり、夫以上に追窮する愚を敢てしなかつた。さうして問題をすぐ改めて見せた。

「ぢや何うでせう。黙つて後などを跟けずに、貴方のいふ通り尋常に玄關から掛かつて行つちや。貴方に夫丈の勇氣がありますか」

「無い事ありません」

「あんなに跟け廻した後で」

「あんなに跟け廻したつて、私はあの人達の不名譽になる様な觀察は決して爲てゐない積りです」

「御尤もだ。そんなら一つ行つて御覽なさい。紹介するから」

田口は斯う云ひながら、大きな聲を出して笑つた。けれども敬太郎には此申し出が萬更の冗談とも思へなかつたので、彼は紹介状を携へて本當に眉間の黒子と向き合つて話して見ようかといふ料簡を起した。

「會ひますから紹介状を書いて下さい。私は彼の人と話して見たい氣がしますから」

「宜いでせう。是も經驗の一つだから、まあ會つて直かに研究して御覽なさい。貴方の事だから田口に頼まれて此間の晩後を跟けました位屹度云ふでせう。然し夫は構はない。云ひたければ云つても宜う御座んす。私に遠慮は要らないから。夫から彼の女との關係もですね、貴方に勇氣さへあるなら聞いて御覽なさい。何うです、それを聞く丈の度胸が貴方にありますか」

田口は此所で一寸言葉を切らして敬太郎の顔を見たが、答の出ないうちに又自分から話を續けた。

「だが兩方とも口へ出せる様に自然が持ち掛けて来る迄は、聞いても話しても不可せせんよ。いくら勇氣があつたつて、常識のない奴だと思はれる丈だから。夫所ぢやない、彼の男は唯でさへ随分會ひ悪い方なんだから、そんな事を無暗に喋らうものなら、直ぐ歸つて呉れ位云ひ兼ねないですよ。紹介をして上げる代りには、其所いらは能く用心しないとね……」

敬太郎は固より畏まりましたと答へた。けれども腹の中では黒の中折の男を田口の様に見る事が何うしても出来なかつた。

田口は祝箱と巻紙を取り寄せて、さら／＼と紹介状を書き始めた。やがて名宛を認め終ると、「たゞ通り一遍の文言丈並べて置いたら夫で好いでせう」と云ひながら、手焙の前に翳した手紙を敬太郎に読んで聞かせた。其中には書いた當人の自白した如く、是といつて特別の注意に價する事は少しも出て來なかつた。只此者は今年大學を卒業した許りの法學士で、事によると自分が世話をしなければならぬ男だから、何うか會つて話しをして遣つて呉れとある丈だつた。田口は異存のない敬太郎の顔を見届けた上で、すぐ其巻紙をぐる／＼と巻いて封筒へ入れた。それから其表へ松本恒三様と大きく書いたなり、わざと封をせずに敬太郎に渡した。敬太郎は眞面目になつて松本恒三様の五字を眺めたが、肥つた締りのない書體で、此人が斯んな字を書かと思ふ程拙らしく出來てゐた。

「さう感心して何時迄も眺めてゐちやあ不可ない」

「番地が書いてない様ですが」

「あ、左うか。そいつは私の失念だ」

田口は再び手紙を受け取つて、名宛の人の住所と番地を書き入れて呉れた。

「さあ是なら好いでせう。不味くつて大きな所は土橋の大壽司流とでも云ふのかな。まあ役に

立ちさへすれば可からう、我慢なさい」

「いえ結構です」

「序に女の方へも一通書きませうか」

「女も御存じなのですか」

「ことによると知つてるかも知れせん」と答へた田口は何だか意味のありさうに微笑した。

「御差支へさへなければ、御序に一本書いて頂いても宜しう御座います」と敬太郎も冗談半分に頼んだ。

「まあ止した方が安全でせうね。貴方のやうな年の若い男を紹介して、もし間違ひでも出來ると責任問題だから。浪漫——何とか云ふぢやありませんか、貴方のやうな人の事を。私や學問がないから、今頃流行るハイカラな言葉を直ぐ忘れちまつて困るが、何とか云ひましたつけね、あの小説家の使ふ言葉は……」

敬太郎はまさか夫や斯う云ふ言葉でせうと教へる氣にもなれなかつた。唯エへ、と馬鹿見た様に笑つてゐた。さうして長居をすればする程、段々非道く冷やかされさうなので、心の内では、此一段落が附いたら、早く切り上げて歸らうと思つた。彼は田口の呉れた紹介状を懷に收めて、

「では二三日内に是を持って行つて参りませう。其模様で又何ふ事に致しますから」と云ひながら、柔らかな座蒲團の上を滑り下りた。田口は「何うも御苦勞でした」と丁寧にあやまらした。ロマンチックもコスメチックも悉皆忘れてしまつたといふ顔附をして立ち上がった。

敬太郎は歸り途に、今會つた田口と、是から會はうといふ松本と、夫から松本を待ち合はした例の恰好の可い女とを、合はせたり離したりして頻りに其關係を考へた。さうして考へれば考へる程一步宛迷宮の奥に引き込まれる様な面白味を感じた。今日田口での獲物は松本といふ名前であるが、此名前が色々に錯綜した事實を自分の爲に締め括つてゐる妙な囊の様に彼には思へるので、其所から何が出るか分らない丈夫丈彼には楽しみが多かつた。田口の説明によると、近寄り悪い人の様にも聞こえるが、彼の見た所では田口より數倍話しが爲易さうであつた。彼は今日田口から得た印象のうちに、人を取扱ふ點に掛けて成程老練だといふ嘆美の聲を見出した上、人物としても何處か偉さうに思はれる點が、時々彼の眼を射る様にちら／＼輝いたにも拘らず、其前に坐つてゐる間、彼は始終何物にか縛られて自由に動けない窮屈な感じを取り去る事が出来なかつた。絶えず監視の下に置かれた様な此状態は、一時性のものでなくつて、幾何面會の度數を重ねても、決して薄らぐ折はなからうと迄彼には見えた位である。彼は斯ういふ風に氣の置け

る田口と反對の側に、何でも遠慮なく聞いて怒られさうにない、話し聲其物のうちに既に懐かし味の籠もつた様な松本を想像して已まなかつた。

八

翌朝早速支度をして松本に會ひに行かうと思つてゐると生憎寒い雨が降り出した。窓を細目に開けて高い三階から外を見渡した時分には、もう世の中が一面に濡れてゐた。屋根瓦に徹る様な侘びしい色をしばらく眺めてゐた敬太郎は、田口の紹介状を机の上に置いて、出ようか止さうかと一寸思案したが、早く會つて見たいといふ氣が強くなるので、とう／＼机の前を離れた。さうして豆腐屋の喇叭が、陰氣な空氣を割いて鋭く往來に響く下の方へ降りて行つた。

松本の家は矢來なので、敬太郎は此間の晩狐に撮まれたと同じ思ひをした交番下の景色を想像しつゝ、其所へ來ると、坂下と坂上が兩方共二股に割れて、勾配の附いた真中丈がびつに膨れてゐるのを發見した。彼は寒い雨の袴の裾に吹き掛けるのも厭はずに足を留めて、あの晩車夫が梶棒を握つた儘立往生をしたのは此邊だらうと思ふ所を見廻した。今日も同じ様に雨がざあ／＼落ちて、彼の踏んでゐる土は地下の鉛管迄腐れ込む程濡れてゐた。たゞ晝丈に周圍は暗いながら

も明るいで、立ち留まつた時の心持は此間とは丸で趣きが違つてゐた。敬太郎は後の方に高く黒ずんでゐる目白臺の森と、右手の奥に朦朧と重なり合つた水稻荷の木立を見て坂を上がつた。それから同じ番地の家の何軒でもある矢來の中をぐる／＼歩いた。始めのうちは小さい横町を右へ折れたり左へ曲がつたり、濡れた枳殻の垣を覗いたり、古い椿の生ひ被さつてゐる墓地らしい構の前を通つたりしたが、松本の家は容易に見當たらなかつた。仕舞に尋ねあぐんで、ある横町の角にある車屋を見附けて、其所の若い者に聞いたら、何でもない事の様によく教へて呉れた。松本の家は此車屋の筋向うを這入つた突當りの、竹垣に圍はれた綺麗な住居であつた。門を潜ると子供が太鼓を鳴らしてゐる音が聞こえた。玄關へ掛かつて案内を頼んでも其太鼓の音は毫も已まなかつた。其代り四邊は森閑として人の住んでゐる臭さへしなかつた。雨に鎖された家の奥から現はれた十六七の下女は、手を突いて紹介状を受取つたなり無言の儘引つ込んだが、少時してから又出て来て、「甚だ勝手を申し上げて済みませんで御座いますが、雨の降らない日に御出でを願へますまいか」と云つた。今迄就職運動のため諸方へ行つて断られ附けてゐる敬太郎にも、此断り方丈は不思議に聞こえた。彼は何故雨が降つては面會に差支へるのか直ぐ反問したくなつた。けれども下女に議論を仕掛けるのも一種變な場合なので、「ぢや御天氣の日に伺へば御目に掛

かれるんですね」と念晴しに聞き直して見た。下女は唯「はい」と答へた丈であつた。敬太郎は仕方なしに又雨の降る中へ出た。ざあと云ふ音が急に烈しく聞こえる中に、子供の鳴らす太鼓が未だどん／＼と響いてゐた。彼は矢來の坂を下りながら變な男が有つたものだといふ觀念を數度繰り返した。田口が唯でさへ會ひ悪いと云つたのは、斯んな所を指すのではなからうかとも考へた。其日は家へ歸つても、氣分が中止の姿勢に餘儀なく据ゑ附けられた儘、何の方角へも進行出來ないのが苦痛になつた。久し振に須永の家へでも行つて、此間からの顛末を茶話に半日を暮らさうかと考へたが、何うせ行くなら、今の仕事に一段落附けて、自分にも見當の立つた筋を吹聴するのでなくては話しばいもしないので、遂に行かず仕舞ひにしてしまつた。翌日は昨日と打つて變つて好い天氣になつた。起き上がる時、あらゆる濁りを雨の力で洗ひ落とした様に綺麗に輝く蒼空を、眩さうに仰ぎ見た敬太郎は、今日こそ松本に會へると喜んだ。彼は此間の晩行李の後に隠して置いた例の洋杖を取り出して、今日は一つ是を持つて行つて見ようと思へた。彼はそれを突いて、又矢來の坂を上がりながら、昨日の下女が今日も出て来て、折角ですが今日は御天氣過ぎますから、最少曇つた日に御出で下さいましと云つたら何んなものだらうと想像した。